

# 魔法戦姫Lyricシンフォギア

アメリカ兔

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

六年前——ひとりの男が少女を救うために完全聖遺物へと立ち向かった。

同じくして六年前。もうひとりの男が祝福の風を救った。

そして、二年前。その二人の部下が、一人の戦士を支えた。

時空管理局。そして、特異災害対策機動部二課。

対するは、広域次元犯罪組織クレイモア。多国籍テロ組織アインフェリアル。そして、錬金術士。

正義の敵は、いつだって——。

※ クロスオーバー作品には初挑戦となるので至らない点があるかと思いますが温かい目で見守ってくれると幸いです。

## 目次

キャラクター設定・用語解説(08/10追記)	1
プロローグ トリックスター	5
平和な平和な日本	9
広域次元犯罪組織クレイモア	14
接触	21
目は口ほどにモノを言う	26
無名、其の名は幻槍	32
開演にして開戦の狼煙	38
少女達の挽歌	43
惨劇を越えて	49
序章：閉幕	56
ルナアタック編 魔術と唄のコンチエルト	
Tr. 1 喫茶店よろづ	61
Tr. 2 ノイズキャンセラー	69
Tr. 3 裏方コンビの連携力	74
Tr. 4 焼きたてクッキーモンスター	79
Tr. 5 平穩。その裏に潜む不穩	84
Tr. 6 財布に優しい台所	92
Tr. 7 フレームデバイス	98
Tr. 8 虎の威を駆る狐	105
Tr. 9 騎兵、ライダー	111
Tr. 10 血の巡らない人のカタチ	116
Tr. 11 特務次元航行隊の平和な一時	122

T r .	2 6	狐影奮闘	209
T r .	2 5	サクリストD	203
T r .	2 4	悪魔の狼藉	198
T r .	2 3	警鐘——アラートサイレン	192
T r .	2 2	緋翼、降臨	186
T r .	2 1	一夜を明かし、変わらぬ日々へ	181
T r .	2 0	思考、錯綜	174
T r .	1 9	風声鶴唳	168
T r .	1 8	死線、月下に集う	162
T r .	1 7	蒼の邂逅	157
T r .	1 6	疾駆	151
T r .	1 5	贖罪と冤罪と免罪と現在と	145
T r .	1 4	狐の隊長、仏の副長	140
T r .	1 3	前進の襲撃	134
T r .	1 2	復活の片翼	128

## キャラクター設定・用語解説（08／10追記）

所属：時空管理局・特異災害対策機動部二課

主人公 柳クルヴィス

年齢 二十二歳

性別 男性

デバイス 量産型アームドデバイス（十文字槍）

所属 時空管理局管轄外惑星地球極東支部

髪の色 金

瞳の色 緑

好きな暗器 鉄扇

備考 古くから日本の権力者に仕えていた暗部（俗に言う忍者）の一族である柳家の末裔。家柄の関係で緒川家や風鳴の防人一族とは別部門ではあるが交流があった。現在の当主は柳之蓮。

使用しているデバイスは管理局から支給される一般的なスピア型アームドデバイスだが、そのシステムは改良されており、形状も変化している。使用できる魔法も幻術魔法のみとピーキーな性能ではあるが、クルヴィス自身の身体能力も相まって陸戦近接戦闘では守護騎士達に勝るとも劣らない。保有魔力ランクはB+。魔導師ランクはBであるが、詐称ではないかともつばらの噂。階級は三等陸佐。

使用魔法（01／21追記分）

幻術：クルヴィスの代名詞。主にデバイスの模倣、或いは幻影に用いる。戦闘強度に耐えうる複製品の精製は十五本が限界。

虎砲：近接砲撃魔法。Aランク。砲撃クラスにまで集中させた魔力であるにも拘らず、ゼロ距離かつ瞬間的な魔力放出である為に、なのは曰く『砲撃魔法としては見る影もない』とされている（スバルのデイベインバスターよりも射程距離は短い）。だが、クルヴィス自身の体術と組み合わせることで真価を発揮する必殺。なお、この一撃を外すと後がない。或いは戦闘が長引くと威力の低下が著しい為滅多なことでは使用しない。

鏡花：幻術の応用。相手の射撃を屈折させる膜を発生させる。砲撃

の射線を逸らしたり、マジックミラーのように自らの姿を隠すことが出来る。燃費はよろしくない。集中力も使うので長時間は、とてもしんどい。

所属：クレイモア

名前 グレイ・ヴァン・デューメント

年齢 不詳（外見年齢二十代後半）

性別 男性

デバイス アームドデバイス：デユラハン

レアスキル F R E E Z E

役職 クレイモア団長

髪の色 灰色

瞳の色 赤

好きな獲物 困難に全力でぶち当たる手負いの獣

備考 広域次元犯罪組織クレイモアの創設者の一人であり、生粋の戦闘狂であり戦闘民族デューメント一族最後の生き残り。カリスマ性、統率力、戦闘能力、どれをとってもエース級であり、レアスキル『FREEZE』は停止空間の生成。推定魔導士ランクはSランク、保有魔力量はSSランクと管理局が観測している次元犯罪者の中でも最高位に位置していることから、生死問わずの捕縛対象とされている。本人の性格は意外にも身内に甘い。時折出身の独特な訛りが出る。

名前 ルード・ヴァサリア

年齢 二十六歳

性別 男性

デバイス アームドデバイス：イラ

レアスキル プレデター

役職 クレイモア総長（副団長）

髪の色 銀

瞳の色 赤

好きな飲み物 スポーツ飲料

備考 時空管理局に復讐を誓っている近代ベルカ式の魔導師。魔導拳闘術、ファイネスト・アーツのミドル級二冠を達成するほどの拳闘家だったが、失踪。現在はクレイモアの副団長を務めており、実質的なナンバー2である。保有魔力ランクは推定S+。魔導師ランクは推定A A+。

名前 フェレン・ファルツ

年齢 三十七歳

性別 男性

デバイス アームドデバイス：ガルーダ

役職 クレイモア協力者

髪の色 赤

瞳の色 青

好きな鳥 ダチョウ

備考 クレイモアと行動を共にしている違法魔導士。特務航空戦技教導隊ブルーバード副隊長、ストラ・イーグルとは同郷の出身であり、大の仲良し。左目は全盲のため、常に閉じられている。魔力変換資質炎熱の保有者であり、戦闘の際は右肩に緋色の羽根を広げることから『緋翼』と称されている。性格は裏表のない好漢。生涯において全力を出せる戦いを望んでおきながら常に本気で事に臨む。推定陸戦Aランク。保有魔力量もAランク。

用語説明

ノイズキャンセラー：時空管理局の技術を用いた、特異災害対策専門デバイス。クルヴィスの所有する試作型一本のみが使用されている。形状は二又槍。一定範囲内のノイズを実体化させ、炭素転換を自己完結させる演算空間を発生させる。その機能一点に全ての性能を割いており、戦闘における使用強度は高いとは言えない。

ファイネスト・アーツ：魔導拳術。無手による魔術使用を主体とした戦闘技能。拳による打撃のみの戦闘技法とされ、一部の次元世界ではスポーツとして広く名が知られており主流。しかし、その戦闘技法も条件を逸脱すれば凶器に勝る武器となる。

喫茶店よろづ：私立リディアン音楽院から少々離れた商店街の一角で経営している、喫茶店とは名ばかりの憩いの場。店主が趣味で経営しており、リディアン生徒達からは親しまれている。経営者は名を明かさず、顧客からは「マスター」と呼ばれている。

フレームデバイス：管理局の回収していた人造人間の基礎骨格。自己学習型の知能を兼ね備えており、それによる人間との対立で次元世界を崩壊へ導いたロストログア。クレイモアが奪取後、米国の聖遺物研究機関へと持ち込まれて三機のデバイスが製造された。

世界万国珍妙奇々怪々デザートフェスティバル：二年に一度開催される、世界中の奇天烈発想から生み出される混沌。前年度は欧米のマリンデビルフィッシュユドケーキが会場を悲鳴一色に染め上げたことで文句なしの優勝となったが、今年度はバーニングカルデラチョコホールが審査員の手元に到着するまえに容器ごと溶けたという珍事件により文字通り熱いデッドヒートを繰り広げたものの、インドからの刺客、マハーバーラータバルファイが優勝をもぎ取った。常識を逸した「カレーはデザート」という発想により審査員の味覚をことごとく香辛料による破壊力で蹂躪した。



## プロローグ トリックスター

——この世には善意と悪意ってのがあろうと思う。

柳クルヴィスは時空管理局本局からの招集命令により、ミッドチルダ首都クラナガンの地上勤務から離れていた。

どうせまた何か嫌な些末事をネチネチと言われるだけであろうことは容易に想像していたし、覚悟もしていた。彼の年齢は二十。階級は三等陸佐。年齢からすればエリート、或いは有能と言って差し支えない。魔導師ランクはB。保有魔力もまたAランクに乗らない程度のB+だ。平均よりやや優れている魔力保有に格付けされたランクは柳クルヴィスの管轄している部隊、情報査察部の業務には左右されない。むしろ観察眼や洞察力、行動力などが重要視される。

ぼんやりと考えながら柳クルヴィス三等陸佐はこれはまた立派なデスクに肘を乗せながら書類に目を通して、一向に目を合わせようとしない管理局の上層部を前に直立不動を決め込んでいた。会話はごく少数。

以下、その内容を端的にまとめたものである。

「クルヴィス三佐。君、確か地球という惑星の出身だったよね」

「ええまあ」

「そこで起きた六年前の事件、覚えてるかな」

「山程ありますが」

「えー、となんだったか……あったあった。これだ。米国連邦聖遺物研究機関で起きた一連の事件について」

「知っています」

「ま、それはどうでもいいんだ。重要なのはどちらかと言うところだな。闇の書事件」

「そりやもう」

——繰り返すが、この世には善意と悪意がある。

「んー、まあ事実上。地球は管轄外惑星だ。なんせ現地の技術力で他次元への干渉手段が無い。でもそこじや聖遺物なんてものがあるんだらう？ しかも現地で管理されているって話じゃないか。だがこ

ちらではまったくもって未知の技術力だ」

「はあ」

「そこで、だ。君、来月から地球勤務ね」

「……はあ」

——再三、繰り返すようになるが、この世には善意と悪意があると思う。

「君の任務は、地球で確認されている聖遺物の研究と解析。勿論現地で自由に活動してもらって構わない。それと並行して地球で起こる違法魔導師関連の事件への対処」

「まあ妥当なところですね」

ここまでではいい。許せるし、許容の範囲内だ。柳クルヴィスはデバイスマイスターの資格も持ち合わせている。類まれなマルチスキルの持ち主であり、人手不足の地上においては重宝される人材だ。

——その時のコレは、間違いなく悪意があったと思っている。

「で、だ。基本戦力は君一人ね」

「……そっすか」

「勘違いしてもらって困るけれど、あくまでも。あくまでも、だ。時空管理局という組織の代表として。君には現地赶赴ってもらう。数年前に時空管理局が接触を試みた結果が、六年前の事件だからね。特務隊で被害も出たことだし。それにジュエルシード事件とかも」

「あーそっすねー」

「なので。基本的にこちらから人材の補充とかは無いと思ってくれとかまわない」

——いや、かまわないじゃなくてかまってくれ。ヘルプだ俺。

クルヴィスは心中で愚痴を漏らしていた。

「まあ大丈夫だよ。君なら出来るさ。地球には高町なのはこの心強い戦力も在住している。加えて、八神はやて。更にはフェイト・T・ハラOWNとこれ以上ない心強い戦力があるんだ。本局から追加戦力なんていらないだろう?」

「認定特異災害についての対策は?」

「ああ、そうだ。忘れていた。その對抗策についてだけでも、それも

君の職務に含まれる」

——死ねばいいのに。クルヴィスは危うく喉元まで出てきた言葉を飲み込んだ。

「現状では時空管理局の技術力を持ってしても地球特有の認定特異災害『ノイズ』への対抗手段が無い状態だ。その対抗策を講じている余裕など有りはしない。だが、管轄外惑星が発生源の災害が他の次元世界でも確認されている状況だ。それに我々時空管理局が対抗策を持ち合わせていないという現状はあまりにも危険過ぎる。なので、君はその対抗策を練ってもらいたい」

「対抗策が出来た場合は？」

「ポーナスくらい出ると思うよ」

思う、じゃなくて出せよケチくせえな。クルヴィスは壁のシミでも数えようかなと現実逃避し始めた。

確かにそうだ。認定特異災害ノイズの出す時空管理局への被害状況は優先順位で言えばあまりにも低い。しかし、実際に遭遇した管理局職員は対抗策が無いまま一般人と同じく逃げる他にないのも現状である。それを快く思う時空管理局上層部など居るはずもない。現地の魔導師に丸投げして怨み辛みを買ってもらおうという魂胆が見え隠れしていた。確かに遺族関連とか面倒だもんねーしようがないよねー、うんうん。死ねばいいのに。クルヴィスは夕飯の献立を考えながら話を聞き流していた。

「まず君の最初の任務は、管轄外惑星地球の極東支部へ赴くこと。そして、特異災害対策機動部二課への接触。時空管理局の代表としてこの組織を監視。活動内容としては聖遺物の研究と解析データの送信。現地では基本的に自由に行動して構わない。人員の補充は原則、無しだ。現地での戦力“のみ”で事態へ当たること。だが報告書は定期的に提出してもらおう。協力者であるアリサ・バニングスと月村すずかの両名の助力があれば十分に可能とみられる。最重要点は二つ。一つ。現状の管理局のデバイス技術で認定特異災害ノイズへの対抗策を考案、実践。成功させて確立させること。二つ。聖遺物データの研究と解析の送信。以上だ。何かあるか」

「死ねばいいのに」

『特に何もありません』

本音と建前が念話と会話で逆転するという器用な真似をしたクル  
ヴィスに、部屋に沈黙が訪れる。

「……俺、なにか言いました?」

「いや、なにも」

「長期任務とみて間違いないですか」

「ああ」

「了解しました。柳クルヴィス三等陸佐。謹んでお受けしましょう」

『滅ばねえかな次元世界』

「……君、器用な真似するね」

人間の脳みそは通常、二つの会話を同時に処理できるほど器用に出  
来ていない。どちらか片方に傾けられる耳が念話と発声の両方で混  
乱していた。時空管理局魔導師のマルチタスクがあるにしても、クル  
ヴィスの情報処理能力は頭一つ抜けている。そんな彼にしてみれば  
地上の情報査察部は天職だったと言えよう。

柳クルヴィス三等陸佐をキツネと例えるものは数知れず、彼の異名  
は『トリックスター』であり唯一得意とする魔法は幻術魔法。の“  
”というピーキーな資質は時空管理局の中においても異彩を放ってい  
た。

——こうして。柳クルヴィス三等陸佐の苦難と困難、そして激務の  
日々が始まりを告げることとなる。

## 平和な平和な日本

クルヴィス三等陸佐はミッドチルダを離れるにあたり、まずは部署の部下達にも伝達していた。新任の部隊長が近々派遣されること、そして暇があったら顔を出すことも。若輩者ではあるが人の使い方が上手い事から、年下である隊長を不快に思う者は逆に少ない。しかし、それが却って面白くない上司は数多い。それでもクルヴィス三等陸佐を正面切って敵に回そうと動くものはいなかった。

役職の都合により、管理局内でも親睦を深めようとする物好きはいない。だが、クルヴィス三等陸佐の人柄の良さ、親しみやすさ。ユーモアスな一面はそんな情報査察部の面影を感じさせない。それすら計算済みなのかは当人のみを知ることだ。

クルヴィスが足を運んだのは情報査察部のオフィス。本局から戻ってきたクルヴィスは椅子に座り、デスクワークに勤しむなら深い溜息をこぼした。

「どうかしたんですか、クルヴィス三佐」

「来月から俺、地球に異動になったから今後の引き継ぎよろしく」

「随分とまた急ですね」

「だよー」

フランクな言動で交わされる雑談。それにさりげなく重要な話を入れるも、付き合いの長い副隊長との会話は流れるように交わされていた。

「では、新しい部隊長が配属ですか？」

「そうなるね。俺はこっちに顔出せることは少なくなると思うから、引き継ぎとかよろしくね」

「わかりました。送迎会の用意はどうします？」

「やってる余裕ないねえ、来月ってあつという間だし。俺も部屋の荷造りあるし」

「そうですね。残念です」

「俺も寂しくなるなあ。気に入ってたのに、この部署」

「でも地球は故郷なのでしょう？　ならいいじゃないですか」

「そうなんだけどさあ」

たまに消費していた有給で地球には戻っていたが、それはあくまでも部隊内への土産話など交流目的だ。こうして職務に戻る、となると話が違ふ。それも管理局の仕事として、認定特異災害の対抗策を講じること。それはつまり、死ぬと言われているのと対して変わらな

い。

「何分、本局から任された仕事の量が半端じゃないんだよね」

「それはまた、お気の毒に。気休めならいつでも聞きますよ、クルヴィス三佐」

「そりゃどうも、副隊長」

そして、二週間後にクルヴィス三等陸佐は情報査察部を離れて地球へと降り立つ。管轄外惑星地球。生まれ故郷にして新たな職場、慣れ親しんだ極東支部——日本でクルヴィスは身体を伸ばしていた。

六年前——米国で起きた完全聖遺物の暴走。米国連邦聖遺物研究機関に出向していた時空管理局の職員がいた。特務次元航行隊、その隊長にしてクルヴィスの元教官。ファルド・ヴェンカー一等空佐は当時の事件で重傷を負い、一度は管理局も地球での査察を取り止めた。認定特異災害のみならず、聖遺物に関する接触はリスクに見合うものが得られないとされている。だが、それだけの物をやはり諦めきれずにいるのだろう。

クルヴィスとて地球の現状を何も知らないわけではない。今でも世界中に聖遺物は散り散りになっているし、先史文明期などの論文もある程度は知識として知っている。だが、日本政府が抱えている特異災害対策機動部二課との接触をどうするべきかまでは決めていなかった。

『時空管理局のものなんですけれど』——などと、馬鹿正直に正面から声を掛けたところで疑問符浮かべて奇人変人のレッテルを貼られるのが関の山。確かに以前、時空管理局は二課へ接触を試みた事がある。その結果がどうなったかまでは不明だが、クルヴィスの知る所ではない。

「いらっしやいませー。翠屋へようこそ、ってクルヴィスさん？」  
「どうもー」

そんな小難しいことは甘いモノでも食べながらゆつくりと考えていればどうにでもなろう。柳クルヴィスは喫茶店『翠屋』へと訪れていた。理由は簡単。男だって甘いものが食べたい時がある。それだけだ。

客足の遠のく時間帯を見越して来店したのが功を奏したのか、貸し切り状態の店内では奥のテーブル席へと案内された。抹茶ケーキとコーヒーを注文して、クルヴィスは冷えた水で喉を潤すとリラックスする。

「なんだか珍しいですね、クルヴィスさんがうちに来るなんて」

「あ、俺今月から地球勤務になったんで今後ともよろしく。高町一等空尉」

「えっ?」

高町なのは一等空尉。現在は時空管理局航空戦技教導隊に所属している。地球に留まっているのは管理局として認定特異災害『ノイズ』の対策班でもあるからだ。地球出身の魔導師はほぼ現地入りしていると言ってもいい。だが、それはあくまでも本来の任務ではない。管理局の要請があればそちらに応じることが最優先となる為、クルヴィスの部下として扱えるかはまた別な話である。

「えっ? えーと、それはつまり」

「本格的に時空管理局もノイズに対する対策を取る気になった、ってこと。ま、原則として戦力俺一人なんだけど」

「大丈夫なの?」

「ダメかもねー、あっはっは」

今はまだ何も出来ない。笑って誤魔化すぐらいのことしかできそうもなかった。ノイズの脅威は、ミッドチルダ勤務のクルヴィスよりも地球で過ごしてきたの方がよく知っている。

バリアジャケットがあるにしても、ノイズの位相差障壁。そして炭素変換には無力だ。接近戦は愚の骨頂、自殺行為。かといって射撃魔法による抵抗も効果は薄い。それらに先んじて動いても特異災害対

策機動部二課が全て片付けてしまう。管理局として日本政府と繋がり  
の深い二課との接触は慎重になるべきだ。日本政府が黙認してく  
れるとも考え難い。そういった政治的観点からも時空管理局として  
の動きは大幅に制限されていた。

「でも、クルヴィスさんならなんとか出来るよ」

「そうだといいねえ。俺は高町一等空尉みたいなエースでもなければ  
ファルド一佐のようなストライカーでもなし。ほら、有名人って言っ  
ても俺なんて『平々凡々の三等陸佐』で通ってるし」

「地上だともっぱら『ランク詐称のトリックスター』って聞いてるんだ  
けど」

「違いますー、俺本当に陸戦ランクB+なんですー。魔導師ランクも  
Bなのはマジな話なんですよ」

「ホントかなあ……」

訝しむのはだが、時空管理局の登録されている情報ではクルヴィ  
スはその通りとされている。だがあくまでもランクは目安、個人の絶  
対評価ではない。それは、幻術魔法を唯一得意としている柳クルヴィ  
ス三等陸佐の持論でもあった。しかし、それとしてもなのはにはクル  
ヴィスの発言が怪しいと思える点がある。

「クルヴィスさんて、一時期本局の次元航行隊勤務だったことあるん  
だよな」

「……誰からその話を？」

「ファルドさんとロアさんが言ってたよ？ 『アイツはあんなんでも  
一線級の戦力だ』って」

「あちゃー、余計なことを……」

「というか、人を『あんなん』呼ばわりとは随分と酷い言われようだ。

「一時期。ほんつとうに短い間だったんですって」

「どれくらい？」

「二ヶ月から三ヶ月。ロア隊長の部下として」

ロア・ヴェステイージ一等空佐。特務次元航行隊の副隊長を務め  
る、通称を『紅鬼』或いは『クリムゾン・オブ・クラッシュャー』とさ  
れている。性格はサバサバとした兄貴分、面倒見は良くも悪くも適当



だ。一見、聞こえはいいものの、つまりはいい加減なのだ。その同期であり特務次元航行隊の隊長を務めるのがファルド・ヴェンカー一等空佐。

高町なのはが「不屈のエース・オブ・エース」であるならば、ファルド・ヴェンカー一等空佐は「不滅のエース・オブ・ストライカー」と呼ばれていた。航空戦技教導隊所属でもあり、なのはからすると上司に値する人物である。

「ま、本局の第一線部隊配属とか普通に考えたら死刑宣告ものですけどね」

じゃあなぜ生きてるんだと聞かれれば、クルヴィスは間髪入れずにこう答える——日頃の行いが良かったからだ、と。

そこでふと、思い出したようにクルヴィスはなのはに尋ねた。

「そういうえば、八神三佐は？」

「はやてちゃん？ 元気にしてるよ。今頃は多分——」

時計を見て、恐らくはいるであろう場所——。

「スーパーの特売セールに行ってるんじゃないかな」

「あー平和つすわー日本。こんな調子でお給料もらえねえかなー」

クルヴィスは天井を仰いでから、抹茶ケーキへと手を付けた。

## 広域次元犯罪組織クレイモア

その後、しばらく談笑してからクルヴィスは会計を済ませると翠屋を後にする。なのはの両親は現在地元を離れて旅行に出ているらしく、ここ一週間ほど切り盛りしているようだ。地元の人気店とは言え一人では厳しいのではないだろうか。だがそこははやて達が隙を見つけて訪れては手伝っているとのこと。それなら安心だ。

「さて。じゃあ俺は他の所にも挨拶回り行つてこようかね」

「いつてらつしやい、クルヴィスさん。またのご来店お待ちしております  
まーす」

「暇があつたらまた来るよ」

クルヴィスは翠屋を後にする。次の目的地へ向けて歩く。地球で活動する上で外せない相手がいた。

呼び鈴を鳴らす。間もなくして出てきたのは、リンディ・ハラオウン提督。現在はフェイトと地球で暮らしている。だがその肝心のフェイト・テスタロッツサ・ハラオウンは時空管理局の執務官として多次元世界で起きる事件を解決に導いていた。多忙な生活ゆえか、あまり地球には戻つてこれていない。

「あら、クルヴィス三佐？ 今日はどうかしたのかしら」

「どうも、リンディ提督。今月から地球勤務になったのでその挨拶に。あ、これどうぞ。つまらないものですけど」

「どうもご丁寧に——クルヴィス三佐？」

「なにか？」

「こういうお菓子、どこで見つけてくるの」

銘菓『つまらないもの』を手渡されたリンディ提督はなんとも言えない表情をしていた。だが、封を開けて一つ食べると気に入ったのか笑みが溢れている。ちなみにクルヴィスもどこで買ってきたのかよく覚えていない。道すがら、なにか土産を買おうと思つて立ち寄つた店だ。

お茶とよく合う饅頭を食べながらリンディ提督は緑茶に相変わらずのケミカル調味料を入れている。そればかりはクルヴィスも擁護できない。

「なるほどねー。管理局の特異災害対策班……」

「俺が班長です」

「でも正式な部隊は一人なんですよ？」

「一人で班とか頭悪いと思いませんか？」

ちよつとふてくされながらクルヴィスは深い溜息をこぼす。地球出身、分かる。ノイズ被害が多次元世界でも確認、そのための対策班。分かる。部隊運用、一名——これがわからない。

「また随分と無理難題を吹っかけられたわねー。嫌われているんじゃないの」

「まあ嫌われはすれど好まれる事案がまったく思い浮かび上がりません」

「それじゃ無理ないわね。大丈夫なの、ひとりです」

「本当にダメなときは何もかも投げ出して寝ます」

お布団は裏切らない。クルヴィスは知っている。人間、本当に頼れる最後の希望はお布団だ。辛い時も仕事が終わらない時も悲しい時も残業申請忘れた悲しい時もお布団に包まれば頑張れる。

「今日は挨拶に來ただけですので、また近いうちにでも」

「そう、それじゃ。また暇を見つけて來てちょうだい。そうしたら私も嬉しいから」

「暇があつたらいいんですけどねー」

多分、ない。間違いなく無い。

「フェイト執務官は今、どんな事件の調査に？」

「広域次元犯罪組織の足がかりを追ってるわ。聞いたことはあるんじゃないかしら、クレイモアって名前」

「特務次元航行隊が追ってるあの組織か……」

次元犯罪組織の中でも、飛び抜けて凶悪性、凶暴性の高いテロ組織。管理局への復讐を誓うものばかりの反逆者集団。特に、頭目のグレイ・ヴァン・デューメントは犯罪者達から『英雄』とまで称される危

険人物だ。

しかし、何より危険視されるのがクレイモアのナンバー2。通称『復讐鬼』。魔導拳闘術『ファイネストアーツ』の三冠王の輝かしい記録から犯罪者に身を落としたルード・ヴァサリアにこそある。一時期の殺害件数は一月で三桁にまで及んでいたほどだ。大量殺人を繰り返していたがある時期を堺にパタリと止んだ。その後、クレイモアに所属したことが明らかにされている。

広域次元犯罪組織クレイモア、管理局の不倶戴天の怨敵ではあるのだが、目につく犯罪組織は自らの手で蹂躪していることも公の記録には残されていないが、現地住民の声で判明していた。彼らはそれを慈善事業などでしている訳ではない。それは単に道端の小石を蹴り飛ばすとか、炉端の雑草を踏み潰して歩くようなもの。彼ら、特にグレイからすればその程度のことではないのだ。

無論、管理局とあれば問答無用に戦闘行為に及ぶ。そのせいか、犯罪者集団からは英雄視される一方で同時に畏怖されている。

「最近はその足取りも途絶え途絶えで難航しているみたいよ」

「ま、特務次元航行隊の本来の任務は次元航行隊で手に負えないレベルの古代遺物回収ですからね」

そんな職務内容からか、部隊編成は魔導師ランクを度外視した編成とされていた。部隊長であるファルドの前任は初代不滅のエース。加えて、別分隊には特務航空戦技教導隊『ブルーバード』が控えている。アグレッサードとして『味方殺しのエース』達は次元世界に在中している時空管理局の航空戦技教導に飛び回っていた。

「あんな怪物連中はエースに任せて、俺は地球でのんびりやりますさ。それじゃ、リンデイ提督。また近いうちにでも遊びに来ます」

「ええ、それじゃ」

クルヴィスは地球の空を見上げる。——もし、もしもだ。クレイモアが地球に来たらどうなってしまうのだろうか。日本なんて島国、彼らの戦場には狭すぎるのではないだろうか。特務次元航行隊はかつて古代遺物を保有した島をまるごと消し飛ばした。理由については、管理保有すべき対象ではなかった、とされている。ならば島ごと『無

かったこと』にしてしまおうと、そんな逸脱した判断すら容認されてしまうのが彼らだ。

そういえば久しく顔を見ていないな、と。そんなことを思いながらクルヴィスはバッグを持って歩き始めた。

「さーて、次は八神三佐のところに挨拶でもしてこようかな」  
できれば夕食に授かりたい。そんな打算的な事を考えながら。

——とある次元世界。平穏が続き、これといった特徴の無い惑星では時空管理局も環境保護に留まっていた。文明レベルも過度に高いわけではなく、成長も加速度的なものではない緩やかな技術レベル。その為、休暇に訪れるには程よい管轄内惑星とされていた。

そんな惑星の最低限の自然が残された都市開発部では平和そのものの日常が謳歌されている。自然公園を走る家族連れや、軽いピクニック気分で訪れたカップルやサークルの仲間達。そんな客足を狙って少し時期の外れたアイスクリーム屋が屋台を開いている。

「はい。落とさないようにね」

「ありがとうございます！」

一人の子供が店員からアイスクリームを受け取って目を輝かせていた。ストロベリー、バナナ、チョコレートの三段重ね。親から貰ったお小遣いの小さな贅沢に、満面の笑みを浮かべて走る。早く親に見せて自慢したい。そんなはやる気持ちから、少女は足を躓かせた。

その眼前に黒い足。ぶつかり、転ぶのは留まったがアイスクリームは見知らぬ男性の服に大きなシミを残している。

成人男性は、少女に視線を落とす。無感情で、まるで機械のような赤い瞳。その瞳に射すくめられて少女が硬直している間に、自分の服に付着したアイスの汚れを見やっていた。

「……あ、あの……」

「……怪我はないか？」

怒られる。そう思っていた。だが、成人男性からは気遣いの言葉。視線を合わせて屈みこみ、アイスクリームの屋台に視線を移すとすぐに立ち上がった。呆然と立っている少女がその後姿を眺めていると、

同じアイスクリームを手にも男性が差し出した。何故か両手に持っている。

「今度は落とすなよ」

「あ、りがとうございます……ごめんなさい」

「気にしなくていい」

必要最低限。そんな印象の会話だった。ベンチに腰を下ろして、男性はアイスクリームを見つめている。髪の色は銀。瞳は赤。それによく似た男性がもう一人、背後から近づくなりベンチの背を乗り越えて隣に腰を下ろして肩を組む。突然の事態であつても男性はアイスクリームを持つ手を微動だにさせなかった。

「おーい、てめえはなあに美味そうなもん買つてんだあ？」

「アイスクリーム」

「ちと買つてくらあ」

独特の訛りを見せる男性は、灰色がかつた髪に赤い瞳とよく似ていた。だが、服装は対照的にラフな格好で留まっている。こちらはバラとチョコの二段を手にして戻ってきた。

少女はなんとなく気になってその二人と並んでアイスクリームを食べている。

「おじちゃんたち、旅行に来たの？」

「んー？ まあそんなとこだあ。嬢ちゃんはお買い物か」

「うん！ あそこのアイスクリーム屋さん、大好きなんだ！」

「食べ過ぎてお腹壊すなよお？ 親は一緒にやあねえのか」

「お母さんはお友達と一緒におしゃべりしてる」

訛りのある灰色の髪の男性は、よく笑っていた。警戒心の無さに少女もすぐに打ち解ける。その間、銀髪の男性は黙々とアイスを食べていた。

アイスを食べ終えてからも三人でお喋りしていると、少女の母親が友達と別れて探しに歩き回っている。その姿を見て少女はベンチから降りると一目散に母親の下へと駆け寄った。母親に出会った二人のことを話そうと指を差すと、サツと顔が青ざめている。ひしと抱きしめて神に祈っていた。

「ママ？」

「嗚呼……神様、なんてこと……」

ベンチから腰を上げる男性が空を見上げる。青空が歪み、そこには時空管理局の艦艇が一隻。誰もが空を見上げる。正義の威光——そんなものを振りかざす理由などこの惑星にあるはずもない。誰もが疑問に首を傾げていた。

二人の男性を除いて。

「ケツ。まったく、おちおちアイスクリームも食べねえなあ、ルード」  
「たまに食うと美味しいものだな」

航空魔導師達が発艦する。それをのんびりと見上げていた二人もまた、デバイスの待機形態を持ち出す。剣を象ったバッジ。宝石の付いたブレスレット。

「いくぜえデユラハン」

「やるぞ、イラ」

グレイ・ヴァン・デューメントは血染めの大剣を担ぐ。

ルード・ヴァサリアは漆黒の鋼拳で拳を包む。

時空管理局は情報操作でこの平和な惑星で起きた事件をクレイモアによって引き起こされた惨劇と報道するだろう。

S級艦艇一隻、撃沈。被害者約五十名。死傷者三十数名。交戦時間

——三時間弱。

灰塵の英雄。正義の叛逆者。平和の破壊者。誰が呼んだか首狩り騎士。自らの振るう大剣こそが叛逆者の証、クレイモア。グレイ・ヴァン・デューメントは瓦礫に剣を突き立てる。

それら全ては管理局が自らになすりつけた罪状であるというのに。そして、これらの惨劇の後に待ち構えている強敵も見知っている。

「来いよ特務次元航行隊。ファルド・ヴェンカー」

「……」

ルード・ヴァサリアもまた、ロア・ヴェステイジを待ち構えている。廃墟の街に腰掛けて、瓦礫の戦艦に背中を預けて二人の怪物は、静かに待つ。

クレイモア旗艦『アザゼル』が到着するのが先か、それとも——特

務次元航行隊と死闘を繰り広げるのが先か。



## 接触

——柳クルヴィス、という人物像について大概の人間が抱く印象がある。胡散臭い、信用ならない、飄々としている、軽薄。日系ハーフであり、生まれつきブロンドの髪を持っているだけに髪色の相性もあるのだろう。そんな彼の趣味はいわゆる「オタク趣味」である。そうと思わせない側面に、時代劇やカンフー映画が好きなのも挙げられる。そして彼は地球に有給で帰るたびに情報査察部に日本発の文化を持ち帰っては視聴覚室を占領して映画鑑賞会を開いていた。ちなみに反省文提出ものである。

そんなわけで、クルヴィスは八神家に立ち寄る前にレンタルビデオ屋へと足を運んでいた。TATSUYAで何か新作は無いかと見て回るが、時代劇などの新作は中々入荷しないのが寂しい昨今。仕方なくちよつと古い映画でも観ようかなとパッケージに手を伸ばす。

(あ、懐かしい)

クルヴィスが手を伸ばしたのは、古臭いカンフー映画。往年の名作中の名作。カンフーならまずコレを観ると言わんばかりの評価を受ける作品。ふと、その手が横からも伸びていた。

「ん?」

「あ」

視線を横に向ければ、赤いカッターシャツの男性。筋骨隆々の肉体に大柄の恵まれた体格。クルヴィスも人並みに背丈はあるのだが、それから更に見上げる程の身長。

「あー……どうも」

「……お前、まさかクルヴィスか?」

「お久しぶりです、弦十郎さん。いつもお世話になってます」

「いや、こちらこそ。元気そうだな」

「まあ多分こつから元気じゃなくなっていきます、俺」

「何を言っているんだお前は」

「何を言っているんでしょね俺は」

風鳴弦十郎。クルヴィスの親ぐるみの付き合いの一人。しかし、時空管理局の元へ行ってからはや十年近く顔を見ていなかった。

「今まで何をしていたんだ」

「はあ。なんと云いますか、公務員？ 弦十郎さんは」

「俺もまあ似たようなものだ」

「あー、そつすか。実はノイズの対策班つーわけわからん部署にかっ飛ばされましたね」

「……ほう」

クルヴィスは、一瞬の間を置いてから相槌を返した弦十郎の挙動を見逃さない。

「久しぶりに会ったんですし、映画でも観ながらのんびり話でもしませんか？」

「そうだな……お前、家に連絡はしたのか」

「いえ、まだです。まだ身の回りごとついてますし、そっちが落ち着いてから追々」

「先に連絡をした方がいいんじゃないのか」

「弦十郎さんに会った、とでも」

「お前なあ」

クルヴィスは母親が日本人、そして弦十郎とは個人的な交流があった。という程度なのだがその付き合いは今でも続いている。正確には、風鳴家。引いては緒川家とも。むしろそちらからのアプローチと言ってもいい。

「俺があの人苦手なの知ってて言っているだろう」

「ええまあそりやもう当然の如く」

「かわいくない奴め」

「ははは、よく言われます。で、どうです？ 映画」

「仕方ない。付き合ってやろう」

パッケージからケースだけを抜き出して、他にも何本か借りていく。

そして、弦十郎の邸宅へと足を踏み入れたクルヴィスは帰り際に買っておいた茶菓子なども一緒に広げて共に映画鑑賞を始めた。

「あれからもう十年か。早いものだな」

「俺がちびすけだった頃ですわー、最後に会ったの。というかよく俺だっけ気づきましたわね」

「ん？ そんなの元公安警察の俺からすれば簡単なことだ」

「そーいやそーうでしたわね。ってことは警察辞めたんですか？」

「色々とあつてな」

クルヴィスは煎餅に手を伸ばし、弦十郎は腕を組んで映画に熱中している。

「へー。ところで俺は現地を離れていたのでよく分からないんですけど、ノイズの被害ってどうなってるんですか」

「ニュースとか見ていないのか」

「ま、見る暇も無かったといえますか。ちらほらーと見聞きはしてましたけれども」

「相変わらずだ」

「何の対策も出来ていないんですかねえ」

椅子に縛られた主人公が悪党に囲まれ、絶体絶命かに思われるがそこは映画。敵の攻撃を避けて上手く縄を切り、そのまま椅子を振り回して敵を殴り倒す。気合一喝、椅子を破壊して無事に脱出するとそのまま流れるように敵を蹴散らしていく。

「……出来ていない、わけではない」

「ダム然り、堤防然り。ノイズ然り、災害には何かしらの対策ってのがあると思うんですけども。それから身を守る手段って」

「随分とノイズに食いついてくるな」

「ええまあ、対策班なんて部署に配属されたら。新設の部隊なのでまだ俺一人ですけどね」

「お前一人で部隊なのか？」

「さあ？」

上手く活躍すれば人員増強とか——無いな。うん、それはない。それだけはないと断言出来るクルヴィスだった。

「大体、そんなノイズ対策班など一体どこの国が」

「おや。日本であるとは思わないんですね？　日本には特異災害に対抗できる手段があると」

「むぐつ……」

「認定特異災害対策機動部は市民の避難が最優先。ま、災害ですからね。一般人は逃げるしかありませんけど。俺の言うノイズ対策班、つてのは外国である確証が」

「やってしまった、とでも言いたげに弦十郎は額に手を押し当てた。そうだ、クルヴィスはこういうやつだった。推測と考察と、虚実交えた言動で情報を引き出すのが情報査察部の仕事。だからこそ、今のクルヴィスは昔の弦十郎からは計り知れない程のキツネとなっている。昔からかわいくない奴とは思っていたが、こうもくるか」

「昔の俺だったら、探偵とか刑事とかやってたと思うんですけどね」  
「今は違うのか」

「ええまあ。それで、弦十郎さん？　ノイズ対策班が海外であると確証を持ったのは、何故ですか」

「……仕方ない。隠したところで、お前は俺から情報を引き出すんだろう？」

「そりやまあ、あの手この手捌め手で」

「なら、俺も腹を割ろう。ただし」

「わーかってますって。俺もキチンと積もる話を消化しますよ。映画でも観ながら」

「……時空、管理局？」

「はい」

「魔法とか、多次元世界など、にわかには信じ難い話だが」

「セットアップ」

クルヴィスは自らの左耳に付けているピアスに呼びかける。待機形態のデバイスは即座に反応し、十文字槍の形状へと切り替わった。目を白黒させる弦十郎の前で、再び待機形態へ。

「信じます？」

「信じるしかないだろう」

「それにしても、シンフォギア……ですっけ？ そんなの開発されてたんですね」

「当然だが、秘匿事項だ。その装者についてもな」

「ですよねえ」

「だが。この事実を知ってしまった以上、お前を野放しにするわけにもいかなくなったということでもある」

「そうなりますよね。俺も最低限、時空管理局に関する情報は渡しますよ」

現地での行動は自由と言霊も取つてあることだ。こちらの行動を咎められる立場にはないだろう。

「その時空管理局という組織がノイズ対策班を打ちたて、それがお前ということか」

「そういうことです。俺の任務はノイズ発生源である地球でその解決策、ないし対策を練ること。弦十郎さんの特異災害対策機動部二課とも行動方針は一致しています。ものは相談」

「どうせ編入させてくれ、とか言うんだろう。お前のことだから」  
「あ、バレてました？」

「そこまで気が回らないほど、俺も器の小さい男ではないからな。いだろう、そういうことならついて来い。お前を案内してやる」

「ありがとうございます、弦十郎さん」

（というか、まさかとは思うがコイツ……そこまで見越して俺に情報を渡したわけではあるまいな？）

なんというか、上手く乗せられたような気がする。掌で踊らされている、というよりは掌握されている気がした。もしそうだとすれば。柳クルヴィスは風鳴弦十郎の知らないところでもとんでもない成長を遂げている。——が、ひとつ安心できることがあるとするならば。

弦十郎の知っているクルヴィスは、相変わらずだということだ。親しみやすく、飄々としていて、軽薄ではあるがその実、一本筋の通った信念のある男。スパイであるとか、そういう理屈は抜きにして弦十郎はどこか嬉しく思っていた。

目は口ほどにモノを言う

クルヴィスが連れてこられたのは、私立リディアン音楽院。

「……女子校っすか」

「いいからついて来い」

「俺、女子専門の学校とか入るの初めてなんですけど。なんかちよつとテンション上がります」

「別な意味で案件になるからやめておけ」

「うっす」

人気の無い校舎奥、廊下の突き当たりで立ち止まった弦十郎がパネルを操作すると壁が動いた。その先のエレベーターに二人で乗り込む。

「舌を噛むなよ」

クルヴィスはその言葉を聞いていたのかどうなのか、高速で直下するエレベーターでも微動しなかった。むしろ周囲に気を巡らせているようにも見える。

「はー……学校の地下にこんなのが」

まるでステンドグラスを張り巡らせたような豪華な壁面に言葉を失っていた。辛うじて出てくる賞賛の言葉もどこか足元がおぼつかない様子だ。時空管理局でもここまでの設備は早々お目にかかれな

い。  
やがて緩やかに速度が落ちていき、エレベーターはようやく止まった。

「着いたぞ、クルヴィス。ここが特異災害対策機動部二課の本部だ」

「どうもーお邪魔しまーす」

まるで知人の家を訪れるかのような気楽さでクルヴィスは踏み入れる。周囲をキョロキョロと見渡すような真似はせず、ただ弦十郎の背中を見てついていく。

「あーら、弦十郎くん。その子は？」

「了子君か、大事な話がある。二課のメンバーを集めてくれ」  
「りようかーい」

「あれ、いいんですか弦十郎さん。そんな俺のことおおっぴらに紹介して」

「何を言っている。これから俺達と共に頑張るんだろう、新しい仲間を紹介しないと始まらない」

——緊急の召集司令に何事かと集まった特異災害対策機動部二課のメンバー。弦十郎の隣に並ぶ青年が簡単な自己紹介を済ませる。時空管理局のノイズ対策班であるということはまだ明かさず、まずは交流を図ろうというものだ。

「今はまだ明かせないが、日本国外のノイズ対策班として我々に協力してくれる」

「あ、スパイとかじゃないんでご安心ください。あくまで技術協力者です」

「自分から言っていくのか……」

「むしろ技術提供者という体で、今後よろしく願います」

「ま、こういうやつだ。おちゃらけて飄々としているが何かと小回りの利く男だ。しばらくは研修生としてうちで預かる。次は二課の紹介だな」

弦十郎に名前を呼ばれた者達が簡単な自己紹介をしながらクルヴィスと握手を交わしていく。主要な面子と笑みを浮かべていたが、櫻井了子の自己紹介の時は少し反応が遅れていた。

「櫻井了子です。シンフォギアシステムの開発者よん、よろしくね」

「……え、ああ。どうも、よろしく願います。櫻井さん」

「櫻井女史、それか了子さんと呼んでくれて大丈夫よ。私もクルヴィスくんって呼ばせてもらうから」

「さて、それじゃあ残るは——と言いたところだが肝心の二人が来ていないようだ。それまで施設の案内でもしてやろう。ついてこい、クルヴィス」

「了解です、弦十郎さん」

「ところでお前、アイドルに興味あたりするか？」

「へ？」

これはまた素つ頓狂な質問をしてくるものだな、と思いつながらクルヴィスは弦十郎の質問に答えた。

「まあ人並みに興味はありますよ」

「ふむ、そうか。なるほどな。そういうことならいい」  
「？」

意図が読めない質問に、クルヴィスは眉を寄せる。珍しいな、と思いつながら施設の案内をする弦十郎と二課の中を歩いて回った。

「先ほど櫻井女史が言っていたシンフォギアシステムってなんですか？」

「FG式回天特機装束。それがシンフォギアだ。歌うことによつてノイズの持つ最強の矛と盾を無効化することが出来る」

「へー」

「あまり興味無さそうだな。アレほどノイズの対抗手段を気にかけていたというのに」

「俺からすれば管理局のデバイス技術の方も似たようなものなので」

「魔法」と呼称されているが、実際のところは超科学技術によるものだ。それこそ本当に魔法と呼べるのはタネも仕掛けもある手品師のトリックくらいである。幻術魔法を使うクルヴィスにとつてはその理解こそが最大の武器でもある以上、生命線と言つていい。

それから、一通り二課の中を案内し終えてクルヴィスと弦十郎は休憩を挟んでいた。そこへ司令塔である弦十郎のもとへ近づくと二人の姿があつた。クルヴィスが首を傾げている間に一言二言、言葉を交している。

「ダンナ。そつちの新顔は？」

「ああ。そうだったな、紹介しよう。我々二課の協力者だ」

「柳クルヴィスです」

「アタシは天羽奏。こつちは」

「……………」

目を白黒とさせている青い髪の少女は自己紹介も忘れて棒立ち状態となつていた。



「柳？」

「はい」

「……あの“柳家の人間ですか」

「多分、“その“柳家の人間です」

「なんだい、翼の知り合いなのかい？　じゃあ紹介するまでもなさそうだ」

「あ、うん……その……家の付き合いで何度か」

「それで、弦十郎さん。お二人は？」

「ああ。聞いて驚け、今や日本のスーパーアイドルユニット、その名もツヴァイウイングだ」

「翼ちゃんアイドルやってるん!?　嘘お！」

「お前、そこで一番驚くのか？」

シンフォギアの開発経緯などよりも、クルヴィスにとってはそちらの方が大事な様子。

「クルヴィスもアイドルに興味が無い、というわけではないらしいからな。うんうん、そういうことならば問題は無いだろう」

「何の話ですか」

「ダンナ、何の話をしてるんだ？　アタシらにわかるように言ってくれ」

「クルヴィス。お前には奏のプロデューサーをやってもらおうと思っ  
ていてな。中々にじゃじゃ馬ではあるがお前なら出来るだろうと信  
じているぞ」

弦十郎は屈託のない笑みを浮かべていた。寝耳に水、謀られたと  
言った面持ちで口をへの字にしながら睨み返す。

「え、それ事務所とか大丈夫なんですか」

「いきなり決められても困るよダンナ！」

「事務所は心配するな」

自分よりも事務所の心配をする辺り、クルヴィスの人の良さが図れ  
る。しかし、アイドルもプロデューサーとの二人三脚。どういったス  
ケジュールを組むかによって活躍が左右される大事な裏方だ。だか  
らこそ、と目をつけたのかもしれない。

「私は反対です、風鳴司令」

「それはどうしてだ」

「奏とは今でも十分活躍出来ています。それに専属のプロデューサーをつける他突然言われても……」

「翼の言うことは尤もだ。しかし、クルヴィスの場合事情が特殊でな。それについては後で話そう」

「後で、なんて勿体ぶらずに今話してくれりゃいいじゃんかよ」

「ううむ……しかしだな。信じるかどうか」

「ダンナが言うなら信じるよ」

「俗っぽい言い方をすれば——柳クルヴィスは『魔法使い』というもののらしい」

「正確には魔導師、ですけれどね」

「は？ なんだいそりや？」

弦十郎の目が「言わんこっちゃやない」とでも言いたげにクルヴィスを見ていた。それを一から説明するのも面倒なので端折ってクルヴィスは簡単に説明するが、奏はそれに面白くなさそうな顔をする。「アンタがその管理局、て人間なのは分かったよ。だけど、気に食わないね。その人様の土地に土足で乗り込んで好き勝手しようなんて真似」

「俺、一応日本生まれなんですけど」

「大体、なんでノイズを倒そうなんてしてるのさ」

「まあぶっちゃけると地球のせいで次元世界大迷惑中なので」

「わかりやすい説明ありがとさん。だけど、ノイズを倒せるのはアタシと翼。二人の歌だけだ」

突っぱねる奏に、クルヴィスは気の抜けた返事をしながら肩をすくめた。

「ダメっすか」

「ああ、ダメだね。アンタみたいな笑い方する奴は信用ならない。中身の無い空っぽの笑い方、表面だけの愛想笑いなんて」

「うーん、取り付く島もなし。弦十郎さんヘルプ」

「そこで俺に振るのか。まあ確かに、クルヴィス。お前のことをまだ

「こちらも信用できているわけでもない」

「そつすよねーですよねー、そんなこつたらろうと思ってました俺」

「そこでだ。百聞は一見に如かず。お互いにな」

「模擬戦ですネ」

「理解が早くて助かる。思う存分、拳で語れ！」

## 無名、其の名は幻槍

——どうしてこうなった。どうしてもこうなったのか。クルヴェスは遠い目で白い壁を見ながら目の前の現実から全力で目を逸らしていた。

天羽奏。風鳴翼。日本の知る人ぞ知るスーパーアイドルユニット、ツヴァイウィング。傷一つつけようものなら日本全国ドルオタの皆様から殺意のパッシング待ったなし。どうして地球に来て早々にこんなことになってしまうのか。まあ正直管理局の仕事とかやってられませーん。

クルヴェスは改めて目の前の現実を直視する。トレーニングウェアに着替えた二人は準備体操を入念に済ませている。

(えー、まじでー？ マジでやんの？)

《奏、翼！ 準備は出来ているか》

「おう、勿論さダンナ！」

「はい、司令」

あちらはやる気満々の様子。管理局という組織の人間がどういう戦い方をするのか興味津々な様子で二課のメンバーも全員モニターしている状況。まるで実験動物か何かの気分でクルヴェスはスーツの襟元を緩め、ボタンを外す。

《クルヴェイスも。用意はいいか》

「あんまりよくないですけどイエスって言うしかなさそうなので少々お待ち下さい」

「怖気づいても逃げようとしないとこは一応、男らしいね」

「……」

ようやく準備体操を始めるクルヴェイスを見て自信に満ちた笑みを浮かべる奏と反対に、翼はあまり浮かない顔をしている。

「どうしたのさ翼。そんな浮かない顔をして」

「あ、ううん……」

「大丈夫さ。アタシと翼、二人のシンフォギアなら負けたりしない。」

だろ？」

「そうなんだけど——奏、用心だけはして」

柳家。風鳴の家だけでなく緒川家との交流のある一族。それは、決して公に晒されることのない暗部。言うなれば忍者の家系。

「柳に風」という言葉があるように、かの風魔一族の門派であるとされるが、それはクルヴィスの口からも定かではない。そもそも家柄にこだわるような性格でもない、だからこそ故郷を遠く離れて時空管理局へと入局したのだが、当時十歳の少年の目に何が映っていたのか。それは当人のみぞ知る。

「ふー……、よし」

覚悟を決めたようにクルヴィスは深く息を吐いた。

「セットアップ」

デバイスを起動する。それは、武装局員に支給されるポールスピア型のデバイス。それにクルヴィスが独自のアレンジを加えた十文字槍型のデバイスは、特別な機能など何も付いていない。「ただのデバイス」というだけの武器だった。専用デバイスという立ち位置などではなく、改良デバイス。クルヴィスの功績から所有を認められている改良デバイスに名前はない。管理局もそれはあくまで「量産型デバイス」として登録していた。

長さにして二メートル弱。カートリッジシステム未搭載。使用魔法、幻術魔法——「のみ」だとされている。管理局でも類稀な、射撃適正ゼロ。

デバイスの起動に、二課のメンバーがざわめく。地球で未確認とされている技術力に、弦十郎も驚きを隠せなかった。だが、肝心の能力はどうか。それを見極める為にも。

「翼。やるよ」

「うん！」

相手をする奏と翼にはそんなことはどうでもいいのか、シンフォギアを起動するためのコマンドワード、聖詠を口ずさんでいた。

(……システムはデバイスと一緒か)

デバイスマイスターとしての観点から共通点をいくつか見繕って、

しかしクルヴィスはバリアジャケットを形成しなかった。シンフォギアシステムに関する詳しい事は後程櫻井女史から聞くものとして——さあてどうしてくれようかこの状況。クルヴィスは改めて考えた。

“自分の手の内をどこまで明かすべきか”。これは幻術魔法を使う魔導師にとって戦場で生き残る課題となる。言うなれば詐欺や手品と同じことなのだ。幻術魔法を主軸に戦う者は管理局でも多くない。むしろ希少と言っている。或いは、射撃の補助などサブに習得しているものが大半であろうものをメインに、それも第一線で使用する時空管理局の魔導師は恐らくクルヴィスだけだ。

“だからこそ” 純粋な戦闘力がモノを言う。……さてここで問題なのが、恐らく彼女達ないし特異災害対策機動部二課が期待しているのが「時空管理局の魔導師の戦い方」というものだろう。それに準じた戦いがクルヴィスに出来るかと聞かれれば、とても難しい。至難の業だ。困難を極めている。

落ち着いて、深呼吸——。

《お互い用意はいいな！ 演習開始だ！》

する暇もなく弦十郎の合図によって火蓋が切って落とされた。クルヴィスの口から変な声が漏れる。

奏と翼の二人の連携を前にしたクルヴィスに対する私情を抜きにして、弦十郎はその様子を観察していた。

「了子君。時空管理局のデバイス、という技術をどう見る？」

「うーん、そうねえ。起動パターンはシンフォギアシステムに比べると簡素みただけで、妙な波長パターンが見受けられるわ」

「ふむ……」

「悔しいけれど、あちらの技術力の方が格段に上。乖離性から鑑みるに、シンフォギアを量産しているって感じかしら？」

「それを使うための素質が “魔力” というわけか」

確かに、と弦十郎は言葉を咀嚼する。櫻井理論の伴わないシンフォギアシステム——それが時空管理局のデバイス。

「クルヴィスからの話では、個々の素養に大きく左右されるらしい」

「そこも含めると、ますますシンフォオギアに近いわねえ。まあ向こうのほうが自由度は高いみたいだけれども……」

シンフォオギア提唱者としての矜持があるのか、了子の目に映るのは優勢を保つツヴァイウイングの二人。天羽々斬と GANG ニールの二つの聖遺物と正面から打ち合つて原型を保つ強度にも驚かされるが、弦十郎が目を見張つたのはそこではない。

クルヴィスの十文字槍と打ち合う翼の天羽々斬が火花を散らす。互いに弾かれるように距離を取ると奏が GANG ニールを振るう。

「つおつとお!？」

「ご自慢の魔術とやらを使わないのかい?」

「とつておきはとつておきたいんですよ、つと!」

「しやらくさいね!」

クルヴィスの持つ十文字槍のデバイスに名前はない——「無名」を鋭く突き込む。槍先から石突きへと転じる流れるような動作。順手から逆手に持ち替えながら GANG ニールで一撃を防いだ奏の腹部を殴打して下から顎を跳ね上げる。そのまま無名を背負い、重心を安定させた回し蹴りが奏の身体を一回転させて地面へと倒した。

(やはり腐つても柳家の人間か!)

槍の柄。その中ほどを握る。槍としてより、棒術としての扱いに長けた握り方だ。格闘にも転じることの出来る持ち方だが、個人の技量や経験に左右されることから扱い難い。しかしクルヴィスの技量はそれらを巧みに操ることから、相当なものと見られる。

剣十文字の槍先で天羽々斬を受け止めた瞬間、魔力光が漏れた。目を凝らすと、極小の防御魔法が発動している。

「つと、あぶね」

距離を取りながらクルヴィスは無名の柄に通している魔力の芯を弱める。槍先を突きつけ、翼の次の一手に備えた。刀と槍とではリーチに差がある、しかし天羽々斬は形状を変えた。細身の刀から分厚い大剣へと形を変え、青い稲妻を纏う。

翼が振りかぶり、斬撃を放つた。蒼ノ一閃に面食らつたクルヴィスは辛うじて防御に成功するも、爆発に吞まれる。

「加減はしてある。奏、大丈夫?」

「いったたた。魔導師つてよりありやタダの武術家じゃないか、ほら吹きペテン師め」

蹴られた顎を擦りながら立ち上がる。

モニターしていた弦十郎や了子達、二課のメンバーもツヴァイウィングの勝利にどこか安心してた。

「ゲツホゲホ、けほ! いや流石に今のはビビった! なにその超機能!」

服の端々が擦り切れてはいるが、クルヴィスは健在。まだ戦闘続行可能だ。それに奏が笑みを浮かべる。

「あれ受けてまだやろうって気概、嫌いじゃないよ。さあ、やろうか!」

「柳さんも本気で来てもらってかまいません」

「んー……」

それにクルヴィスは渋い顔をした——だが、結果を言えばどちらにしろ自分が何かしらの魔法を使わなければ信用されないことで、所属する以上は手の内を隠したところでどうにもならないのである。

「んじゃま、そういうことなら」

右手で槍を保持し、空いた左手に魔力を集中させた。

幻術魔法と言っても一概には一括りに出来ない。〃投影による虚像〃が主だったものだが、クルヴィスはそれをデバイスの複製として多用する。空いた左手に浮かび上がるのは、無名の複製品。勿論、強度はお察し。目眩ましでしかない。

「槍が二本?」

「手持ち増やせば強いってわけでもないだろう!」

そう高を括った奏が踏み込む。

「まーそうなんだけどね」

所詮は平々凡々の三等陸佐。クルヴィスが受け流し、左の無名で足を引っ掛ける。そして、即座に複製する。投擲、複製、十文字同士を噛み合わせて奏を拘束する。

ただの虚像、吹けば飛ぶような空草。それも実践に耐えうる強度を



保たせた幻術は、クルヴィスの魔力保有量では十五本が限度である。

然して——合計十三本の無名によって翼と奏は完全に身動きを封じられた。

「こうするのが俺の限界ってことで勘弁」

パチンツッ！　クルヴィスが指を鳴らすと同時に、無名が魔力光と共に爆散する。非殺傷設定にはあるが、それでも相当量の衝撃に抱かれた二人が崩折れた。意識を奪うまでには至らなかったがそれでも立ち上がれない程の肉体ダメージに倒れる。

（つべー、マジやばかったあー！　流石にこれ以上は何も出せねーぞ俺！）

疲労感に見合わない戦闘に、クルヴィスは静かに整息しながらすまし顔を保っていた。その結果を見た弦十郎もこれには興味深そうな面持ちで頷いている。

「ふむ。魔術という科学技術にこちらも理解を深める必要があるそうだな」

「そうねん。見たところ、種類がアレだけとは思えないし……楽しみ」  
「ともあれ、これで決まったな。クルヴィスは奏のプロデューサーとしてこれから頑張ってもらおうことにしよう」

「それ、本人から許可とらなくていいの弦十郎君？」

「なに、自分を打ち負かした相手とあればアイツも納得してくれるだろう」

「そうねえ。奏ちゃんも結構無理するタイプだし」

「それに、控えている起動実験。あれの人出が多いのにも越したことはない」

## 開演にして開戦の狼煙

——それから、数ヶ月の月日が経過した。

クルヴェイスの生活は多忙を極めた。昼間は慣れないプロデューサー業、天羽奏に振り回されながらもそれなりに楽しめている。そして二課に戻れば聖遺物の研究と解析、管理局のデバイス技術の説明会。魔法の発動シークエンス、デバイスの多種多様な形態と発展の系譜とシステム。それだけのおおよそ半日が消し飛び、拍車をかける認定特異災害『ノイズ』へ対する対策。勿論、管理局の人間が櫻井理論に準じたシンフォギアシステムの採用を許可するはずがない。時空管理局としてはあくまでも『管理局の保有している現状の技術力』での特異災害への対処を所望している。それを魔導師として半人前のクルヴェイスが可能かと聞かれたらまず無理だった。ぶつつけ本番で戦場へ乗り込もうものならツヴァイウイングから非難轟々。

翼は防人としての矜持がある。また、奏もノイズを倒せるのは自分と翼の唄だけだと自負していた。その為、現在は泣き寝入りするしかない。

結果から言えば、タイムカードぶつちぎりの十八時間労働という生活リズムが柳クルヴェイスの地球での生活である。勿論、休暇などあつてないようなもの。

控えている完全聖遺物の起動実験。ネフシユタンの鎧。その為に、ツヴァイウイングのライブを利用する。もちろん、そのライブにはスタッフとしてクルヴェイスも参加予定だ。

その日の収録を終えて、クルヴェイスの運転する車に奏が乗り込む。

「つぷはー、今日も疲れたー」

「お疲れ様でした、奏さん」

「だけどそれとこれとじゃ話が別。後でトレーニングに付き合ってもらうよ、クルヴェイス」

「うへえ、マジっすか」

二人組アイドルユニットとはいえ、常に一緒に行動しているわけで

はない。翼には学業もある。その間、奏のお守りがクルヴィスの仕事。後部座席でだらしなく横たわって占拠している奏は運転席のクルヴィスの後頭部を見ていた。

実際の所、不安でもあったし気に食わない。だが弦十郎の指示とあっては奏も強く出れなかった。しかしそれでも何かあればギャフンと言わせてやるつもりだった——のだが、この数ヶ月一緒に仕事をして分かったのは、社交性も高く気配りが出来、配慮も節度もある非常に社会的な人間だということ。それでも軽薄さや飄々とした印象は拭えないのだが、奏のサポートも欠かさない。

睡眠時間を削りに削って奏と翼のワガママにも付き合っている。一体いつ寝ているのかと疑問符が浮かぶところだ。

「なあ、クルヴィス」

「あー？　なんででしょう」

「無理してアタシのプロデューサーなんて引き受けなくてもよかつたんじゃないか？」

「ご冗談。それ以外だと俺は二課本部に拘束されてるようなものですよ。そんな俺は尚更勘弁ですよ」と

奏も後から知ったことだが、この男の仕事量は明らかに尋常ではない量だ。誰も見ていないところで愚痴を漏らしながら栄養ドリンクを飲み干し、それでも顔色だけは取り繕って平気なフリをしてみせている。そこに、少しだけ罪悪感を覚えていた。

「むしろ感謝してるくらいですし。いやー、楽しいですわ。平和な仕事って」

「向こうじゃどんな仕事だったんだい？」

「来る日も来る日も内ゲバと内部不正と犯罪者の違法取引現場の差し押さえとか。ま、当然相手がたもおとなしくとっ捕まってくれるはずもないんで実力行使」

情報査察部とは名ばかりの実働部隊。情報収集を提出するより先に現場を抑えて然るべき裁きの場へと。それが例え、管理局の同士であつても容赦なくクルヴィスの部隊は稼働する。怨み辛みを買う仕事は例えプライベートであつても身を危険に晒す。

「そんなんだから、借りたマンションとか自室ふつ飛ばされたりもしましたねー俺。いやー映画だったらいんですけどね」

あつはつはと笑い話で済ませようとするクルヴィスがバツクミラーをチラと見る。奏が眉を吊り上げていた。

「自分が命狙われて、なんで笑ってられんだ!」

「それだけ世の中の為になってるって証拠ですし、恨まれて一人前ですよ。俺の管理局の仕事なんて。だから地球での仕事は楽しくて仕方ない。スケジュール分刻みは勘弁して欲しいですけどね」

「なんだよそれ。じゃあいいよ、今日はトレーニングは無しで」

「じゃあつてなんすかじゃあつて。イーですよー? 俺は全然オツケーですよー? とうか、それ言ったら奏さんこそ身体、大丈夫なんですか」

クルヴィスも聖遺物に関して学んで知ったことだが、奏は《ガングニール》の適合者だが、その適合系数が低い。その為、無理矢理その数値を引き上げる薬物『Linker』を服用している。薬を切らすと当然ながらガングニールの出力が低下、ノイズとの戦闘に支障をきたす。サプリメント型や注射器タイプでの摂取がメインだが、この数はそれも絶っているようだ。

「大一番が控えているんだ。アレには、アタシの余分なの加えたくないのさ」

「……」

「ありのまま、アタシの唄でライブを盛り上げて、翼と一緒に会場に来てくれたみんなとガンツガンに盛り上げてさ。起動実験を成功させたいんだよ。ま、いつものアタシのワガママってやつさ」

「そうですね、いつものことなので俺が振り回されること請け合いなワガママ案件」

「そういうこと。だから、アンタにもしっかり働いてもらうよ」

「……労災、おりねーかなー」

神妙な面持ちで呟くクルヴィスの様子がおかしくて——奏は思わず笑ってしまった。

そして、運命の日。ネフシユタンの鎧起動実験ライブが開催となる。いつもの調子の奏に、いつになく緊張する翼。そして裏で控える弦十郎と了子達二課のメンバー。そこにはライブスタッフのシャツを着たクルヴェイスも会場を慌ただしく走っていた。

《クルヴェイス、そっちはどうだ》

「会場のチェックはオツケーです。危険物とかも今のところ見当たりません」

《念を押すに越したことはないからな。そちらの見回りが終わったら奏の様子でも見に行つてやれ》

「大丈夫でしょう。なんかあつたら俺が頑張りますんで」

《お前は頑張りすぎだ。この起動実験が成功したら一杯おごつてやる》

「はは、失敗した時とか考えたくねー」

バックヤードで他のスタッフと声を掛け合つて機材や最終確認を終えたクルヴェイスはそのまま表の売店へと移動する。なにせ大掛かりなライブ会場だ、初めてくるお客にも会場案内をするスタッフが必要になる。人出が多いに越したことはない——とは、この為にある言葉。入場者のチケットを確認するスタッフに、売店で客を捌くスタッフにと手の足りていないところへクルヴェイスは空いている者に指示を出す。

(ふーむ、来てくれてるかな)

クルヴェイスは腕時計を確認する。そろそろ開演となる時間だ。だが来場者の数が想定以上に多く、まさに満員御礼となっている。その中から顔見知りを探すとすると一苦労だ。

ボサツとよそ見をしていたクルヴェイスに来場者がぶつかる。

「おわつと」

「ふや!?!、ごめんなさい!」

「いえ、こちらこそ。大丈夫ですか」

見たところ、まだ年は十代半ば。ライブ会場には初めて来たのか、両手でサイリウムを大事に持っていた。オレンジの髪の少女にクルヴェイスは何か困つてることがないか尋ね、ライブでの注意事項を簡潔

に説明する。

「と、いうわけ。会場のみなどと目一杯楽しんでいってね」

「はい、ありがとうございます」

「それじゃ、今度はちゃんと前を見て歩くように」

軽く手を振って、クルヴィスは無線に応じながら駆け足でバックヤードへと急いだ。どうやら用意していたグッズの搬入が予定より遅れているらしい。

(ていうか俺の仕事量だけやっぱ多くねえ!?)

どうして売店からバックヤードまで走らされて荷物運びやらされるのだろうか。甚だ疑問に思いながら、クルヴィスは見覚えのある一団の横をすり抜ける。

「あ、今日はよろしくお願いします！ はい、今行きます！ ちなみにどれぐら——え、そんなにあるんすか、マジで!?!」

ポカンと口を開けた一団の中心。苦笑いを浮かべていた女性があった。

「……なんちゅーか、管理局よりイキイキしとるなあクルヴィスさん」

「あ、あはは……でも忙しそうだし、声を掛けるのは後にしよっか」

「そろそろ開演の時間だ。急ごう二人とも」

「せやね。フェイトちゃんも久しぶりの地球やし、楽しんでこっか。なのはちゃんもフェイトちゃんに会えて嬉しそうやしなあ？ にやにや」

「もう、はやてちゃん！ 早く行くよー!」

「置いてくのは無しやろー」

## 少女達の挽歌

——柳クルヴィスが会場内を奔走し、いよいよライブ開演となった。始まる頃にはバックヤードに戻って肩で息をしていたのだが、水分補給と呼吸を整えるなり大きく深呼吸。気合を入れ直す。

「死ぬ……過労で死ぬ……！　なんで俺だけスタジオリ入り五時からなんだよバカじゃないかな」

ちなみに先日の実労働時間は十九時間。わーお、ぶちころすぞ労基法。私情は置いといて——クルヴィスはチケットを贈ったのは達がちゃんとライブを観に来てくれたことに安堵していた。今回の起動実験は失敗するわけにはいかない。仮に、万が一にでも失敗することがあればその時は最悪の事態を招くというだけ。そのリカバールも兼ねている。成功に終われば、それはライブが盛り上がるだけで終わり。そうと願うだけなら安いものだ。

クルヴィスはライブ会場からの歓声と熱気を聞きながら、ツヴァイウイングの歌に耳を傾ける。古今東西、歌には力があると言われた。それはシンフォギアシステムという武器にもなるが、それ以上に心に気力を滾らせる大事な活力剤でもある。この歌を聴いていられるうちは、過労でぶっ倒れそうな時ももう少しだけ頑張れそうな気がしていた。

実は密かに二人のCDも買っていたりするが、奏には秘密である。

とはいえ、誰より早く会場に着いて機材のチェックや実験室の不備がないかも全て確認してある。後はライブが成功に終わるのを祈るだけだ。

観客席を見回りながらクルヴィスは見知った顔を探す。それは意識すれば容易く見つけることが出来た。

「どうも、高町一尉」

「あ、クルヴィスさん。今日はありがとう、ライブのチケット送ってきてくれて」

「いえー！　——なんやクルヴィスさん。わたしら何かしたん？」

「どうもどうも八神三佐。ハラオウン執務官も」

「相変わらずだね、クルヴィスも」

三人もクルヴィスの諜報には世話になっている。特に地上でははやてが世話になった。情報査察部の部隊長、というからどんな胡散臭い人物かと思えば——案の定。しかし、情報の正確さで言えば管理局である以前に信用できた。人脈が広く、顔も利く。今では情報査察部も落ちぶれたというよりは、〃落ち着いた〃という評価で治まっていた。

クルヴィスの居た情報査察部の噂と言えば……あの部隊長から逃げられる気がしない” 〃違法寸前まで手段を選ばない” 〃犯罪者手前の巣窟” 等等、黒い噂が絶えない部署だった。

「それにしても今回はどうしてライブのチケットを？ クルヴィスさん、こういうイベントとは無縁だとばかり」

「いや、こう見えて結構アクティブですよ俺。時間がないだけで」かなり切実な問題だったりする。とはいえ人並みにテレビを観るのは達からすれば、クルヴィスの仕事量は半端ではない。地球に戻ってきてから連絡を取り合ってはいるが多忙なようで中々話す時間が取れなかった。

「ちなみにチケットは俺の全額自腹ですのよ」

「そ、そうだったんだ……」

このライブに完全聖遺物の起動実験を兼ねていることはなのは達に話していない。オープニングナンバーからフォニックゲインの上昇は確認されている。この調子でいけば起動までのエネルギーは十分に確保できるだろう。

「ところで八神三佐。ヴォルケンリッター達は連れてこなかったんですね」

「そりや当たり前やん。クルヴィスさん、チケット三枚しつかりやったし」

「俺の財布にも限界はあるんですよ……」

「ヴィータなんてえらい怒ってたで。「あのクソぎつねケチくせえー」とか何とか」

「ひでえ言われようっすね」



まるで他人事のように聞き流したクルヴェイスだが、インカムから流れてくる通信に耳を澄ませた。

《ネフシユタンの鎧、起動を確認！ 実験は成功だ》

(ひとまずの山場は凌いだか……)

起動しない、という最悪の事態は免れた——しかし。実験場から慌ただしい様子が耳に伝わってくる。不穏な空気にクルヴェイスは一手早く動いた。

「どうも、三人のお力を借りることになりそうです。耐衝撃用意」

「へ？ どうしたん、いきなり」

「恨み言とか全部聞きますんで、デバイスの準備だけお願いします——」

《フォニックゲイン、尚も上昇中！ ——ネフシユタンの鎧が、起動……いえ、暴走します！》

会場の爆発にライブは中断を余儀なくされた。そして、その聖遺物の起動によって感知される特異災害反応。深い溜め息と共にクルヴェイスは思考のスイッチを切り替える。

「皆さん、落ち着いてください！ 避難口はあちらです！ スタッフの指示に従って移動してください！」

会場の中心地、起動実験室の様子も気がかりだが、そちらは後回しだ。まずはなによりも一般市民の避難が最優先となる。無線で他のスタッフにも指示を出し、三人に目配せするとその意思を汲み取ったのか真剣な面持ちで深く頷いた。

「なのは」

「うん。私達も避難誘導を」

「手分けしましょう。高町一尉は避難誘導を、ハラオウン執務官もお願いします」

「となると、私の仕事は——」

空を見上げる。そこには飛行型ノイズが多数確認された。そして、会場の中心にも大型ノイズ。無尽蔵にも思える物量で特異災害が発現していた。

「ノイズの駆除やな。ぎょうさん来とるなあ。近くで見るの初めて

「や」

「生身で触れたら即アウトなのでくれぐれも細心の注意を払ってください。こちらクルヴィス！ お客さんの避難誘導を！ スタッフ片っ端から動員！ 怪我人の救護も！」

「皆さん、こっちはです！ 危険ですので押さないでください！」  
「お子さんや年配の方には手を貸して！」

なのはとフェイトの二人もスタッフと一緒に避難誘導を行う。だが、それでも我先にと逃げようとする観客にクルヴィスは舌打ちをしてピアスを指先で叩いて起動する。待機形態であつても発動可能な魔法を発動させた。それは、魔導師であれば通用せずとも対策を持たない一般人であれば通用する初級中の初級魔法。

指を鳴らし、空間に漂う微量な魔力に伝播させる。催眠術のようなものだ。無意識下に語りかける意思誘導は、簡潔にただ一言。『落ちて着け』というだけ。たった一言、それだけで駆け出そうとする足は鈍り、途端に狼狽する。そこへ避難誘導の指示が来れば従う他にない。「流石やな、こちらはそういうの出来へんし」

「ま、努力の賜物ですわな。俺は『ごういうの』の方が得意ですので」  
ポケットを探り、ちゃんと『ブツ』が無事な事を確認してからクルヴィスはその場から駆け出していった。まだ指示の届かない観客達へ向けて先程の魔法を繰り返す。その様子を観ていたはやだけが気づいていた。観客席の背もたれを次々と飛び移りながら軽快に会場を駆け回るクルヴィスに。

「噂通りの狐やな……」

自分が『ちびタヌキ』ならば、クルヴィスは『ごんぎつね』だ。そんなことを思いながら、はやては会場の中心に集まっているノイズに視線を向ける。だが、ノイズの意識は観客よりも別なものに集中していた。眉を寄せて目を凝らす。

シンフォギアに身を包んだツヴァイウイングがノイズ達を蹴散らしていた。それでようやく合点がいった、どうしてクルヴィスが突然ライブのチケットを贈ってきたのかを。

「はっはぁん、そういうことやんなあ？ そうなら後で奢ってもら」

で、クルヴィスさん！」

首元から下げた剣十字のペンダントを取り出す。観客は幸い、中心から目を背けてスタッフの誘導に従っている。だが、はやての目に留まったのは向かい側の観客席に棒立ちの少女。自分と同じようにノイズと交戦しているツヴァイウィングの二人を見ていた。

「アカンて!?! 何突っ立つとるん!」

はやてが慌てて駆け出す。クルヴィスにも念話で一応催促しておいた。ノイズが気づく前に自分が間に合うかどうか——シユベルトクロイツを起動させる。

その反応に、ノイズ達が振り向く。特異災害へ向けた魔術の威力は管理局でも確認されている限り、ほぼ効果はない。『特定の状況を除いて』は。

(感謝するで、特務次元航行隊!)

特務次元航行隊からの近年の報告曰く——『唄が聞こえる限り、特異災害に魔術は有効打となる』という。だが、それはあくまでも管理局の技術頼りではないことから認知されていない。

ノイズと交戦するにはシンフォギア装者との連携が必要不可欠という事を知らなければ、はやてもデバイスを起動などしない。

『クルヴィスさん、聞こえとるか! 避難遅れとる子おるで! はようこつち!』

『俺の身体は一つしかないので無茶言わんといってくださいな!』

『アホか! 人の命掛かつとる時くらい男見せてくれたってええやんか!』

『平々凡々に過度な期待は勘弁ですツ!』

ツヴァイウィングの二人はノイズの数に分断されてしまっている。そこへはやてはフリジットダガーを向けて射出した。バリアジャケットはまだ装着していない。夜天の書も本調子ではない為、大規模魔法などの制限は掛かるもののノイズ相手ならば十分通用する。

「新手か!?!」

「味方や。うちは八神はやて、クルヴィスさんのお仲間や。よろしゅうな、風鳴翼ちゃん」

「防人の戦場いくさばに助けなドツ！」

「必要やろ。自分の命捨てたらあかんよ」

「私よりも奏が……！」

少女の助けに向かうよりも先に、ノイズの大群が眼前に立ちほだかる。一掃させるには詠唱が必要となるが、そんな余裕を与えてくれるほどの慈悲など持ち合わせていない。飛行型ノイズを迎撃するはやてが歯噛みする。大型ノイズの背後、向かいの観客席に立っている少女がようやく逃げ出そうとしていた。

その直後、戦闘の余波で脆くなっていた足場から落下する。瓦礫に身体を打ちつけて倒れるも、すぐに逃げ出そうとしていた。だが足を挫いたのか思うように走れていない。

『クルヴィスさん！』

『だあー、もうッ！ わあつてますがなッ!! こっちもそろそろ一段落、そうしたらそっち行きますよ！ 場所は！』

『ノイズ近辺や、助けられへんかったら覚悟しとき』

『俺の苦労を誰か察して』

泣き言を言いながらもクルヴィスは残りの避難誘導を他のスタッフに任せて逃げ遅れている人々を探す。そして、ノイズ達の群れに目を向ければ、奏が戦っていた。ポケットに忍ばせていた物を取り出す。

「……後でメチャクチャ怒られんだろうなあ、俺」

それでも、死んでもらっちゃ困るのだ。クルヴィスは会場の中心地に向けて駆け出していた。

## 惨劇を越えて

——思う。ノイズとの対抗策。想う。無力な少女を庇い、戦う奏を。クルヴィスは会場に飛び降り、駆ける。『LINKER』を絶っている今の奏の GANG ニールはいつも以上に消耗が早い。既に崩壊の兆しを見せているのをクルヴィスは見逃さなかった。

その欠片が衝撃で少女に突き刺さるのを、見てしまった。だが、それでも駆け出した足は止めない。人命救助は最優先だ。

ノイズが迫る。歯噛みしながら待機形態のデバイスを起動させた。十文字槍にセツトされた魔法を発動させると同時に投擲する。

(……なんで)

奏には分からなかった。覚悟を決めていた、この一人の少女を救うためならば自らの命を賭して唄おうと。滅びの歌を。絶唱を、響き奏でようと——その歌声を止められた。十文字槍が突き立てられた地点から一定範囲のノイズは動きが鈍くなっている。

「なんで、だよ……!」

どうして。奏には分からない。普段から飄々と軽そうな態度をとっているクルヴィスが今、必死になっていた。指を鳴らすと今度はノイズが“実体化”する。ノイズの持つ最強の矛盾、そのどちらかさえ無効化さえできればいい——。

「つッ、おとおおお!」

一足の元に踏み込み、掌打。ノイズを相手に、格闘戦。明らかな自殺行為。で、あつたが然し破壊されたのはノイズだけだった。その手応えにクルヴィスは確信を持ち、拳を作ると人型ノイズの頭部と思わしき箇所を打ち抜く。

「どうして! アタシを助けるツ!」

「そりゃあ、決まってるでしょ。俺が天羽奏のプロデューサーだから」  
「戦場にまで出てくんじゃないよ! それで死んだら、アタシは元も子もないじゃないかッ! 防人でもない、おちやらけたお前が戦う理由なんて」

「人に『生きるのを諦めるな』と言っておきながら、死のうとされちゃ困るんですよ。っと！」

飛びかかるノイズを半身で避けて、強烈なカウンターがノイズの身体を一方的に炭へと変える。その原理こそシンフォギアを纏う奏には衝撃だった。

「諦めてないなら、生き残れ。俺を過労死させる気ですか奏さん」

「ッ——！…… だけどー！」

クルヴィスがポケットから取り出して投げたのは、奏がこの数日間絶っていた『LINKER』そのもの。思わず受け取り、驚いていた。「次の収録までくたばってもらっちゃ困るのは俺ですからね！ どおりやー！」

「なに、考えてんだ……！…… なにを思っつて、こんな」

「奏のこと考えてるんだから感謝こそされど恨まれたかあない」

大型ノイズを見上げてクルヴィスは両手を挙げた。ああこりや無理だ、と降参の意思表示を見せる。しかし、次の瞬間にはノイズ達を蹂躪する流星群が降り注いだ。なのは達が一般市民の避難を終えて援護に駆けつけてきたのだ。既に会場を覆う人払いの結果がはやての手によって形成されている。

「クルヴィスさん！…… 無事ですか！」

「ノイズに触れたら人体は炭素転換されるって……どうやって？」

フェイトも先程の攻防を見ていたのか、言葉を失っていた。クルヴィスの身体は健在だ。生きている上にピンピンしている。肩で息をしているのはライブ会場を走り回った疲労だ。

櫻井理論によって作り上げられたシンフォギア。ノイズに対抗できる歌を紡ぐのが少女達ならば、大人になれない半端者のクルヴィスに出来るのは限りなく小賢しい対抗手段。

「ノイズの持つ位相差障壁。物理無効化の『障壁』<sup>プロテクト</sup>はアウフヴァツヘン波形によって奪われる、なら——俺に出来るのは『結界による同一空間固定』だけでしたんでね。結果から言えば上手くいきましたが…… いやあおつかねえ」

結界魔法による、強制的な物理法則空間への固定。一方的な炭素転

換を可能とする結界の形成は、あくまでもクルヴィスの理論上の武器だった。それは転移魔法の応用理論。つまりはノイズと人体が触れることによる化学的反応を、ノイズ「のみ」で完結させる演算空間の構築。あくまでも仮定的結論に過ぎない為に、予備のデバイスは対ノイズ専用デバイスとして構成された。

そして、その理論を実践することが出来たのがぶっつけ本番だったのは……運がなかったとしか言う他にない。

「じゃあもし間違ってたらクルヴィスさん死んでたんだよ!？」

「そんなときやそんな時つてことで。それじゃあ後は任せましたよ高町一尉! 俺は要救助者を避難させますので!」

「了解!」

クルヴィスはその場を早々になのは達任に任せ、『LINKER』を手にして涙を浮かべる奏の下へと駆け寄る。

目頭が熱い、とめどなく流れる涙が注射器を濡らしていた。血反吐に濡れて手に入れた力。薬に頼らなきゃならない力。

「ッ———こんな……!」

こんな残酷な現実があつてたまるものかッ! 奏が腕を振り上げて叩き割ろうとする手を止めたのは、やはりクルヴィスだった。

「離せよッ! 離してくれッ、アタシの歌じゃ完全聖遺物は起動しなかつたんだろう! 人類の命運なんてアタシの歌じゃ、響かなかつたんだッ!」

自負、自責、自念——嘆く奏の頬を、クルヴィスは無言で引つ叩く。

「人類七十億を人間一人で救おうなんて無謀にも程がある」

「ッ………!?!」

「そんな無謀で死ぬのも」

——不滅のエースを知っている。豪華絢爛、華美な英雄譚で飾られた男を知っている。

「そんな無理も、無茶も馬鹿げている」

その真実を、柳クルヴィスは知っていた。識ってしまった。助けられてしまった。だから……だからこそ、赦せなかった。

「天羽奏。誰かを救おうとするのなら、誰かを助けたいと言うのなら」

防人稼業と言う奏の歌も、シンフォギアも。終わらない特異災害との戦いも。

「〃戦うのを、諦めるな〃」

自らの命を賭してノイズを滅ぼそうとする絶唱を奏でようとしていたのを、非難された奏はクルヴィスから目を逸らそうとした。けど、逃げた視線が彷徨うのは、瓦礫に身体を預ける少女の姿で留まる。自分が傷つけた、奪いかねなかった命。胸が締め付けられた。言葉にならない嗚咽が漏れる。——逃げようとした、諦めようとしたのは他でもない自分だ。

〃もしも〃クルヴィスが居なかったら、そうしただろう。

〃もしも〃助けが来なかったら、歌っていた。滅びの歌を、絶唱を。

「生きるのも戦いのうちなんだから」

クルヴィスは奏の首に『LINKER』を打ち込み、肩を叩く。そのまま少女を担いで走り出した。

やがて、立ち上がり——奏は涙を拭う。戦場で泣いている暇などない。

「……、分かったよ。クルヴィス。アンタがそうまで言うなら、戦ってやるッ！ 戦って、生きて、足掻いて、歌ってッ！ 死に物狂いで生き足掻いてやろうじゃないか！」

戦場に歌が響く。一人の戦士が奏でる歌声は、やがて翼を得て鳴り渡る。その声と共になのは達は特異災害を制圧していった。

救護班に少女を引き渡し、クルヴィスはバックヤードから更に下。会場の地下を走る。本来であれば関係者以外立ち入り禁止区域だが、情報査察部で使用していた違法寸前グレーゾーンのハッキングデバイスを使って扉を開けた。

起動実験場へと入ると、中は爆発によって惨状が広がっていた。瓦礫に押し潰された職員も多数確認できる。

「弦十郎さん！」

「……っ、クルヴィス、か……」

「しっかりしてください」



「……奏は、無事なのか……翼は……？」

「ええ、二人共無事ですよ。俺は始末書ものですけど」

笑い事ではない。何が起きたのかは一目瞭然だ。完全製遺物の暴走……しかし、クルヴィスは実験場を見渡して眉を寄せた。

「ネフシユタンの、鎧は……」

「……ありません」

「なん、だと……!？」

「動かないでください。今、助けを呼びますので」

起動したはずの——暴走したネフシユタンの鎧が無い。誰かが持ち出した可能性が高い。そしてクルヴィスは改めて室内を見渡す。そこで、見知った一人が足りないことに気づいた。

「了子さんは？」

「了子君は、いないのか……？」

「探してきます、弦十郎さんはここで待っていてください。すぐ助けが来ます」

「あ、おい！ 待てクルヴィス……くッ！」

止めようとした弦十郎は全身の痛みによって横たわる身体を動かすことが叶わなかった。去っていく背中に伸ばした手を最後に、意識が薄れていく。辛うじて聞こえてきたのは、慌ただしい足音——……。

クルヴィスは何か嫌な予感がしていた。それは、言うならば情報査察部で何度も感じてきた生命の危機、第六感の告げる危険信号。嫌な予感というのは常々当たるものだ。だからこそ細心の注意を払っていた。

一切警戒を緩めたつもりはなかった、だが、曲がり角の廊下で倒れている人影を見てクルヴィスは目を丸くする。

「櫻井女史！」

「うう……ん……」

「大丈夫ですか？」

「……はあ、い。クルヴィスくん……」

「どうしてこんなところで」

「ネフシユタンの鎧が、暴走した後……助けを呼ぼうと思っていたのに、途中で気を失っちゃったみたいね……不甲斐ないわ」

「根性ありますね……」

実験場の惨状を見てきたクルヴィスからすれば、それ以外の言葉が出てこない。システムの幾つかが非常用に切り替わっており、手動での解除を試みていたようだがその道中で倒れたということだ。

「弦十郎くんは……」

「無事です」

「……そう」

「とにかく、詳しいことは病院で休んでからにしましょう」

クルヴィスは櫻井女史を背負い、来た道を引き返す。そこで救助隊が既に搬送作業に取り掛かっていたのですぐに同行する。足取り重く、気が滅入るような心地でクルヴィスはこの後の事後処理作業の量に辟易していた。どうやらまだ、自分の休暇は先になりそうだ。

——ライブ会場から去っていく一台の大型バイクがあった。後部座席にはトランクを積んでおり、アンバランスながらも慎重に運搬している。

やがて、人気のない森の中へと入ると運転手はバイクを止めた。ヘルメットを外し、まだ黒煙の上がるライブ会場の方角を見るとつまらなさそうに携帯電話を取り出す。それは、地球の技術では決して辿り着かない産物。

「……」

面倒そうに、億劫そうにため息をつくとき青年は電話をかける。後部座席のトランクを開けると、そこにはネフシユタンの鎧が静かに待機していた。封印が解かれ、一度は暴走状態となったものの今は落ち着いている。この運搬作業を「依頼」された青年の髪は蒼かった。

「ニッポンの起動実験は失敗だ。何人死んだかなんて、ニュースで見るのが楽しみで仕方ねえ。……ああ分かつてる。このニュースの報

酬は高く付くぜ？ いやはやまったくよ、完全聖遺物の起動実験なんてどこでも失敗するもんなんだな。……………悪いな、世間話は趣味じゃない。それじゃあな」

すぐに通話を打ち切ると、青年は嘲笑する。それは、誰に向けたものでもなく。

「六年前といい、何回失敗すりやあ気が済むんだか」

彼は、正確には地球の人間ではない。管理局の目を逃れて「商売」をしているだけに過ぎないただの悪党だ。今回もそう。

依頼人から荷運びを頼まれただけのこと。それがどんな仕事であつても対価に見合う報酬が支払われるのであれば、彼はどんな危険でも犯す。法でも、何でも。

「見ものだな、アンタの悲願成就」

——見方によっては、彼こそが最も歪んだ極悪人かもしれない。

## 序章：閉幕

ネフシユタンの鎧起動実験の惨劇から、二年。一時はどうなることかと思われた特異災害対策起動部二課も復帰を果たした。しかし、ツヴァイウィングは活動を休止。現在は風鳴翼がシングルユニットとして活動を続けている――。

天羽奏は、無理が祟ったのか現在もクルヴィスのサポートを受けながらリハビリを続けている。『LINKER』を絶った身体を酷使した代償は重く、だが快復の見込みがあった。それに一路の望みを掛けたの復帰活動は効果を挙げている。ツヴァイウィングとして共にステージに立てる日もそう遠くない話とされていた。

ライブの後、高町なのは。フェイト・T・ハラオウン。八神はやて並びにヴォルケンリッターが管理局の人間であると特異災害対策機動部二課に明かされ、互いに協力関係を結んだ。お互いの持つ情報を可能な限り共有し、共に特異災害を撲滅しよう。それを風鳴弦十郎は快諾した。同時に、管理局はリンディ・ハラオウンからの報告を受けて柳クルヴィスへの待遇改善を提示。ある程度、管理局の機材が搬入された。そのおかげでクルヴィスもデバイスマスターとしての腕を存分に振るえるだけの用意がされている。

互いの認識の齟齬を消化し、円滑な関係が育まれた一年を経て――  
風鳴翼は天羽奏の見舞いに来ていた。

「よ、翼。どうしたんだい、今日は」

「奏。具合はどう？」

「だいぶ身体の調子も良くなってきたよ。それにしただって病院は退屈で仕方ないねえ、アタシは翼と一緒に歌いたかったのにそれもままならない」

「仕方ないよ、奏の身体は……」

「……ま、命あつての物種だね。もうちょつとで退院できそうなんだし、辛抱するよ」

患者服を着た奏はいつもと変わらない屈託のない笑みを浮かべて

みせる。だが、それでも翼の表情は固い。

「浮かない顔してどうしたんだよ、翼。アタシの退院が嬉しくないっ  
てのかい」

「そうじゃないよ。そうじゃなくて……」

「謝るのはアタシの方さ。あのライブの失敗は」

「違う、それは私が未熟だったから」

「あの一、俺入っていいっすかね？」

言葉を飲み込む二人の視線が病室へと入ってくるクルヴィスに向  
けられた。気まずそうに苦笑いを浮かべている手には果物籠。毎日  
のように病院に通いつめているのは翼だけではない。クルヴィスも  
暇を見つけては訪れている。

「いや、邪魔するつもりはなかったんですが」

「……かまいません」

「うわあ、なんかちよつと睨まれ気味に言われると心がしんどい……  
失礼します」

「顔を合わせるたび、気まずい空気にするの止めてもらっていいかい  
？」

あのライブから、クルヴィスと翼の関係は決して良いとは言えな  
い。翼の方から一方的な嫌悪感が見て取れた。それを特に気にした  
様子もなくクルヴィスは果物を剥き始める。

「悪いね、クルヴィス。翼は」

「奏が気を使うことじゃない。この後収録があるから、また明日」

「あ、ちよつと翼！ ……行っちゃったよ、もう。あの頭の固さは筋金  
入りだね」

「それでも、奏さんと居るときは多少緩めてるみたいですけどね」  
「そうだね」

翼は、防人としての矜持を傷つけられた。自らに課せられた宿命、  
運命。それを管理局の手によって踏み躪られたと考えている。結果  
はどうあれ、防人である風鳴一族にとって時空管理局はあまりに相容  
れない存在だ。嫌われ者は慣れているクルヴィスにしてみれば仕事  
が少しやりにくいというだけであって、それ以上ではない。

互いに何も話さず、ただ傍にいるだけ。クルヴィスは剥き終えたり、リンゴを切り分けて奏に差し出し、それをさも当然の態度で奏はリンゴを食べた。

「……この二年、翼は一人で戦ってきたんだ」

「管理局も協力すると言っても、拒絶の一点張り。それでも本当に一人でやってきたんだから大した防人ですよ」

「そのプライドを傷つけた本人が何を言ってるんだい」

「はあー……俺ってどーしてこんな運が悪いんですかねえ」

「日頃の行いじゃないのかい？」

「ひっでえこと……」

ガツクリと肩を落とすクルヴィスを横目で見ながら、奏はリンゴをもう一切れ、口に放る。

「なんだってあんな憎まれるような事を言うのかアタシにはわからないね」

「俺なりの配慮ってことで」

「それ。それがアタシにはわからないんだってのさ」

「あつはつは」

「こら、笑って誤魔化すな」

この二年間、管理局側からの二課へ対する協力と言えば次元世界に関する知識とデバイス技術のみだ。直接的な戦闘支援はクルヴィスが一応の理論武装を実現させたが、それでもやはり普及には至らない。結局はシンフォギア頼りになってしまう。その為、なのは達は特異災害に対する一般市民の避難誘導に迫られた。それは、翼個人の要望でもある。

ネフシユタンの鎧の起動実験が失敗に終わり、ノイズの駆除を終えた直後。シンフォギアを解除した奏は意識を失い、病院へと緊急搬送された。命あつての物種——しかし、それは防人である翼の矜持を大きく傷つける結果となっていた。その矛先を他者に向けることなく自分に向けた結果が、今の風鳴翼。だから、クルヴィスは分かっている。そんな責め苦を一人で背負ったところで何の解決にもならないと。酷い事を言うようではあるが、そんなことをしたところで誰も救

われない。だから、少しでも救ってやろうとクルヴィスは恨まれ役を買って出た。その効果の程は……まあ、ご覧の通りである。

「奏さんが復帰すれば、翼ちゃんも少しは前みたいに可愛げ出るといいんですけどね」

「今の翼がかわいくないって言いたいのかい？」

「前よりは可愛くないと思いますよ。あんなに殺気放つてたらそれこそ足元掬われかねません」

「例えば……クルヴィスにかい？」

「まさか。俺に負けるような人じゃないでしょう」

よく言うよ。人を取って食ったような口で——奏はそう思いながらも口にしなかった。クルヴィスはそういう男だ。いけしやあしやあと飄々とした口ぶりや態度でいながら、口蜜腹剣。常に何かを隠している……“ような”雰囲気を出すのが上手い。だからモテないんだコイツは、奏は口にせずとも思っていた。

新しくリングゴを剥き始めるクルヴィスの顔を眺める。キツネのような印象を受ける顔立ちにブロンドの地毛は、クセのないストレート。左耳の十字型のピアスはデバイスの待機形態だ。鼻歌を歌いながら果物を弄ぶ姿はまるつきりただの好青年である。

「……………」

「ふんふふーん……。ん？ なに？」

「えっ？」

「そんなに見られてるとちよつと気恥ずかしいんだけど」

「……手。危ないぞ」

「へっ？」

ザクツ。

「うおイッタあ!?!」

言わんこつちやない。呆れた吐息一つ、それから——奏は笑った。退屈な毎日。病院でリハビリを続けている毎日だけど、それももうすぐ終わりだ。

季節は春。新たな出会いもあれば辛い別れもある。

それは例えば、そう。春風と共に訪れる私立リディアン音楽院の入

学式であり、二年前の再会であり悲劇の再開でもあり、喜劇の開催に  
よって物語は幕を開ける。



## ルナアタック編 魔術と唄のコンチエルト

### Tr. 1 喫茶店よろづ

——私立リディアン音楽院の入学式が終わり、これから始まる新生活に浮足立つ新入生達。そんな学び舎に新しい顔ぶれが増えることを快く迎え入れる在学生達。そんな景観はあちこちで見られるが、そのリディアン音楽院から少し離れた商店街の片隅にひっそりと並ぶ喫茶店がある。

開店してから数ヶ月、評判は上々。客足もまあまあ。店主と店員は人を選ぶが、概ね味とメニューに関しては文句の一つも言えない。珍妙な品揃えの喫茶店は本日も営業中。

その店の前に立つ女性客が居た。

高町なのは。

フェイト・テストアロッサ・ハラオウン。

八神はやて。

そして、ヴィータ。

「ここが噂の……」

「うん。喫茶店『よろづ』、間違いないね」

「なんでアタシまで……」

一人だけ愚痴をこぼすヴィータがいるが、三人は敢えて聞こえない振りをした。

ことは一時間ほど前に遡る。ここ数ヶ月の売上が落ちていると嘆くなのはに、フェイトとはやて（あとヴィータ）がその原因を探った。いや、探るまでもなくその原因は分かっていたことなのだが。

というのも、新しく出来た喫茶店に客足が取られていたらしい。そこに立ち寄ったことのある客に尋ねてみると、メニューに自由性があり、オーダーを金額次第で引き受けるという珍妙なこともしている。その新鮮さを求めて一目見てやろう一度は味わってやろうと興味を惹かれた口コミから評判が広まった。結果として、同業である翠屋が

苦汗を舐めている。

このままではいけないと友達思いの二人（プラス一人）が立ち上がった——という暇だったのもある。

特異災害対策班として編入されたものの、大半の業務はクルヴィスが片付けてしまっている。はやて達の仕事と言えば二課と打ち解けて日々の親睦を深めるくらいのもの。ノイズが発生しても、頑なに管理局の協力を認めない風鳴翼が片付けてしまう。こちらからの心配もどこ吹く風と言わんばかりの姿勢に不安を抱いていた。

「ま、本当に美味しかったらお持ち帰りで二課のみんなにも振る舞うで」

そういう算段も踏まえて、八神はやては喫茶店よろづの扉に手を掛ける。来店を知らせるベルに歓迎されて、店内へと足を踏み入れた四人を待ち構えていたのはシックなデザインの内装。暖色系の灯りは内装と相まってまるで喫茶店であることを忘れさせる。夜の酒場、シヨットバーの雰囲気だ。

間取りは——あまり広くない。だが、窮屈という印象はない。カウンター席とテーブル席が程々に用意されている。

《思ったより落ち着いた感じだね……》

念話でなのはが隣のフェイト達に素直な感想を漏らした。それに静かに頷く。来客があつたにも拘らず、店員は顔を見せない。

店内を一通り見渡すと、喫煙席は無いようだ。メニュー表も用意されていなかった。

《接客業舐め取んかな？》

《まあまあ》

はやてが既に評価マイナスを付けながら唇を尖らせる。カウンター席の造りや店内の配置を見るに、どうやら元々バーだったようだ。それを店主が喫茶店「風」に改装した……のだろうと見当をつける。

「ん？ ああ、いらっしやい。四名様？」

「あ、はい」

「見ての通り席は空いてる。好きな席に座ってくれ」

厨房から顔を見せたのは蒼い髪の青年だった。ぞんざい、というよりは適当な態度だ。客を丁重に扱おうという気が欠片もない。それにますます眉を寄せながらはやて達はテーブル席に着いた。

《思ったより若かったね》

年の程は、チラとしか見えなかったが二十代前半……同い年くらいだろう。経営者は店を離れているのか姿すら見えない。

それから間もなくしてトレーに水を載せた店員と思しき青年は四人の前におしぼりと一緒にメニュー表を置いた。

「お待ちどう様。オーダーが決まりましたら呼び鈴でどうぞ。それじゃごゆっくり」

これまた適当に、それこそ客を客と扱わない態度に、はやては口にはしないがへの字にしている。何か言いたそうな顔をしているのなののが肘で小突き、愛想笑を浮かべていた。

「あ、えーっと……このお店の評判を聞いて来たんですけど……」

「そりやどうも」

「ワンオペ制？」

「もう一人は現在買い出し中、今は俺一人だ」

言わなくても分かるだろ。とでも言いたそうに気だるげにしているものの、この時間であれば来客が少ないので一人でも十分対応出来るかと付け加えた。

ヴィータは早速メニューに目を通す。内容としてはこぎつぱりしていた。というのも、どこにでもあるような至つてごく普通のメニュー表。

「……」

ただ、そのメニューを見ていたヴィータの動きが止まった。一点を凝視している。それに、隣に座っていたはやてが何かと覗き見た。

『オーダーメイド制』

「……なあ、ちよつとええ？」

「ん？」

「この、メニュー表の隅つこのコレって……」

「食いたいもんあつたら好きに注文してくれ。常識の範疇で」

「なんでも?」

「なんでも。作れるかどうかは知らねえけどな」

頼んでみないとなんとも言えない。ただし、相応に時間はもらうとのこと。注文によっては日を跨いだりする場合もあるらしい。それがもしキャンセルになった場合どうするのか? という疑問を投げかける。

「そんなときや俺が食うだけだ」

単純明快。しかし、それならそれで、この小生意気な店員に一泡吹かせてやろうとはやてが意地の悪い笑みを浮かべた。

「ほんなら一つ注文してみよか」

「へ?」

何故か見られたヴィータが間の抜けた顔をしている。

「呪いうさぎ知つとる?」

「一応は」

「ならそののカップケーキ一つ」

「はいよ。他は?」

「なのはちゃん達は決まった?」

「えーつと、じゃあ……チーズケーキ」

「私はショートケーキで。紅茶も」

「レモンティーのホットで」

手元のバインダーに注文を書き込み、確認すると踵を返して厨房へと消えていった。

「ウサギのカップケーキって……はやてちゃん食べるの?」

「そんなわけないやん。ヴィータのやで」

「え、アタシの!」

「当たり前やん。好きやろ?」

「いや、そりゃ好きだけど……」

新たな来客を知らせるカウベルに、店員が再び顔を覗かせる。来店したのは、大きな買い物袋を持った艶のある青い髪の少女。店内を見渡し、閑古鳥に目を向けずそのまま厨房まで歩み寄る。だが、先程の店員は不機嫌そうに親指で裏口を指していた。

「裏から入って前も言ったんだけどな。鍵、忘れてったか？」  
「……」

それに少女は静かに頷く。

「ま、次から気をつけてくれ。支度、早めにな」

再び深く頷くと、少女も厨房へと入っていった。そのやり取りにあれこれと想像が掻き立てられる。精々が同じバイトといった感じだろうが、手持ち無沙汰なだけに話が弾む。

「髪の色、似てたね」

「兄妹とか？」

「それはそれで、美味しいなあ」

「キャッチコピーとか」

喫茶店で働く美形の兄妹！とか、その手の話題は近くのリディアン音楽院の生徒達が好みそうな「如何にも」な話である。厨房から姿を見せた店員がトレーを持って近づいてきた。

「聞こえてっぞ、全部。言っておくが兄妹でもなんでもねえ」

「あ、そうなんだ……」

「それで、これはなに？ 頼んだ覚えはないんだけど」

フェイトが指差すのは、それぞれが頼んだ飲み物に加えて、小さなカットケーキと紅茶のセット。それに店員が言葉を思い出そうとトレーを指先で回していた。

「なんつったっけ……えーっと、こっちの言葉で……ああ」

思い出すと同時にトレーが回転を止める。

「お通し、だっけか？ 作ってる間にただ待たせるのも何だしな」  
「……」

それは、普通居酒屋とかで出されるものなのだが——とりあえず一口食べてみる。

「——！」

単純に、ただ一言。美味しいという感想が喉まで出てきた。だが、それを飲み込んで咀嚼する。食べ合わせを考慮したクリームの甘さ、それでいてスポンジの柔らかさ。オードブルに出されるにしても金銭を要求されても仕方のない上品な味付けに、思わずなのはが目を見張

る。

「……」

「なにか?」

「えっ、あ、いや……その、美味しいです」

「そりやどうも」

味には自信があるのはですら、一瞬口ごもった。

「うわ、めっちゃ美味しいな……こんな作れるなんて店主はさぞ名のある人なんやろうね」

「確かに。翠屋に負けない美味しさ」

「翠屋?」

「うん。私の実家なんだけど……知ってるかな?」

「知らん」

即答だった。雑誌にも取り上げられた事のある程の名店なのだが、青年は一言で切って捨てた。聞けば、そういう世間の情報にはまだ疎く、らしくもなく勉強中……らしい。

「まあ、知らないならいいかな……」

「それで? その翠屋とやらの娘さんは、あれか。お友達と敵情視察ってことでオーケー?」

「はい、そうなります」

それに店員は感慨なさそうに「ふうん」とだけ呟いたが、それだけだった。

「生憎とうちもオープンしてからまだ日は浅いからな。競合店なんて知ったことじゃない」

「儲かってるんちゃう?」

「ぼちぼちでんなあ」

(案外ノリエえな、この子)

話を切り上げて、店員が厨房に戻ろうとした矢先、賑やかな一団が来店する。いずれも制服のまま、所属はリディアン音楽院。

「いらっしやいませー、いつもの四名様で?」

「今日は六名です!」

「んじや、テーブル席の方でお待ち下さい」

「はーいー！」

時間を見て、まだ学校が終わるには早い時刻の下校になのはが眉を寄せるが、すぐに思い当たった。今日はリディアンの始業式、入学式だ。それなら早い下校にも納得がいく。

ワイワイと賑やかな一団だったが、席に着いてからはおとなしくしていた。先程の店員の態度を見るに、常連のようだ。

(ちよつと、お話聞いてみようか)

(せやね。常連さんみたいやし、なんか面白い話聞けるんちゃう?)

頷き、なのはがりディアンの生徒達に声を掛ける。

「こんにちわ」

「あ、はい。こんにちわ」

「このお店って、結構人気なの？ 常連さんみたいだけど」

「そりやあ、もう。味よし雰囲気良しで更に店主さんは顔よし、ですからね。年も近いですし」

「えっ？ 店主？」

店のオーナー、ということになる。先程の青年しか姿を見せていない。なのにもまるで、いつも顔を合わせているような口ぶりに面食らった。

「えつと、ちなみに店主さんって」

「さつきの蒼い髪の人ですよ？」

「……ちなみに、いくつ？」

「んー、同じ年くらいって言ってました。十代後半ですって」

なのはが沈黙した。沈没した。紛うことなき現実に完敗している。つまりは、このお通しの無料カツトケーキも全部あの店員の手作りだ。食べただけで分かる。

「な、なのは大丈夫？」

「ううー、ちよつと自信無くしそう……世界は広いけど」

「あー、気にせんでええよ。それで、みんなはどれくらいの頻度で来てるん？」

「うーん、週二回から三回？くらいです」

結構頻繁に来ているらしい。お財布事情はともかくとして――。

「なんか、このお店に来たらコレってある?」

「そうですねえ……ねえ、なんかあったつけ?」

「ほら、アレがあるよ。メニューに載ってないけど」

「あー! アレね! なんとなくて頼んだ。アレはスゴかったね」

「アレ?」

どれだろう、聞いただけじゃわからない。

「このお店、好きなデザートとかなら何でも作ってくれるんですけど。その中でも際立って美味しいのがあるんです」

「ほほう?」

「それが『気まぐれパフェ』なんですよ」

「偶々、オーダーメイド制でデザート頼もうと、パフェ食べたいなーと思ってたんですが何味にするか決められなくておまかせにしたんですよ」

……正確には、中々決められないリディアン生徒達に業を煮やした店主が「こつちで好きに作るぞ」と決めたものだが、置いていて。

「そうしたら、もう……凄くて」

「ふんふん……面白いや私も何にするか決めてなかったなあ。んじゃ、それ頼もうか」

呼び鈴を鳴らすと、店の奥から出てきたのは少女の店員だった。落ちて着いたブラウン調の制服はスカートではなくパンツルックスタイル。上からエプロンドレスを着けてはいるがウエイトレスというよりはウエイター、男装の麗人のような出で立ち。腰まであったロングヘアも今はアップにまとめている。それにリディアンの生徒達は笑みを浮かべて静かに手を振っていた。小さく手を振り返しながら、なのは達のテーブルに近づく。

まるで人形のように伝票を用意すると、小首を傾げる。

(この店員さん、一言も喋らないんです)

それは接客業をやる側としてどうなのだろう? とにかく、はやては注文してみることにした。それほどまで絶賛される『気まぐれパフェ』の実態はどれほどのものなのかと。



## Tr. 2 ノイズキャンセラー

注文してみたもの——なるほど確かに、気まぐれだ。パフエとしての盛り付けは完璧の一言。それでいてフルーツの配置もそれぞれの角度で食べれば複数の味が楽しめる寸法。アイスもスプーンを刺してみればまろやかにとろける。冷えた舌を休めるシリアルに溶けたアイスクリームが混ざり、バニラとチョコレートの凶悪なカロリーのコンビネーション。

「……」

はやては言葉を失っていた。それから、店主と言われていた青年に顔を向ける。パフエに視線を戻す。

「え、いくら？」

「千円以下」

値段も本当に適当だった。レストランで頼むよりも遥かにボリュームがある。採算取れるのだろうか？ いや、これは間違いなく赤字だ。そうに違いない。

「安い？」

「高くしていいのか？」

安いままでお願いします。注文した内容が一通り並べられたのは達のテーブルで、ヴィータはホカホカの呪いウサギカップケーキの前ににらめっこしている。目の前には色とりどりのカップケーキ。いずれも呪いウサギの顔が描かれていた。ふつくらまるまると焼きあがったカップケーキを前にしてヴィータが思うことは一つ。

「……食うのが勿体ねえ」

「いや、食べてくれないと作ったこっちも困るんだけどな」

サービス精神に溢れるデザートの数々に、敵わない。しかしこのお店、これで中々に繁盛している。気づけば席の大半がリディアン生徒達によって占領されていた。勉強している生徒もいれば友達と談笑している客もいる。だが、誰もそれに興じて大声を出したりはしていない。喫茶店のクラシックBGMもあるのだろう。しかしながら

年頃の女子高生がこうも上品に振る舞えるのか、と疑問を抱く。

「騒ぐと店主さんに叩き出されるので……」

客であろうがなんだろうが容赦しないのが方針——らしい。それと注文した内容によつては居座れる時間も限定されている。

「コーヒー一杯、三十分。食い物なら一時間。それ以上は叩き出す」

存外自由そうに見えて規則が設けられているらしい。注文がなければ店主も退屈しのぎに客との雑談に興じている。雑誌の一面を見せてもらい、話題のスイーツなどのページを読むと店の奥へと消えていった。それからしばらくして——試作品、という名目でそれを作つて持つてくる。

どうやらそういうサービスもあることからこの辺りでは大人気らしい。

「ところで、学校とか行つてへんの？」

「行つてないな。高校中退みたいなもんだし」

言うのも悪いが、決して優等生タイプではない。むしろ素行不良、悪い方向に場馴れしていそうだ。もう一人の店員はと言うとリディアン of 生徒達に混じつて雑誌とか読んでいたりするが、それはそれでいいのだろうか。お店に来た、というよりはどちらかと言うと「友達の家遊びに来た」という感覚で来店している。馴染みやすいのもあるのだろう。店主も仕事ではなく趣味と言っていた。そのせいか、仕事をしているというよりは単に料理を振る舞っているだけのような、アットホームな雰囲気ですやかに談笑している。

「あ、すいませーん。追加でー」

「はいよー」

それはそれとしても、店は繁盛しているようだ。態度に目を瞑れば、たしかにこれほど親しみやすく通いやすいお手頃な喫茶店も無い。それでいてメニューも幅広く取り扱っている。融通もきかせてくれると、個人経営ならではの利点。今はまだ良いが、もし知名度が上がれば確かに翠屋にとって脅威となるだろう。

「むむむ……」

「難しい顔せんと、大丈夫やろ。なのはちゃん」

「だつてえ〜!」

平和な海鳴市の脅威がここに一つ。敵情視察のつもりが思わぬダメージを受けてしまった。

「それで? お土産買っていくの、はやて」

「せやな。これほどの腕なら買ってつてもいいかも」

「はやてちゃんまで……」

「それはそれ、これはこれ。買っていけば喜ぶやろ、みんな」

問題はテイクアウトを受け付けるかどうかだ。はやてが手を挙げると、すぐにルナリアと呼ばれた少女がテーブルに近づく。

「ここってテイクアウト大丈夫なん?」

首を縦に振り、メモ書きをテーブルに置いて店主を呼びに行った。

「テイクアウトメニュー?」

「そう。大丈夫みたいやけど」

「まあ一応やってはいるが。どれぐらいの量の何を持っていくかだ」

「何かオススメとかあればいいんだけど」

「こつちの都合で言うなら、ケーキかクツキー。楽だし」

「マジでそつちの都合かよ……」

むしろここまで腹を割って一言断っていると清々しい。取り敢えず、店主が一番大量生産しやすいという理由でクツキーの詰め合わせということになった。明細書にサインを入れて、予約の形で承った店主はそのまま別な客の会計の対応をしていると街中にサイレンが鳴り渡る。

それに怪訝な表情を浮かべているのは店主一人で、リディアン生徒達はうろたえるばかりだった。なのは達にもその理由は分かる。これは——認定特異災害が発生した警告のサイレン。

「ん?」

おもむろにポケットから携帯電話を取り出して言葉を二、三交わすと億劫そうに溜め息をついていた。それぞれのテーブルに載せられていた伝票を手渡すと、店の扉を開ける。

「お代はいいから、はよ逃げろ」

「え、でも」

「その伝票。次に持ってきたら無料にしてやるから」

「店主さんは逃げないの？」

「客預かっているのに先に逃げるわけないだろう。ルナリア、お前も早く行け。ちよいとした私用だ」

ルナリアが頷き、店主に催促されてなのは達が退店する。思い出したようにはやてが立ち止まり、店主の方へ向き直った。

「なんだよ。クツキー詰め合わせなら明日には用意しておく」

「それはええけど。まだ名前聞いてへんかったなつて」

「自己紹介するほど親しい仲間でもなし、店を預かっている身分。『マスター』とでも呼んでくれりゃ……まあ、ちつとは嬉しいか」

「そっか。それじゃ、そっちもすぐに逃げるんやで、マスター君」

「またのぐ」来店をお待ちしております」

これまた適当な態度で店主、マスターははやてを見送り、店内に客が残っていないことを確認するとすぐに厨房に放置していた道具を片付け、ガスの元栓などを閉めて裏口から出ていく。避難勧告の出ている人々とはまた別な方角へとのんびり歩き始めていた。首元のボタンを外して襟元を緩め、気だるそうに吐息を漏らす。それは一種の病氣、発作のようなものだ。

「こんな時に呼び出さなくてもいいだろうがよ、まったく……」

——ノイズ発生から間もなくして、クルヴィスが向かった先は二課本部ではなく、とある民間人の尾行。その少女こそは二年前のネフシユタンの鎧起動実験に助けた、立花響に他ならなかった。あの日から、二課の方で秘密裏に監視されていたが、それも今日まで何事もなく普通の女の子として生活を続けてきている。

その理由は、奏の纏っていたガングニールの破片が響の身体へ混入したことからだ。人体と聖遺物の融合。それは作為的なものではなく、事故によるものだが、それでも聖遺物の経過を観察するには好都合だ。あまり褒められたものではないが、クルヴィスはそれに否定的な意見は無い。仮に、もしもの話。適正のない普通の女の子が聖遺物を扱えるのならば——それは即ち、適合係数の低い適合者にも転用

できるのではないか。そうすれば、いつかはガングニールを自在に扱える日が来るのではないだろうか、と。クルヴィスはそう考えていた。

《クルヴィス、そちらからの観察はどうだ》

「ノイズだらけで鬱陶しいことこの上ありませんな」

対認定特異災害専用デバイス。ノイズキャンセラー。二又の長槍型デバイスとして調整され、それによって切り裂かれたノイズが炭素転換されて消滅していく。この二年、地獄のような調整と修練と調整と調整と調整と——それと、残業は無駄ではなかったようだ。

ここまで作り上げるのにどれだけ苦労したと。クルヴィスはその効果が確かなものであることに達成感で胸が震えた。

（ノイズに効果あり、と。問題はコイツが量産出来ないってことか）

まだ課題は残されているが、実戦投入可能なレベルだ。立花響が逃げ遅れた民間人の幼女を抱えて走るのを追いながら、クルヴィスは助けにいけない自分の境遇に歯噛みする。無論、いざとなればすぐにも助けられる距離だ。こちらに狙いを定めたノイズの攻撃を一発でも貰えばそこには死が待ち受けている。

「死ぬのだけはマジ勘弁な！　まだ奏の退院祝い用意してないんだから、さー！」

横薙ぎ一閃。ノイズが蹴散らされていく。

### Tr. 3 裏方コンビの連携力

二課の管制室が立花響、並びに別行動中の柳クルヴィスの動向に注目している最中、不穏な動きを見せる男がいた。それは、秘密裏に掛けられた招集命令によって都心を離れた一軒の館へと向かう。フルフェイスヘルメットをかぶってバイクを走らせること小一時間。合鍵を使って館へ入ると面倒くさそうに嘆息する。どうしてこう、非常事態に呼び出してくれるのか。人様の神経を疑う。だが、理由はどうかあれ仕事が無い以上は仕方ない。

かくして、喫茶店『よろづ』の店主は不満げに椅子に座り込んで唇を尖らせている少女とすれ違いざまに片手を挙げて無言で挨拶を交わす。

「……ふん」

鼻を鳴らされ、その手に持っている杖を一瞥する。

「ちゃんと起動してるじゃねえか、それ」

「当たり前だろ」

ぶつきらぼうに会話を切られるも、マスターは気にも留めなかった。東京都心を中心に発生している特異災害を人為的に引き起こす元凶が、こんなにも近くにある。その事態を解決するどころか傍観を決め込んでいる彼こそは共犯にして共謀者に間違いないのだが、誤認だ。何故ならばマスターは「この事件に一切関与していない」のだ。協力者ではない。ただ仕事先がそういう場所であったというだけの話。彼の仕事と言え、この館の掃除と身の回りの世話程度のもの。下働きというだけで罪に問われることはない。——だが、彼は確かに共謀者だった。

「なにしに戻ってきた。まだ向こうで仕事じゃねーのか」

「そうなんだが、仕事の取引に俺が代理で呼ばれてな」

マスターはそう言いながら少女の顔を見る。

「『フィーネ』の世話も楽じゃなそうだな」

「俺としては今の境遇が気に入ってるんだがね、雪音クリス。衣食住揃って、趣味に没頭出来る。多少退屈なのが玉に瑕だが……ま、そこ

は目を瞑るさ」

肩をすくめながらマスターは部屋の奥へと歩み、モニターを点けた。サウンドオンリーのディスプレイに語りかけると、すぐに反応が返ってくる。

「毎度どうも、フィーネの代理人だ」

《……》

「御用があるなら手短にどうぞ？　米国連邦聖遺物研究機関のお偉いさん」

《あの女が女なら、貴様も大概だな。子飼いの分際で》

「減らず口は減らないから減らず口って言われるんだぜ？　余計な一言ともな。用件は」

《ソロモンの杖は》

「順調に起動中。俺は詳しく知らないがね。動作確認中だが、今のところ不備はないようだ」

ふてくされているクリスが持っているソロモンの杖を見て、それから画面に視線を戻した。

《ならば良い。引き渡しの日日は》

「悪いがそれは俺も聞いていない。直接フィーネに言ってくれ。他には？」

《……こちらで製造した“デバイス”の起動実験。それに貴様の手を借りたいと思つてな》

「どっちのだ」

《フィーネではなく、貴様個人にな》

「あー、そういう。どちらにしる俺個人に“依頼”したかったのか。別にいいぜ、話は聞くだけ聞いてやる」

《日を改めて連絡する。フィーネに伝えておけ、いつまでも甘い汁を吸えると思うなよ。とな》

「覚えてたらそう伝えておくさ。それではまた今度」

通話を終えてモニターを切ると、壁面に収納されていく。コンソールパネルを叩いて画面を切り替えると、東京に発生したノイズの動きが観測されていた。頬杖をつけてしばらく眺めていたマスターだっ

だが、途中で飽きたのかすぐにディスプレイを消した。

「いいのかよ、フィーネの指示もなく勝手に」

「向こうが勝手やってんだ。俺も好きにするさ。それで、クリス。暇そうだな」

「アタシはフィーネに言われた通りにノイズを呼び出したただけだ」

「なーに考えてんだかね、俺のクライアントは」

「知るかよ。ただ……」

「ただ？」

「アタシが見た限りじゃ、カモネギみてえな顔してた」

「カモつつうか女狐の間違いだろ」

「どこ行くんだよ」

広間から去ろうとするマスターの背中に声をかけると、一枚の紙切れを取り出して見せる。

「予約の注文が入ってな。明日までにクッキーを山ほど焼かなきゃならん。しばらくキッチンに籠もるから邪魔してくれんじゃねーぞ」

「こつちのセリフだ。勝手にしてろ」

ああ言えばこう言う。広間に一人残されたクリスは、手持ち無沙汰にソロモンの杖を弄んでいた。

柳クルヴィスは、終始ノイズの群れとの交戦に手一杯の状態となり、気づけば立花響を見失っていた。それに愚痴を漏らしながらも迫る一匹を破壊して、二匹目を自壊させ、三匹目四匹目と立て続けに炭素転換させる。

「ええいちくしょうに！ 数だけはやたらめつたら多いつたりやねえ！」

息を切らしながらクルヴィスは現状打破に乗り出せずにいた。数の暴力とはこういうことかとクルヴィスは整息しながらノイズの攻撃を避ける、捌く。怒涛の攻撃の波を乗り切って、一転して脱兎のごとく駆け出す。その後姿を追うノイズ達だが——不思議なことに追いつけない。届かないどころか距離が離されていく。それには二課の管制室もどよめいていた。どんな手品を使えばそんな脚力が出る



のかと。しかし、と答えに至った。

そも、柳クルヴィスは地球出身、管理局育ち。そうならば、自然とその手段も見えてくる。身体強化。補助魔法の一種ではあるが、瞬間的に魔力を放出させることで効力を倍加させている。跳ねるようにして駆け抜けてノイズの包囲網から離脱した。空中で反転しながらノイズキャンセラーを投擲、着弾点から周囲に結界を発動させる。徒手の状態から本来のデバイスを構えて薙ぎ払う。魔力によって延長された穂先がクルヴィスに襲いかかろうとするノイズを一掃した。

「……ふい〜……！」

汗ばむ身体を冷ましながら呼吸を整える。魔力の消耗も激しく、目標を見失った以上焦っても仕方がない。クルヴィスは一度状況確認の為に手を止めた。

「こちらクルヴィス。目標の行動は——」

二課に通信を取るクルヴィスに返ってきた言葉は、立花響がノイズに追い詰められているという報告。それに胸を捕まれる思いをしながら、先を急ぐ。座標確認、位置の把握もできている。後は、自分がどうやってそこまで行くかだ。気づけば日は暮れている。そんな長時間戦闘したのもそうだが、よく逃げ切れたものだと驚かされる。

《クルヴィス》

「なんですか、風鳴司令」

《立花響君が聖遺物……つまりは、二年前。身体に埋まったガングニールを起動させた》

「……マジですか。奇跡って起きるんですね」

聖遺物と人体の融合症例、その第一号である立花響の監視は間違いではなかったことがこれで証明された。そして、管理局に報告する事案が一件増えたことにクルヴィスは深々と吐息を漏らす。

「ですが、戦闘訓練を受けたことのない彼女が聖遺物を扱えるんですか?」

率直な疑問に当然の答えが返ってきた。ガングニールに振り回されている、と。

まあそらそうだな——クルヴィスはそんなことを考えながら、暴

走の危険に備えながらも自らも移動していた。流石に連戦が厳しく、思うように身体が進まない。そんなクルヴィスの横に止められる一台の車。

「クルヴィスさん！」

「お、さすが緒川さん。ナイスタイミング！」

車に乗り込み、先行している風鳴翼の後を追う。

到着する頃には既にノイズの殲滅は終了しており、民間人の少女は無事に保護された。その後二課による情報規制が行われ、二年ぶりの再会を果たす。

自分の身に起きたことが分からず狼狽えている立花響に、柳クルヴィスは親しみを込めて笑みを浮かべながら小さく手を振る。

「あ……」

「やあ、久しぶり」

「もしかして……ライブのスタッフさん？」

「そう、元・ライブのスタッフさん。今は色々事情が織り交ざって特異災害対策機動部二課の協力者！」

「そうなんですか！」

「そしてこちらは緒川さん」

「緒川慎次です」

「あ、どうも」

「はい、そういうわけで君の身柄を確保させていただきます」

「え？」

「ではこちらに」

「えっ？」

流れるように自己紹介から立花響を確保して二課本部へと連行することになった。

## Tr. 4 焼きたてクッキーモンスター

その後、二課では立花響の歓迎会が行われ、お開きになると櫻井了子が二課本部を後にする。向かう先は街から離れた一軒の館。

広間へ向かいながら眼鏡を外し、髪を解く。白衣を脱ぎ捨て、スーツを脱いでいき、一糸纏わぬ姿で広間へ入ると、そのテーブルの上には山のように積まれたクッキーが待ち構えていた。上機嫌に水を差され、わずかに片眉を動かせる櫻井了子——フィーネはそれに手を伸ばす少女に視線を向けた。

「……もぐ」

「……ただいま、クリスマス？ いい子にしてたかしら？」

「モグ、ごくん。おかえり、フィーネ。アタシは言われた通りにやったぞ。あれで、いいんだよな？」

「ええ。おかげで面白い物が見れたわ」

微笑み、嬉しそうにしているクリスマスに目を細めるフィーネだったが……それよりも気になるのがテーブルの上のクッキーだった。別に食べているのはいい。咎めるつもりなどない。

「この、バカみたいなクッキーの量は何？」

「失敗作だつてさ。何が違うのかアタシにはわからないけどな」

「これが？ こんなアホみたいな量の？」

何がどう失敗作なのか、フィーネにも分からない。見てくれはよく焼き上げられているクッキーだ。一枚を手にしてまじまじと眺める。チョコとバニラのチェック柄。時間が経っているからか冷めているものの、その表面の焦げ具合でどれほどの焼き加減が分かる。試しに一口……。

「……何が違うの」

「さあ。わかんね」

「こと甘味に関しては、それこそ一分の妥協も許さない姿勢は嫌いじゃないわ。好きでもないけどね。それで、これを焼いた奴は今なにをしているの？」

「まだ厨房に籠ってる」

呆れた。ほとほと、心底呆れ果てた溜め息をこぼしてフィーネはクッキーを頬張る。中まで火が通らない、或いは焦がしたとかではないようだが、何が気に入らないのだろうか？ そんなことに疑問と苛立ちを覚えていると、鼻につく芳醇な香ばしき。それに振り返れば、焼きたてのクッキーを手にして満足そうな顔をしている蒼い髪青年がいた。

「よう、フィーネ。食うか？」

「今食べたわ。説明してもらえるかしら、この、バカみたいな量のクッキー」

「興が乗ったら手が止まらなくてな。なんつーか、途中から雑になった。だから一から焼き直した」

「大概にしなさいよ」

「ま、全部食えとは言わないさ。適当に詰めて明日にでも店で振る舞う。メシの用意ならしてあるが？」

「まずクッキーを片付けてから用意してもらえると嬉しいのだけれどね、マスター？」

「こっちは成功作だ。試食してくれ」

言われて、クリスは迷うことなく一枚。フィーネも口をへの字にして手にすると、焼きたてのクッキーを食べる。先程の失敗作との違いが全くわからないが、本人のこだわりなのだろう。些細な味付けの違いが分かる必要もないが、食費もタダではない。

「違いがわからないのだけれど？」

「理解してくれとは言わねえさ」

言いながらマスターは、両方のクッキーを食べ比べる。成功作と評した方では頷き、失敗作と評した方はやはり渋い顔をしていた。

「やっぱり固いんだよな、こっち」

「冷めたからじゃないの？」

「冷めてもサクサク感の残るクッキーが焼きたかったんだよ俺は。こんな固い奴作るつもりはなかったんだ。つたく、やっぱこっちの材料は慣れねえな……」

ぶつくさ言いながらクッキーを片付けるマスターが思い出したようにファイネに向き直る。相手は全裸であるが、それに恥ずかしげもなく顔を向けていた。まるでそれが見慣れたものであると言わんばかりに。

「そういや、アンタ宛に来ていた連絡。米国からだったぞ」

「へえ？ それで、なんて言ってたのかしら」

「ソロモンの杖の近況。上手くいってるのかどうか、ってな。それと催促と警告。いつまでも甘い汁吸えると思うな、ってな——」

鼻で笑うファイネが、考え込むマスターに眉を寄せた。

「どうした」

「……いや、甘い汁で思いついたんだがホットケーキも悪くねえなと」

「お前の頭ん中フワッフワだな……」

「不在の間、勝手にしろとは言ったわ。でもね、今後こういうのは控えてもらえるっ……」

「んじやあ俺からも一言いいか？ 店の営業中にノイズを近辺に出すのは勘弁してくれ。客の処理が面倒くさいんだ」

「誰のおかげでそのお店が営業出来ていると思ってるのかしらね」

「俺の売上じゃねえかな？」

売り言葉に買い言葉。命知らずとはこういうものだ。クリスの不審な目つきも、ファイネが目を細めているのもマスターは笑い飛ばす。

「それとは別口で、俺個人に仕事を頼んできやがった。なんでも向こうで『デバイス』の製造が出来たからそのテストがしたいんだと。それに協力してくれってさ」

「デバイス？ ああ、六年前に持ち込まれたという異端技術のことね」

「……そう捉えてもらって構わんが、ちよつと違うな。そも、デバイスの技術ってのは外世界の科学技術のことだ」

「六年前、米国連邦聖遺物研究機関で行われた実験。それと引き換えに渡されたデバイス技術——魔法プログラムの解析。それに随分と手こずっていたみたいね」

「そりやそうさ。魔法なんてちゃんちやらおかしい。誰もが夢見た空

想御伽噺、それを機械で制御するなんてのは向こうも理解に苦しんだろうよ」

この六年間、米国連邦聖遺物研究機関が費やした歳月に思いを寄せ、マスターが嘲笑した。

「言つちやなんだが、オーバーテクノロジー超越技術だろ？ そんなものをよく解析しようと思つたな、あちらさんは」

「それほどまでに魅力的だったんじゃないかしら？ 私は興味ないけど」

「ま、アンタはシンフォギアシステムの開発責任者。もとい第一人者、おいそれと他の技術に遅れは取らないか」

「それで？ 米国からの依頼は受けるのか？」

「そりやあま、あちらさんからの仕事なんて滅多にないしな。出すもの出してくれりや俺は文句ないさ」

その横でクリスがさりげなく失敗作のクッキーと成功作のクッキーを食べ比べていた。だが、その違いが分からず、疑問符を浮かべながら小首を傾げている。

「なにがちげえんだ……？」

「おい、クリス。あんまりこつちの食べんな。客に出すんだから」

「いーじゃねえか、そんだけあんだから」

「菓子食うならメシ食え、メシ。適当に作つてやるから」

フィーネは腰に手を当ててマスターに無言で夜食の催促をする。それにすぐ気づいて肩をすくめた。

（クリスと仲が良いのはいいが、あまり余計な知恵を入れられても困るな……）

確かに有能だ。勤勉、と言つていいのか知らない技術に関しては積極的に学んでいる。だからこそ危険性もある。本人は勤勉家と言うと非常に微妙な表情をするのだが。

（正体の知れぬ男ではあるが、あれはあれで使いようがある）

二年前のネフシユタンの鎧をライブ会場から秘密裏に運び出したのもマスターだ。計画の補佐に立ち回ってくれるので非常に助かっている。ただ、時折料理に向ける情熱で暴走する時もあるが、かわい

いものだ。クリスの世話も勝手にしてくるので助かっていた。

一体なにを考えて自分の計画に手を貸しているのかも分からないが、手駒が多いのは良いことだ。米国からのスパイでもなし、管理局の手先でもない。

「まあいい。マスター、その米国からのデバイス実験はそちらに任せ  
るわよ」

「心配すんな、別にアンタの計画を邪魔するつもりはねえよ。ああ、そ  
うそう。それともう一つ思い出したんだが——」

山盛りクツキーを持ちながら、マスターが振り返る。

「喫茶店翠屋って知ってるか？ できれば行き方教えてもらいたいん  
だが」

「……それならクリスと一緒にいくことね。私は二課を離れられない  
から」

「んじや、そうするかね。別にいいだろ、クリス」

「フィーネが言うなら、しよーがねえから付き合っつてやる。ただし」

「へーいへい。俺のオゴリな」

それが一般的には「デート」と呼ばれるものだが、不思議なことに  
この二人には色恋沙汰の様子など欠片もなかった。それに安堵にも  
似た心境で見送るフィーネはバルコニーから月を見上げる。

Tr. 5 平穩。その裏に潜む不穩

次の日。マスターはクッキーの詰め合わせを用意して、フィーネとクリスの朝食を作り終えると二人を起こした。二課の仕事があるためフィーネは朝早くから既に元の肉体である櫻井了子の容姿へと戻っている。いつ見ても奇怪な現象であると眉を寄せるが、そんなことは置いておく。

「あら、何かしら？」

「いんや、別に。朝飯できてるからさっさと食つといてくれ」

「わかってるわよ。それから、私からも一つ言っておくことがあるわ」

「んー？」

「天羽奏がそろそろ復帰するわ。そうなれば、今までのようにはいかないでしょうね」

「なら、俺はこれまで以上に世間様の目に怯えながら過ごすことにするさ」

「どの口が言う。このオオカミ少年め」

「アメリカ手玉に取る雌狐に言われたくねーな。クリスを起こしてくる、今日は翠屋まで案内してもらおうからよ」

フィーネが並べられている朝食を前に溜め息を吐くのと同時に、マスターはクリスの寝室へとノックをしてから入る。

「起きろー、クリス。朝飯だ」

「……………んー？」

まだ寝ていたのか、カーテンを閉め切った部屋からは朝日が射し込んでいた。寝間着が着崩れてだらしない寝顔を晒していたが、寝ぼけた頭のクリスはぼーっとした様子で起き上がる。

「……………むにゃ」

「はやいところ着替えてくれよ。今日は海鳴市まで行くんだから、お前に案内してもらわなきゃそれなりに困る。店の用意もあるしな」

「んー……………」

片手を力なく振るクリスの肯定のサインに、マスターは腰に手を当てて呆れていた。なんて低血圧なやつだと。



部屋からマスターが出ていった後、自分の服装を見てからクリスは一気に意識が覚醒した。その後殴りかかったものの、敢え無く掠りもしなかったという。

身支度を整えたクリスに、今度はマスターが帽子とグラサンを差し出した。無言で睨みつける姿に、心当たりでもなさそうに首を傾げる。

「……なんだよこれ」

「なにつて、変装道具」

「はあく？ コレが？ なんでだよ」

キヤスケツト帽に、シックなグラサン。まるでアイドルの変装小道具だ。赤を基調としたワンピースに合わせたコーデイネートなのはいいが、まるで意味がわからない。何故変装する必要があるのかと。

「ほれ、一応お前は有名人だしな。一部界限で」

「どういう——」

「行方不明の東洋人が、おいそれと喫茶店に立ち寄るわけにもいかないだらう？」

二年前、テロリストの手から解放された。そして、自分を迎え入れてくれたファイネの下で世間から隠れるように過ごしてきた。世間体では自分は未だ行方不明者とされている。そんな自分が顔も隠さず出歩くわけにはいかない。微妙な表情で断ろうとするクリスに、無理矢理帽子をかぶせて、グラサンをかけるとマスターは納得したように頷いた。

「流石ファイネ、女物のコーデは任せるに限る」

「お前が選んだんじゃねーのかよ！」

「当たり前だろうが。俺がそんな金にもならねえことするわけねえ」

尤もだ。唯我独尊、自分の損得優先。クリスの知っているマスターという男は、つまりはそういう——そう、悪魔のような男だ。快楽に溺れさせ、欲望を加速させ、墮落させて、全てを容赦なく一切合財を奪い取って嘲笑う様が似合う。

しかし、しかしだ。自分はこれでいい。お前は どうするんだ？ ク

リスがそう尋ねると、ワックスを片手に髪をかきあげてエッジのきいたグラサンを掛ける。それだけでなく、普段は着ないようなタンクトップに柄シャツを羽織り、首からアクセサリを着けていた。オシャレではなく、当人曰く、これが「変装」らしい。本性の間違いやないのかと聞きたくなるが、不思議なほどに目立たない格好を好むのがマスターだ。

「さて、それじゃ道案内頼むぜ。一応菓子も用意したし、バツチリだな」

「フイーネの頼みじやなきや誰がお前となんか……」

「誰がテメエのメシ作ってやってると思つてんだ感謝しやがれ」

売り言葉に買い言葉、隣に並びながら延々と駅まで愚痴をこぼしながら切符を買って電車に乗り込む。そして、一時間もしないうちに海鳴市へと到着した。東京都心から近場ながら、それほど目立つ物があるわけでもない。主要施設は揃っているものの、住宅街が多く、平穩な街並みが並んでいる。

喫茶店翠屋は、そんな海鳴市の名所の一つとして名高い。万年新婚夫婦と評される高町夫妻が経営している。クリスは終始ふくれっ面で道を案内し、マスターは時折足を止めては見慣れない菓子屋のラインナップを眺めていた。

「……なあ、疑問なんだけど」

「美味そうだな、コレ……」

「なんでそんなに料理好きなんだ？」

「別に。理由はねえよ。強いて理由があるとすれば——刃物握つてて世間様に怒られずに済む」

「……………」

「——冗談だ。真に受けんな」

一瞬、一瞬だけ見せた笑み。何かに飢えていたような素振りさえ見せたマスターに不信感を抱きながらも、クリスは喫茶店翠屋への道案内を終える。住所を確認しながら歩いて小一時間ほどで到着した喫茶店は、昼前だからか席が埋まりつつあった。

中へ入ると、管理局の仕事の合間に手伝いをしていたのは笑顔

を向けて迎え入れる。

「いらっしやいませ、翠屋へようこそ！」

「約束どおりお邪魔します」

「へ？ え、あ、マスター君？ 隣は……」

「……」

クリスが帽子を目深に被りながらマスターの陰に隠れようとしていた。それに少しだけ意地悪な笑みを浮かべながらなのは何かを察する。

「彼女さんかな？」

「かの——、ちが、アタシは！」

「まーそう見えてるんだったらちようどいいか。何も持ってこないのも不躰かと思つて、ケーキ焼いてきたんで良かったらご家族でどうぞ」

「わざわざありがとう。奥の席が空いているからどうぞ」

「それ宣戦布告みてーなもんだろ……」

クリスの呟きをマスターは聞こえない振りをすることにした。その為に来たようなものなので相手が気づいていないのならばそれに越したことはない。

「どうぞごゆっくり。なのはから聞いたけれど、最近噂になつている喫茶店よろづのオーナーさんなんですつて？ そんなに若いのに偉いわねえ」

「いえいえ、こちらも店に来るお客さんからよく耳にしていたので来てみたかったから良い機会です。海鳴市と言えば翠屋つて聞いてましたからね」

「あらあら。そんなに？」

（ネコかぶりやがつて……）

ショートケーキを頬張りながら、高町桃子と会話に花を咲かせるマスターにクリスはグラスンの下から面白くなさそうに睨みつける。だが、そんな姿を見ていたなのはからの視線に気づいて硬直した。

「それで、君はマスターくんとはどういう関係？」

「あ、アタシは別に……どういうつて聞かれても……」

「どうという関係でもなし。強いて言うなりや、同年代の女友達って具合で一つ」

「ふーん、そうなんだ。……本当にい？」

「こら、なのは。そんなに勘ぐっちゃ可哀想でしょ？」

「はい」

「それじゃ、後は若い子に任せてごゆっくりと」

それを言っている相手が自分達と大差ない年齢に見えるのは如何なる魔術の類なのか。マスターは愛想笑いをしながら追加で注文する。

「……なあ、アタシバレてたりしねーだろうな」

「もしそうならとつくに逃げ出してる」

(ならなんで道案内させたんだよ……)

クリスは心中でツツコミながらも、癖になる甘さのケーキにフォークを差した。だが、バランスを崩したケーキが横倒しになる。それを見ていたマスターはコーヒーを一口含みながら鼻で笑った。それに、カチン、と来たクリスが睨む。

「なんだよ。アタシの食い方に文句あるのかよ」

「いや別に。ただ下手くそだなと思っただけだ」

「口に出してんじゃねーよ」

それじゃ意味がないだろうに。しかし、倒れたケーキを食べようとすれば更に崩れていく。悔しそうなクリスの前でマスターはと言うと——直立したままのケーキにフォークを刺して皿を汚すことなく完食していた。

「いらつしや——リンディさん。こんにちわ」

「やつほー、なのはちゃん。お邪魔するわね」

「珍しいですね、どうしたんですか？」

「まあ、今日はちよつとした仕事のお話。いいかしら？」

「はい。大丈夫です」

カウンター席に着くリンディに、なのはが水を出す。それに加えて、抹茶とシユガースティックを大量に。早速封を開けて混ぜながら話を切り出した。

《実は、つい最近になってクレイモアが活動を再開したのよ》

《例の次元犯罪組織ですね》

《そう、時空管理局を目の敵にしている組織。それに合わせて特務次元航行隊もその任務に当てられた。今の私に開示された情報はそれほど多くないのよ、でもその中に気になるものがあったね》

《特異災害に関するものですか？》

《いいえ、それとは直接関係がないのだけれど——あの事件を覚えているかしら？ 闇の書事件とは別に起きた、米国で起きた完全聖遺物の実験よ。それに時空管理局が関与していた》

それはなのも知っている。地球に管理局が関与するのはそう多くない。しかし、二課が発足されたのは十年前だ。そちらからではなく、米国に接触という形でのアプローチ。それが疑問だった。

《その時に結ばれた条約があるのよ。今は形骸化しているけれど、技術交換——》

《……デバイス技術と、異端技術の情報開示？》

《そう。だけどそれは結局、管理局の一人勝ち。米国は開示されたデバイス技術を解明していたけど、自分達の手には収めることはできなかった》

《だけどそれが、クレイモアと……》

《これはクルヴィス君には提示されていない情報。いい、なのはちやん。クレイモアが、地球に接触——管理局の技術を前に悪戦苦闘している米国に自分達が所有しているデバイス技術を横流ししたとしたら……どうなるかしら》

柳クルヴィス三等陸佐の職務は、あくまでも『次元世界で観測されている特異災害の対策』であり、決して『次元犯罪組織クレイモアの鎮圧』ではない。

事実、クルヴィスの知らされていないところで管理局は秘密裏に動いていた。現在は衛星軌道上で観測艇が停泊中だ。だがこれはこの数ヶ月の間に配置されたものであり、管理局の意向とは関係なしにクルヴィスは情報を掴んでいる。地上の情報査察部が気を利かせて報せており、つまるところ筒抜けだった。キツネを欺くなど愚策に等し

い。

《私も二課の情報には驚かされっぱなしだけど、米国の執念も末恐ろしいわね》

《そうですね。シンフォギアシステム、櫻井理論。昔じゃ考えられませんでした》

小学生だった頃——魔術と出会う前には特異災害に怯えるばかりだった地球。それがこうして立ち向かえる力を手にしたのは喜ばしいことだ。問題はその技術が世界に開示されおらず、二課の保有している技術で留まっている点。なのは達は管理局の人間であることを抜きにしても信頼されて情報を渡されていた。そして、その報告の有無はクルヴェイスに一任されている。

《時空管理局が確認したクレイモアの活動報告。ロストログアを奪取した後、撤退。そして地球で検知された次元反応……これは偶然かしら?》

《そうは思えませんね》

《いずれにしても、ノイズ以外にも敵は多いわよ。高町一等空尉》

《はい。肝に銘じておきます》

表向き、二人は他愛ない会話で談笑しているように見せかけている。だが、念話で進めている会話は決して笑って聞き流せるものではなかった。

そして、マスターとクリスはフィーネへの手土産を買って翠屋を後にしている。二人の姿が無いことになのはが気づいたのはリンディが退店した後のことだった。

——クルヴェイスは、いつものように奏の見舞いに来ていた。その足取りが重いのは多分、朝っぱらから叩き起こしてくれた最悪なニュースだからだろう。天羽奏の華やかな復帰に相応しいビッグニュースとは、決して言い難い。

次元犯罪組織クレイモア。恐らく管理局が観測している中でもトップレベルに入る危険性の相手が、地球に来ていたとすれば……それはやはり、現地の戦力では決して対抗出来ない。二課の協力を仰げ

ば、恐らく快諾してくれるであろう。だが、クルヴィスの脳裏に浮かぶのは歓迎会で右往左往していた立花響の姿だった。

ライブ会場でノイズに襲われ、そして今。それとは別に現実的な命の危機に晒されている。何の戦闘訓練も受けていない少女が、だ。一昼夜のうちに戦う力を手にして、戦場へと送り出されようとしている。

それは、笑顔で自分を迎えてくれる患者服の奏にとっても、そう遠くない話。

「よ、クルヴィス。アンタも飽きないね、こう毎日」

「まー、なんてーの？ いなくなつて初めて気づく奏の癒やし要素？」

「なんだい、それ。口説き文句のつもり？ おためごかしは結構だよ、特にクルヴィスからは」

「うわー、それとなく傷つく俺のハートは硝子張りなんです。あ、お土産にケーキ買ってきました」

「お、ありがとうございます。気が利く男は良い女に好かれるよ」

「ははっ……」

生憎と生まれてこの方、異性にモテたことなど一度もない。中身の無い笑みを浮かべていると、眉を釣り上げて奏はクルヴィスの頬を軽くつつねった。

「人が褒めてるんだからもうちよつと嬉しそうにしなよ」

「うれひいんですけどね、すごく」

「……？」

「まあ、嫌われてないなら結構です。どれ食べます？」

「イチゴ」

あらかわいいチョコイス。クルヴィスは思わず笑みがこぼれ、今度は頬を紅潮させた奏に頬をかなり本気でつねられていた。

Tr. 6 財布に優しい台所

その日、八神はやてが二課に大量のクッキーの詰め合わせを持ってきて振る舞った。注文した当の本人も驚いていたし、喫茶店よろづでは『当日限りクッキーフェア開催中』の看板まで用意されており、抜け目のない営業方法に思わず固唾を飲んだという。

「いやー、驚いたで。今日限り注文したお客様にクッキー無料で追加。しかもなくなり次第終了でお持ち帰りオツケーやったし」「なるほど……」

弦十郎も一枚、口に放る。砂糖のほのかな甘味、ほどよい噛みごたえ。ほのかに香るチョコとアルコールのハーモニーに思わず唸った。クッキー一枚だけでもこの拘りよう、それが山となっているのだから驚きだ。

「先程、クルヴィスから奏の退院予定日が決まったという報せが来た。響君もいる、翼もいる。これで本格的にノイズに対抗できるというわけだ」

「ツヴァイウイング完全復活、というわけですね。風鳴司令」

「ああ。だが、奏も本調子ではないだろう。そこでだ、八神二佐」

「わかってます。私ら管理局の出番、というわけですね」

「ノイズを相手に戦闘訓練などリスクが高すぎるからな。そちらの技術に甘んじることにしようと思う」

「でも、それでしたらクルヴィスさんが適任なのでは？」

「いいや。あいつはあいつで奏のマネージャーとしての仕事があるからな、無理強いはさせられん」

朗報、吉報の裏で、櫻井了子はクッキーの山に苦い顔をしていた。「あ、了さんも如何です？ 美味しいですよ？」

「うーん、私も食べたいのだけど今はそういう気分じゃないかしらん。奏ちゃんの復帰もおめでたいのだけど」

「……了子君の言う通りだ。これまでのノイズの出現状況は明らかに異常だ。何者かが人為的に引き起こしていると思えん」



出現規模とそのデータをまとめると、東京都心周辺。それに、はやても真剣な表情でクッキーを食べる手を止めた。

「それに加えて、リンディ司令官からの情報では米国で不穏な動きがあったらしいです」

「ふむ……六年前に持ち込まれた管理局のデバイス技術。それを米国がみすみす諦めるとは到底思えん。しかし、それを手にしたところでどうする」

時代の先に行く、技術の最先端。持ち込まれたテクノロジを、まさか大衆に見せびらかすような真似はしないだろう。いくら世界的に有数な大国と言えど地球を敵に回すとは到底考えられなかった。

考える弦十郎、クッキーを片手にオペレーター達が職務に尽力しているのとノイズの警報が鳴り渡る。その場に一斉に緊張感が走った。

「ノイズ反応を多数検知！ 風鳴司令」

「翼と響君に至急連絡を！ すまないが手を借りるぞ、はやて君」

「了解！」

はやては最後に一枚、チョコチップクッキーを頬張って駆け出す。モニターに映るノイズ達の群れに、了子は眼鏡を直していた。

(……これは、ソロモンの杖による召喚ではないわね。となると、自然発生したもの？ いずれにせよ僥倖か)

近いうち、サクリストD——第五号聖遺物『デュランダル』の搬送も予定されている。計画を進めるための下準備として米国から援助が近々到着予定だ。そこで思い出されるのは、マスターの言っていた米国製デバイスの件。何を考えているのかわからないが、優秀な手駒として仕えているうちは泳がせておけばいい。

立花響が現場に到着し、ガングニールを起動させる。ノイズに対抗できる力を手にしたとはいえ、戦闘と呼べるようなものなど経験したことはない響にとっては戸惑うばかりの状況。自分と周囲の空間が切り離されたような、奇妙な隔世に踏み入れた感覚。それが魔導師による『結界魔法』であることを学ぶのはもう少し後の話。

無数に降り注ぐ氷の槍は、シンフォギアによつて位相差障壁が無効

化されたノイズの動きを封じるのに絶大な効果をもたらした。

「ほな、いくでリイン！ 響ちゃんのサポートしつかりな！」

「はいですー！」

響が見上げた空に、夜天の書とシユベルトクロイツを携えたはやてが浮かんでいたが、隣に降りると親しみを込めた笑みで肩を叩く。

「あの、これ……」

空を指し示し、いつもと違う雰囲気的狀況に響が聞きたそうな表情をしていた。

「わたしの結界やで。人払いと、調律空間。クルヴィスさんのノイズキャンセラーが無いとこんな無理やなー」

ノイズの位相差障壁の減衰、炭素転換能力を自己完結させる演算空間処理——管理局の超技術がなければ到底叶わない奇跡を引き起こしたのは、柳クルヴィスという凡人の弛まぬ努力だ。しかし、時空管理局はクルヴィスの活躍を喜ばしく思っていない。というのも、クルヴィスは管理局の一部技術を私物化している節がある。それはあくまで、管理局の行う『人助け』の為に使われているのだが、危険性は否めない。

「じゃあ、そちらの妖精さんは」

「はい！ リインフォースⅡですう。マイスターはやてのユニゾンデバイスです」

「デバイス言うても多種多様。ま、その辺の座学は無事に戻ってからや。来るでー！」

身構える響とはやての目の前でノイズ達が無数の刃によって串刺しとなって炭となっていく。空から降りて来た翼が敵陣中枢で天羽々斬を振るい、一騎当千の活躍を見せる。そこに響が入り込む余地などなかった。

結果、翼が到着してからはほぼ一人でノイズを斬り伏せてしまい、手を貸すまでもなく戦闘は終了となる。

「こちら翼。状況、終了です。帰投します」

「あ、あの……翼さん」

声を掛けようとする響に、翼は鋭い視線を返した。それに怯える姿

を見てはやてが割って入る。時空管理局に対して否定的な姿勢の翼はそちらにも同様の視線を向けた。

「お疲れ、翼ちゃん。ほんま凄いなあ、やっぱ専門家には私らも敵わんて」

「鼻屑も謙遜も不要です」

「可愛げないなあ、もうちよい愛想よくしてもええんよ」

「……柳と同じ事を」

「クルヴィスさんにも言われたん？ それはよっぽどやで」

「防人に華やかさなど」

「でも日本の誇るスーパーアイドルやん」

「戦場いくさばに長居は無用です」

「あ……行つてもうた」

呼び止める暇もなく、取り付く島もなく、風鳴翼は踵を返して二人に背を向けて立ち去る。

ノイズの殲滅が終了したことにより、ガングニールを解除した響と結界を解除したはやては何事も無かったかのように街を歩く。時刻は夕飯時、二課へと戻る途中で喫茶店よろづが目に入ったので立ち寄ることにした。ノイズ警報が出されたにも拘らず、通常営業中の胆力に驚かされる。しかもクツキーフェアは終了していた。

「いらっしやいませー……って、あんたか」

「席、空いとる？」

「見てのとおり、閑古鳥を仕入れたばかりだ。好きに座つてくれ」

「それ仕入れるもんとちやうで」

ともあれ、席は空いている。学生層をターゲットとした店だけに夜の集客率はあまり高くないようだ。初めて入る喫茶店に響は店内を珍しそうに見渡す。

「こちら夜のメニューとなっております。ご注文が決まりましたらどうぞ」

「ゆるつゆるやん……」

「そりや他に客いないしな」

とはいえ、それでもやはりこの喫茶店でお通しは出るようだ。本日はヨーグルト。

「はあ……やっぱりわたしって呪われるかもお……」

「まあそう気を落としても仕方ないで、響ちゃん」

「だって、八神さん」

「はやてでええよ。響ちゃんの回りで色々といっぺんにたくさん起きるとるしな、ゆっくり慣れてこ」

「……はい」

「うちが奢るから、好きなの頼み？」

「えっ、いいんですか。でもそんな悪いですよ」

「かまへんかまへん」

「ちなみに当店の最高金額メニューは諭吉一人飛ばすレベルとなっております  
おります」

「……加減してな？」

さりげなく爆弾メニューが記載されていた。オーダーメニューの、その下。『店主の気まぐれ最高峰』とだけ書かれている。誰が恐ろしくて頼むものか。しかし興味が惹かれるのも確かだ。悩むはやてだったが、新しく入ってきた客と目があった。

「クルヴィスさん？」

「あらま、はやてさん。どうも。響ちゃんも一緒とは珍しい」

「らっしやーせー」

「たのもー」

「え、常連？」

クルヴィスと気さくに挨拶を交わし、案内もなしにカウンター席に座るクルヴィスを見てはやてが驚いている。

「そりや、奏の見舞いに買うケーキとか全部ここですし」

「初耳なんやけど」

「初めて言いましたけど。あと夕飯は大抵ここで済ませています。お財布に優しい」

「財布と身体に優しいのが俺の料理だ。この世からコンビニ弁当を駆逐してやる」

二人がサムズアップして意気投合していた。それよりも何故そこまでコンビニを敵視しているのかが気になるが、それはそれで怖い。

「あー、それで響ちゃん。なに注文するか決めたん？」

「えっと……おむすびで」

「握り飯程度で金は取らねえよ」

「へ？」

「つうかそんなんでメシ済ませる気か。ちゃんと食べ。クツキー姉ちゃんは」

「なんなんその不名誉なあだ名!? うち八神はやてつちゆうちゃんとした名前があるんや」

「はいはい八神さんは何がお好みで？」

「……じゃあ、ディナーBセットで」

「少々お待ちをー。キツネにーちゃんは」

「いつものセットでおなしやーす」

「はいよー」

なんとも、昼間とは打って変わってアットホームな店主の接客に思わず気が緩んでしまう。

## Tr. 7 フレームデバイス

「ディナーBセットでお待ちのお客様ー」

「お、来た来た」

はやてのテーブルに置かれるのは洋風のディナーセット。マカロニサラダにオニオンスープ、そしてベーコンパニーニ。ザツと見ただけでもどこの店に出しても恥ずかしくないほど整えられている。

「握り飯でお待ちのお客様、ほら」

「は、はい」

「次からはまともな注文をお願いします」

おむすびが三つ。肉じゃがにコロツケ。そして山盛りサラダ。テーブルに置かれるドレッシング数種類。伝票を丸めて置いて、店主はクルヴィスにいつも注文しているセットを並べていく。響の注文した和風セットと少々内容は異なるが、似たようなものだった。

「遠慮せずに食べてな。ほいじゃ、いただきますー」

「いただきます」

響も手を合わせ、おむすびを一つ食べる。程よく握られ、塩っ気の効いた白米は添えられた肉じゃがとの相性抜群で箸が驚くほど進む。

「あー肉じゃがうめー……日本人と言えばこれですわ」

「毎回注文してくれるもんだから俺も助かる。和食はまだ慣れてなくてな」

「ほぶツ!？」

今、はやてが聞き逃せない言葉が聞こえてきた。思わずむせてしまう。和食に慣れていない？ 響が平らげていく皿を見ても、どこと比べても遜色ない彩り。それに驚愕しながら水で胃に流し込む。ちなみにクルヴィスは生姜焼きを食べていた。喫茶店というよりは定食屋ではないのかという疑問は、店主曰く「俺の夕飯だった」とのコメント。納得だ。

「……あ、あの〜」

おずおずと響が頬を赤らめながら手を挙げる。それに店主が応じ

ると、どうやら追加のおむすびが欲しいらしい。それに口をへの字に曲げながら具材は何がいいかと聞き返し、同じものでいいと言われるとすぐに厨房へと去っていった。それから間もなくして戻ってくる。空の皿と入れ替える。そのついでにと味噌汁もついてきた。

「せっかくだから味噌汁の味見に付き合ってくれ」

「手厚いサービスやなあ」

「何度も言うが、喫茶店経営してんのは俺の趣味だ。まともにコレで食っていくつもりは欠片もねえんだよ。そんなもんだから、適当やつてる。金は取るけどな、それでもしなきゃ店やってけねーし」

趣味の延長線で店をやっではいるが、継続させる為には顧客の協力が必要とのこと。つまり店主が言いたいことは——俺のメシが食いたきゃ文句言わず金を出せ。

味噌汁を冷ましながら一口啜る響が吟味する。不味くはない、むしろ美味しい。これはこれで良いのだが、なんと言えばいいのだろうか。

「お味噌汁、おいしいです」

「そうか。そりやよかった」

心がホツとするような、そんな味。落ち着いた気持ちにさせてくれる料理に、思わず涙が溢れる。はやてもギョツとしたが、響自身、どうしてかわからない。店主は相変わらず無表情で腰に手を当てていた。クルヴィスは食事の手を止める。

「どないしたん、響ちゃん」

「あ、あはは……なんででしょね。わたしも、わかんなくて……」

昨日の今日で、ノイズに遭遇した。逃げ惑うばかりだった自分が手にしたシンフォギアの力。今までの自分が変わってってしまうのではないかという不安を、八神はやては、柳クルヴィスは何も気にした風もなく接してくれた。よろづの店主は何も事情は知らないかもしれないが、他と同じように料理を振る舞っている。それが嬉しい。

「……訳アリか？」

「まあ、ちつとだけ」

「ふうん。ま、別に客が何を話していても俺は知らんけどな」

それは暗に『自分を気にせず話してくれ』と言っていた。店主も用事があるので早めに店を閉めるらしい。その為、追加の注文がなければ会計を先に済ませてくれれば言うことはないようだ。不用心過ぎないかという間に、店主は皮肉たっぷりな笑みを浮かべる。

「なあに、もし売上盗まれてたら顔と名前は覚えてるから地獄まで追いかける」

「末恐ろしいやつぢやな!？」

「それにほれ、常連様と連絡先知ってるクッキー姉ちゃんに、その制服。リディアンの生徒だろ？ 住所特定ぐらいしでかすぞ、俺」

法に触れようと知ったことではない。それに少しでも背筋が寒くなった。だが、そんな気はないはやて達は会計を済ませると、涙ぐむ響を連れて店を後にした。クルヴィスが停めていた車でリディアン音楽院まで送り、響と別れる。

「……響ちゃん、大丈夫やろか」

「ま、その気持は分かります。昨日の普通とこれからの普通っていうのは別世界ですからね」

「そうやろな」

少なからず、自分達にも経験はある。闇の書から現れたシグナム達と出会った日。そしてクルヴィスは魔術と出会った日。それにふと、思い出したようにはやてが話題を切り出した。

「そういえば、クルヴィスさんが管理局に入った理由知らんけど。なんなん？」

「え、言ってますでしたっけ俺？」

「せやなあ、聞いたことないで」

「まあ、ありきたりですよ。管理局と偶々出会って、魔術適正があったというだけです」

「……そんだけ？」

「それだけ。八神二佐とか高町一尉みたいな劇的な運命とか無いっす、俺」

「……ええ〜？ つまらんなあ。もうちよつとこっす詳しく」



「強いて挙げるとすれば、そうですね。ハーフってことでいじめられてた環境に嫌気が差したので、こう転校とかそういう気分で入局しました」

「動機かつるいなあ自分!？」

「さほど珍しくもないでしょう」

地球に魔術の文化があったとは記録にない。確かに聖遺物といった分類上の古代遺物ロストロギアは存在する。それでも、リンカーコアを持った存在は稀と言えた。高町なのはと八神はやての両名が異常だっただけで柳クルヴィスは平均的な魔力量だ。それでも本人に適正があったのが幻術魔法一択というのは希少種中の類まれで稀有な存在であるが。

「ほらー、なんていうんですか？ 地球で言うところの、なんか流れて就職して特に冴えることもない労働環境みたいな」

「あんな、クルヴィスさん。世知辛いからそういうのは無しやで。やめーやそういうこと言うのは」

それでも、だ——はやては運転するクルヴィスの横顔を盗み見る。なののはのように、エース級の活躍をしたわけではない。かといってはやてのように特殊なものがあるわけでもない、文字通り平凡な管理局員。それが三等陸佐の地位まで上り詰めたのは、やはり偉業と言える。情報査察部は、管理局の中でもクルヴィスにとって天職であったと言える。

「でも、それだけでそこまでやれるのはやっぱり凄いなと思うけどなあ」「ご謙遜を。俺なんてほぼ地球に左遷みたいなもんですからね？」

「あかん、それはキツイ」

心がしんどくなる。これ以上は不毛なのではやてはそれ以上クルヴィスに触れることはなくなった。その代わりに雑談に興じることにして、すぐに家まで到着する。

「あながとな、クルヴィスさん」

「それでは、八神二佐。また明日にでも職場で会いましょう」

米国から運び込まれるデバイスが、三機。そして、深夜に集まる屈

強な違法魔導師達をまとめあげるのは、クレイモアのナンバー2。

“復讐鬼” ルード・ヴァサリアは、周囲を見渡していた。会話もなく、微妙な距離を置いて集まっているのは、今回の協力者である米国人。フィーネの加担者である彼らではあるが、最近の働きに不満を抱えていた。それを鑑みて彼女の配下である個人に“依頼”したのだ。

やがて、一台のバイクが彼らへと接近する。警戒するが、ルードが手で制するとすぐに解除された。バイクから降りて近づくのは、よろづの店主。

「よお、皆さんお集まりのようで」

「……来たか」

「こりやどうも、クレイモアのナンバー2。こっちの生活も中々楽しいもんだ」

ルードと気さくに挨拶を交わし、程々に済ませると米国人の集団へと近づく。

「それで？ 俺に預けたいデバイスってのは、それか？」

「ああ、そうだ。聖遺物研究機関が造り上げた機械制御によるデバイス——持ち込まれた外来の聖遺物、ロストロギアを用いてようやく目の見ることとなった」

「ほお」

興味深そうに頷くマスターが値踏みするように三機のデバイスを見比べる。

全長はおおよそ成人男性ほどのサイズ。その内、一機は見上げるほどの巨体だった。

クレイモアが管理局より奪還したロストロギア。それは人造の間。自己学習能力を備えた機械人形は、やがて人類の宿敵と成り果て、結果として次元世界一つを崩壊にまで導いた。その回収を行っていた管理局は廃棄処分としてきたが、目をつけたのがクレイモアだった。戦闘機人に類した性能を誇る三機の人形デバイス——フレームデバイスは未だ沈黙している。

「大変だったんじゃないの、コレ造るの？」

「構想自体は既にアメリカ側で固まっていた。その背中を押しただ

けだ」

そう静かに告げるルードに、マスターは「ふうん」と頷いた。聖遺物の機械制御を目標としていた米国聖遺物研究機関の、まず最初の一步。それは時空管理局の残したデバイス技術による魔法制御——そもそも、魔術を使用する為のリンカーコアを前提としたデバイスの製造など彼らは考えてなどいない。

「で、性能は」

「俺よりは、弱い」

平然と言うルードに、米国人達が面白くなさそうな表情をする。それになにか不満でもあるのかと睨み返すと何も言い返せずに舌打ちした。結局のところ、彼らが手を加えたところと言えば、着手した構想。デバイスの設計。肝心の中身は殆どがクレイモア製だ。地球の技術が管理局に追いつくには気が遠くなるほどの歳月をまだ必要としている証拠。

「さて、それじゃ——依頼内容は？」

「話は簡単だ。コイツを使ってフィーネの計画を支援。以上だ」

「解りやすくて助かる。基本、実戦投入でいいんだな」

「ああ、構わない。仮に壊れたところで、その程度だったということだ。起動させろ」

「名前は？」

「個体登録名は、シャドウ。バスター、ライダーの三機だ。管理局が相手でもいいし、シンフォギア装者でも構わない。戦闘データさえ取れば良い。好きに壊せ」

それだけ言い放つと、ルードは部隊を撤収させた。残された米国人達はもともとフィーネの計画の為に呼ばれた協力者だ。それにマスターは気さくに手を振る。

「そちらさんも、よろしくな」

「……フン」

鼻を鳴らして背を向けて去ってしまった。

「アンタはどうする？」

「管理局がいるとなれば挑みたいところではあるが——グレイの命令

がある。今暫くは泳がせておく」

「そうかい、それじゃそっちの団長さんによろしくな」

人気のなくなった倉庫で、一人と三機が残された。マスターは起動したフレームデバイスを眺めて、ポツリと呟く。

「さて、どう使ってやろうかね。こいつ等？」

## Tr. 8 虎の威を駆る狐

「……それで？ それが例の米国デバイス？」

「ああ、放置しとくわけにもいかねーもんで、連れてきた。あちらさんは、フィーネのことを信用しちやいないうのだが、こいつらを紹介するなどは言われてねーしな」

あっけらかんと笑うマスターについてきた三機のフレームデバイスは周囲を見渡している。

黒尽くめの機体、指揮官機として設計されたシャドウ。遠近両用のアームドデバイスを携帯している。しばらく室内を見渡した後、脅威が無いことを確認するとフィーネへと向き直る。

《……個体識別コード、シャドウ》

「自己紹介のつもりらしい。一応人並みの知能もある」

そして、もう一体。細身の肢体に、放熱用コードを首周りに纏うのはライダー。前線強襲機として設計された。所有しているアームドデバイスは大型自動二輪型。破格のサイズを誇るデバイスは現在、駐輪してある。

《地に足をつけているのは落ち着かん。俺はライダーだ》

「ま、個性もある」

「そうみたいね」

クリスはそれぞれの機体を見比べて、一際巨体を誇るバスターを見上げていた。

「このデカブツは」

《……個体識別コード、バスター。任務内容の提示を求む》  
「待機」

《了解。索敵モードへ移行する》

フィーネは椅子の背もたれに体重を預け、三機を面白くなさそうに見つめる。だが、使い道が思い浮かんだのか、笑みを浮かべた。現状の計画に障害となる相手との数の不利が埋まっただけのこと。そうであれば条件は対等だ。

「融合症例第一号のこともあるし、目障りな管理局の介入を阻むには

ちようどいい。聖遺物と人体の融合がもたらす可能性を見たい」

「そういうことならアタシに任せてくれ、フィーネ」

「そのつもりよ、クリス。アナタには期待しているわ」

フィーネの微笑みに、クリスは頬を綻ばせる。自分が期待されているという嬉しさから。一方でマスターは、自分に預けられた煮ても焼いても食えそうにない三体のデバイスを持って余していた。こういう指揮を執るのは苦手分野である。というよりも、率先して行動を起こすのが面倒くさいという出不精だ。

それが殊更、自分の利益ではなく他人の為というのが。

(ま、フィーネはフィーネで動くようだし俺も好きに動くとするかね) まずは——明日の営業に使う材料の仕込みから。

二課の戦闘訓練場では、クルヴィスとシグナムが向かい合っていた。だが、対峙してより数十秒が経過しようとしている。その間、二人は一步も動かなかった。

魔導師同士の戦闘がどういうものかを見学してもらおうと響と翼もなのはに連れてこられている。本当はフェイトが適任なのだが、シグナム本人からの指名とあつてはクルヴィスに逃げ場はない。「……動きませぬね、二人共」

互いに攻めあぐねている。とはいえ、一気呵成にシグナムが攻めてしまえばそれこそクルヴィスの敗北は決定的だ。しかし——勝機を差し込むには十分過ぎる。

「うん。シグナムさんは古代ベルカ式の守護騎士。だから接近戦では真価が発揮される」

「でもそれなら、接近しちやえば勝てるんじゃないですか?」

響の率直な疑問は尤もだ。誰もがそうだと信じて疑わない。だが、クルヴィスを知っている魔導師であれば口を揃えて言うだろう。『柳クルヴィス三等陸佐と接近戦は、ヤバイ』と——。(……さて、どう出るべきかな)

シグナムはアームドデバイス、レヴァンティンを構えて静かに整息する。クルヴィスは穂先を地面へ斜めに構えていた。カウンターの

刺突で急所を狙う腹積もりだろう。構えから予想されるモーシヨンへの対策は万全だ。だが、シグナムが攻めあぐねているのはそうではない。その後が問題なのだ。かつてはそれで一敗を喫している。そしてクルヴィスもそれで勝ちを掴んでしまったものだから、どうするべきか考えていた。

幻術魔法特化型のクルヴィスにとって、戦闘訓練はただの苦行でしか無い。それは手品師に突然マジックを頼むようなもの。タネも仕掛もあるトリックをそうそう何度も同じ相手に使えるはずもない。

(あー、やつべー。これ絶対負けるやつですわ)

クルヴィスは確信めいたものを抱いていた。かといって手を抜けば後が怖い。

シグナムが踏み込む——身体強化を含めたスピードに、クルヴィスは敢えて身を引いた。誘い込み、下から石突きを振り上げる。長槍のリーチを殺す長剣の接近を良しとした。柄の中央付近を握り込み、持ち手を巧みに変えながらレヴァンティンの軌跡を逸らして凌ぐ。たたらを踏むクルヴィスに、シグナムは目を細めて攻め手を緩めて身を引いた。決して勝ち気に乗せられない。それは蜂の一刺し、蠍の毒針一つで勝敗は決まる。

「その手には乗らんぞ」

(いやマジなんですけど)

長槍の切っ先を地面に打ちつけて持ち直す。シグナムの剣をクルヴィスが捌き、転々としながら二人の勝負は長引いた。それを見ていたヴィータが眉を寄せている。

「なんでシグナム、ここぞと言う時に攻めねーんだ。アイツらしくもねー」

「そっか、ヴィータはあの時いなかったんだ。シグナム、それで一回負けてるから」

「クルヴィスだったって、たかが幻術だけだろ？ あとは研修生でも使えるような魔法だけじゃねーか」

「それが原因」

フェイトの言葉に、ヴィータはますます疑問符を浮かべていた。

勝敗は一瞬で決した。ますます苛烈になるシグナムの連撃に、レヴァンティンが形を変える。蛇腹状へと変じ、自在に動く搦め手にクルヴィスはデバイスを複製して二槍流で対抗。シグナムは手元を動かすだけでクルヴィスを翻弄していた。

「——ッ。やつべっ!?!」

思わず漏れた失言。完璧に追い込まれている、そんなクルヴィスへ向けてシグナムはレヴァンティンを納刀しながらカートリッジを装填する。——飛竜一閃。咄嗟に複製した長槍を投擲し、空いた片手で防御魔法も張りながら衝撃に備えた。

爆発に吞まれ、衝撃で痺れる空気の振動に響が思わず体を守ろうとする。なのはがバリアで難なく防いで響を安心させるように笑った。

「大丈夫だよ、響ちゃん。これくらいなら安全だから」

「は、はひ……ありがとうございます」

「クルヴィスの負けか？ つーか直撃だろ、アレ」

防いだ、凌いだ、とはいえクルヴィス自身の魔力の消耗量にしてみれば長引くほどに勝機が遠ざかる。

レヴァンティンが過剰魔力を排出する。周囲には土煙が充満していた。だが、シグナムはまだ気を許してはいない。朧気に揺れる影に向けて再び蛇腹状のレヴァンティンを叩きつける。砕け散る鏡像に、シグナムは目を見開き、全身が総毛立った。

——してやられた！

接近を許さない事を念頭に置いて戦ったことが裏目に出た。見通しの悪い土煙を一掃し、シグナムは左より接近する気配を両断する。再び砕け散る長槍の複製品。冷や汗がどつと吹き出た。

(違う、アイツは既にもう間合いに入っているはずだ!)

そうなれば、どこへ？ 背後か、或いは——だが、クルヴィスは射撃魔法を用いない。だからこそデバイスを投擲する。つまり、現在の自分より見て、真正面。シグナムが踏み込もうとしたその矢先、足を絡め取られた。

「なッ!?!」

予想から外れた一撃に思わず体が掬い上げられる。回転する世界



の中で、クルヴィスが左手をゆらりと構えていた。その掌にミッド式の魔法円が浮かんでいる。

飛竜一閃を防いだ後、幻影を置いてクルヴィスはシグナムの左手側へ移動していた。そこから更に複製品を投擲して、更に背後へと回っていたのだ。だが、シグナムが動きを起こそうとしていた為に急遽攻撃方法を変更した。

死角よりの接近と、死に体となった相手への追撃。即ち、近接砲撃魔法——有効射程零距離クロスレンジの必殺。

「虎砲——ッ！」

頭部へと叩きつけられる瞬間的な魔力放出。Aランク相当に匹敵する砲撃を受け身も取れずに頭部へと受けたシグナムは為す術なく昏倒した。

仰向けに倒れ、動かないシグナムの隣にクルヴィスは尻もちをついて乱れた呼吸を整えるのに全身を使っていた。勝利の喜びなどそこにはなく、あるのはただ、やっちゃまった俺。という失念だけだった。「二度と、二度と——俺は模擬戦なんてやんねーですよ!? 俺をイジメて楽しいですか高町一尉!? なんべんでも言いますが幻術使いに実践訓練は自殺行為でしかねーんですからねゲホッゴホッ」

「むせるほど言わなくてもいいんじゃないや……」

クルヴィスにしてみれば死活問題なので仕方ないことだ。「と、まあ。ちよっと特殊だったけれど、これが私達魔導師の戦い。見て学んでもらったけれどどうだったかな」

なのはの後ろでクルヴィスが「俺じゃ参考になんねーですよー!」と抗議していたが誰も聞いていなかった。無情。

「凄すぎて、何がなんだかわからないのを学びました」

「まあ徐々に慣れていこうね。翼ちゃんは?」

「実に興味が惹かれます。ですが、柳三佐の言う通り、参照元が適任ではなかったのでは、とも思います。本人もまあ言っていますし」

「そうだとしても、色んな魔導師がいるからね。例えば私は砲撃型で、誘導弾や高速射撃がメインになるから、どう接近するかが要だね」

「今後の課題とさせていただきます」

「クルヴィスさんもお疲れ様。大丈夫？」

「でえじよばねえですってば！」

「何語のどこ方言だよ」

ヴィータからの辛辣なツツコミに、クルヴィスは半泣きになりながら訓練場を後にした。その後、響と翼に基本的な魔導師対策の訓練メニューが行われた。

## Tr. 9 騎兵、ライダー

訓練を終えた日の夜。翼は気分転換にとバイクを走らせる。貴重な経験となった新鮮な気持ちではあるが、疑問がもう一つ浮かぶ。果たしてこの訓練に意味があるのかと。

我が身は剣。一振りの刃。力なき人々の為の防人。ノイズからこの世界を守る使命を担っている。だが、果たして本当に——迷いを振り払い、疑念を置き去りにしてアクセルを強める。

夜風を浴びる翼は、無心でバイクを走らせた。その背後から迫る騎兵が一機——。魔力反応を感知した二課からの通達に、翼がバツクミラーを確認する。

車の間を縫うようにして大型二輪を走らせる姿があつた。ライダースーツに身を包んでいるのかと思つたが、違う。それは金属の光沢を放つていた。異質な存在に、だがしかし、翼はどこか親近感を覚えた。

《翼、聞こえるか!》

「聞こえています」

《恐らくは違法魔導師だ、やれるか》

「無論です」

違法魔導師——二課からのモニターではそう見えるのだろう。だが、並走する騎兵は速度を緩めると翼のデータを確認した。

《……データ照合、完了。天羽々斬、風鳴翼を確認》

「名を知られているのなら敢えて言うまでもない。名乗ってもらおうか」

《個体識別コード、ライダー。良いバイクだ》

「なに……?」

言葉の真意が読めず、翼は思わず聞き返す。ライダーと名乗った騎兵はアクセルを緩めないまま並走を続けていた。

《良いマシンに乗っているな、と言つたのだ。だが、俺には敵わんぞ》  
暴風。まさに突風と呼ぶべき疾走。夜の帳を引き裂いて駆け抜け

る騎兵の背中は見えなくなった。そのスピードは凄まじく、二課のモーターでも危うく逃す所だった。

「一体、何を……」

《相手は恐らく、誘っているのだろう。その先の森だ》

「望むところ！ 防人を相手に選んだことを後悔させてやる！」

《待て翼！ なのは君達と合流を》

「不要です！ 例えこれが罠であろうと、切り開くのみ！」

弦十郎の制止の声を振り切って、翼はライダーの後を追う。

ノイズの反応はない。周囲の静けさから人気はないものと見た。翼がバイクと停めると、ヘッドライトに照らされて騎兵は佇んでいた。バイクに跨ったまま腕を組み、沈黙している。これは罠と見るべきか、それとも——翼の疑念を余所に、ライダーはバイクから降りた。それに、翼もヘルメットを外して応じる。

《闇討ち。或いは奇襲を案じているのならそれは無駄だ》

「目的はなんだ。私に勝負を仕掛ける理由は」

《目的も理由も無い。強いて言うのであれば、偶然だ》

「なに……？」

《地形の把握にバイクを走らせていた。そこに偶々、データに一致する相手がいた。それだけの話だ。貴様との戦闘データの榨取は、ものついでというやつだ。構えろ、天羽々斬》

ライダーは外部装甲である両大腿から二丁の短機関銃を取り出す。銃である機能よりも、拳を保護する形状のトリガーガードはそれが接近戦に用いられるものであることを物語っていた。

これが、風鳴翼にとつて初の魔導師との戦闘になる——。それに、二課は固唾を呑んだ。果たして、シンフォギアがどこまで外世界の技術に通じるのか。

翼は聖詠を口ずさみ、天羽々斬を構え、威風堂々と立ちはだかる騎兵へ向けて斬りかかる。その切っ先をギリギリまで引きつけ——装甲を掠める寸でのところで回避した。僅かな手応えに翼は更に踏み込む。

刃を握った銃で防ぐ。殴りつけるように軌跡を逸らして、身を引い

た騎兵に翼は天羽々斬を突き込む。その腹を、今度は足で横から蹴りつけられて防がれた。跳躍、そして一蹴のもとに翼の体を蹴り飛ばす。

「ぶっ——」

その身軽さとは裏腹に、まるで鉄で殴られたような重い一撃。だが、痛みに勝る怒りがあった。ライダーの持つ二挺から放たれる銃弾は魔力によって形成された高速直射型。鉄串のように鋭い針が連射され、それを全て切り払う。

「はア——！」

銃弾を捌きながら翼は己の間合いへと騎兵との距離を詰める。刃と拳が火花を散らし、ならばと放つ千ノ落涙……あろうことか、騎兵はそれを鼻で笑った。

《面白い、避け甲斐があるというもの！》

「なにッ!？」

二挺の速射、巧みな回避行動によって土煙の中へと消えていく。片手で自重を支えながら倒立して避け、時には四肢を使って千ノ落涙を凌いだ。その刹那の隙を突いた銃弾が翼を空から引きずり落とす。

落下する途中、ライダーが追い打ちを仕掛けようとする姿を視認した翼が逆羅刹によって迎撃しようと脚部のアーマーを展開する。受け身を取りながらブレードを振るい、ライダーを引き離す。追撃を止め、それでも銃を撃ってくるのを更に切り払う。

そして、互いに距離を置いたまま膠着した。

(この魔導師……)

腕が立つ。だが、二度目はないと翼が意気込み、深く腰を落とす。

《……》

対する、騎兵。二挺を構えていたが、突如として装甲へと収納する。それに翼が面食らっている間にも相手は愛車へと向かい、歩いていった。

「なっ——、何故構えない！ まだ勝負は——！」

《決着を急ぐな、天羽々斬。俺とて貴様の戦闘データは興味深い。しかしな——シャドウ。邪魔立てするつもりか》

翼が見上げた夜の空。月明かりを背後に、宙に佇む人影があった。二課のモニターですら反応が無かったというのに――。

《……興冷めだ。勝負は預けるぞ、天羽々斬》

「違法魔導師がたかが二人、防人を侮ってくれる！」

《俺達はデバイスだ。違法魔導師などのぼせ上がってくれるなよ》

ライダーの背後。無人のバイクが独りでに動き出す。斬りかかる翼の刃をジャックナイフで防ぐと、追撃の蹴撃を今度こそともに受けた。咳き込む翼を尻目にライダーはすでにバイクへと搭乗してアクセルを吹かしていた。

《離脱するぞ、シャドウ》

《俺の命令には従ってもらう。勝手をするなよ》

《断る》

漆黒の機体――シャドウの言葉を一蹴してライダーは爆風と爆音を残して走り去る。その速度は最早一般の車両には叩き出せないスピードをキープしたまま、夜の街へと消えていった。シャドウもまた、静かに反応をロストする。

残された翼は、ただただ歯噛みして拳を固く握りしめていた。

(デバイス。デバイスだと……?)

管理局からの情報がよもや虚偽を語るはずもない。それには、二課で待機していたクルヴィスも言葉を失っていた。

「翼、災難だったな」

「いえ。怪我は幸い、大事には至りません」

急ぎ、二課本部へと帰還した翼は身体検査が行われたものの、軽傷で済んでいる。同時に、現在のままでも十二分に対応は可能であるとも付け加えた。心配する弦十郎の肩、そこにはリインフォースIIが浮遊している。

「本当に大丈夫ですか？」

「ええ。これならまだいけます」

「しかし、あれが違法魔導師ではなく、デバイスと名乗ったことが気にかかる……データの解析をクルヴィスが取り急ぎ行っているがどう

だろうな。何しろ情報が少なすぎる」

「……？　どうかしたですか、翼ちゃん」

リインフォースⅡを見つめる翼は、疑問が浮かんだ。デバイスは大きく分けて、ストレージデバイス、インテリジェントデバイス、アームデバイス。そして、ユニゾンデバイスに分けられる。リインフォースⅡは、最初こそ二課の面々の度肝を抜いたものの、今は『管理局のちっちゃな妖精さん』として親しまれている。業務の手伝いもしてくれる、まさに有能な妖精さんだ。

未だに少しその現実を直視出来ない翼はひとまずそれを置いておき、先程交戦した騎兵の姿を思い出す。

「……いえ、なんでも」

デバイス——無機質な単語には、やはりあの機械的な人形達がしつくりくる。翼が、目の前のちっちゃな妖精さんを受け入れるのにはもう少し時間が必要だった。

## Tr. 10 血の巡らない人のカタチ

「はぁー……!! バツカじゃねえの!! 何考えてんの! ロスト  
ロギアにデバイス装備させて独立稼働させるとかバカじゃねーの  
!! そんな俺だつてやったことねーわ! はー羨ましいわあ、犯罪  
組織はいいなー予算の都合とか考えなくて! 俺も予算とか考えな  
いでデバイス作つてみてーわー、あー……!」

弦十郎が何か言いたげに、喚いているクルヴィスを指差す。それ  
に、なのは達は静かに首を横に振っていた。たまにクルヴィスは不満  
を爆発させる。誰しもストレスは抱えているものだ。常日頃から鬱  
憤が溜まつているだけに、特に発散させるのが難しい。

ふと視線を感じ、クルヴィスが振り返る。そこには苦笑いを浮かべ  
ているなのは達がいた。

「……………あ……………」ゴホン。お待たせしました、現在の時点  
で判明している解析結果ですが」

咳払いを挟み、何事もなかったかのように説明を始める。それに奇  
妙な沈黙を浮かべながらなのは達が整列した。そこには響も当然な  
がら立っている。

「あ、あはは。どーも……………」

「はいどーもー。毎度おなじみクルヴィスおにいさんですよー。  
えー、バカやつてないで現状で判明している情報を整理します」

あれから一夜が明け、響と翼の学校が終わる時間帯を見計らって開  
かれた会議は、接触した未確認デバイスの案件。当然、地球での現地  
最高責任者は階級関係なしに名目上クルヴィスなのだから率先して  
動かなければならない。ミッドチルダの情報査察部から本局の無限  
書庫管理者へ話を通し、該当する資料を整理すること、ここ迄僅か半  
日足らず。クルヴィスの朝食はゼリーとエナドリ。どこの廃課金プ  
ロデューサーだと自虐ネタも一つや二つかつ飛ぶほどに脳みそのネ  
ジは緩い。



「まず、本局から仕入れた情報です。どっかの次元航行隊が運搬途中の古代遺物——ロストログア。それがあの二体の正体であることが判明しました」

「もうそこまで特定が？」

「情報査察部が本気出せば半日でプライベート丸裸にしてやりませよ、へっへっへ。ですが、運搬途中だったロストログア、人造労働代替人形。はえー話がオートマタですね。面倒臭いんで骨格<sup>フレーム</sup>って呼称します」

「ふむ」

「これに関しては割愛で。独立稼働するマネキンですね。エネルギーも自己発電、循環機能持ち、再充電可能と名実共に二十四時間フル稼働、とまあ人間様ではお手上げですわな」

いつにも増して砕けた言い方なのは、本人も疲労の限界に近い証拠だ。体裁を取り繕っている場合ではないのだろう。だが、フェイトが疑問に思ったのは、地上の相手に本局がそう簡単に情報を提供するか、という事だった。それについて尋ねると、答えは明白。

「俺の教官、特務次元航行隊の隊長ですよ？」

「えっ？ そうだったんだ、意外……」

「どーせ俺はどこぞの不滅のエースと違ってへーへー凡々ですわいこんちきしよー！ あんなトンデモ化物集団なんかと一緒にされてたまるかー！」

「いいから先を」

「あ、了解です。問題がこつから先——それに、デバイスを『装着』させていること」

通常、魔導師であればリンカーコア、魔力の源が存在する。しかし、このフレーム達にはそれが存在しない。そもそも、五体全てが武装。四肢の末端に至る武器の数々。並の魔導師であれば苦戦は必至だ。自己学習機能を備えているのであれば活動時間次第ではエースすら苦戦する未来は避けられない。早期撃破が望ましい。

「翼ちゃんが遭遇したフレームデバイス、騎兵<sup>ライダー</sup>。使用武装はダガー型短機関銃が二挺。まあ、バイクも怪しいところですが、あんな武装

されたら規格外ってレベルじゃねーので単なる移動手段でしょう」

「もう一体は」

「シャドウに関しては、まだ不明な点が多いですが。隠密プログラムが組み込まれているのは間違いないでしょう。言動からも指揮官機と見えていいでしょうね」

「肝心の、奴らの目的だが……」

「シンフォギア装者の戦闘データ収集と踏んでいます」

「その根拠は」

「彼らがクレイモア製のデバイスであることから。ノイズに対抗できる唯一の武器であるシンフォギア、その特性を独自に収集して技術を盗もうとしているのではないかと」

「確かにそうか……今、地球で外世界の技術と手を組んでいるのは二課だけだ」

「……あ、あのー！」

響がおずおずと手を挙げた。

「あの、それじゃクレイモアの皆さんもノイズと戦おうとしてるんですよね？」

「まー……見方によってはそうかな？」

「じゃあ、一緒にノイズと戦うって言うのは」

「あ、無理。まず絶対に無理」

「どうしてですか。話し合えば、きっと——」

「別に、響ちゃんが悪いわけじゃないんだ。ただ、あの連中はそういうレベルじゃない。遭遇したら死を覚悟するレベルでシヤレにならない連中」

特に、管理局は。その駐屯地を見つけたら都市を一つ滅ぼすような違法魔導師の巣窟だ——中でも抜きん出ているのは、ナンバー2。復讐鬼、ルード・ヴァサリア。

管理局の記録にある中でも、一夜で前線基地を壊滅させた事件はあらゆるベルカ式魔導師達を震撼させたものだ。ただ一人を除いて。しかし、幸いにもまずは時空管理局にのみ向けられている。そのことから二課に牙が及ぶことは無いと思いたい。クルヴィスは希望を込

めて言った。

「早急にノイズさえ殲滅できれば、連中も引き上げてくれると思うんですけどね。そうなれば後はこっちの本領ですよ」

「……………」

意図せず、それがまるで翼を責めているような口ぶりになっていることにクルヴィスは悪びれもなかった。何故なら、この二年間管理局ですら収穫が無いのだから。どちらが、という話ではない。

「最悪な場合ですが——櫻井理論目当てに連中が二課本部を強襲してきた日には、どうしようもありませんね」

「なあに、ノイズが相手でなければ俺が出張るまでだ！」

そう言っちはちきれんばかりに力こぶを作ってみせる弦十郎の逞しさに救われるが、フェイトはそうも言えなかった。何故ならば、特務次元航行隊の同伴任務で遭遇しているからだ。その戦いも、同じ戦場に立ったこともある。しかし、アレは最早戦闘と呼べる代物ではなかった。

「風鳴司令のお言葉は頼もしい限りですが、彼らを相手するとなると過信は出来ません」

「む、そうか。その時は、君たち勝利の女神に譲るしかないな」

そう言っただけ笑みを見せる弦十郎の言葉によって、今回の会議は早々に解散となった。その後すぐに、はやてがフェイトに思い出したように尋ねる。

「な、フェイトちゃん。アインスの調子はどうやったん？」

「初代リインフォースのこと？ うん、私が居た時は元気にしてたよ。管理局の特務制服も似合ってた。本人はちよつと照れくさそうにしてたけども」

「そっか。早く会いたいなあ、アインスに。成長したツヴアイも見せてやりたいわー」

闇の書事件の際、特務次元航行隊副隊長の手によって消滅を免れた管制プログラム。防衛プログラムである守護騎士システムを切り離したものの、自らの暴走を危惧して消滅を望んだ——しかし、当時の副隊長がそれに猛抗議。知り合いのデバイスマイスター志願者に知

恵を借りた所、これが規則違反ギリギリグレーゾーンの道を選択。それにより、現在は複雑な事情から夜天の書が“二つ”存在していることになっている。——何を隠そう、その分離プログラムを組んだのがクルヴィスではあるのだが、それを知るものは特務隊との間だけだ。「仕方ないよ。管理局からは特務隊と行動を共にすることで規範的行動の学習を名目に離れられないからね」

「うー、そうは言ってもリインやで？　アインスやで？　あんなべっぴん、他のが放っておくわけないやろ。もしそうならよっほどの朴念仁かあれやな、にぶちゃんや」

「あー……………」

非常に、言いにくいことなのだが、フェイトははやてに何というベキか、迷った。

あそこの人々は、常識から一步ズレた超人集団だ。つまりは、そういうことなので。

「えっとね、はやて。心配しなくても大丈夫だよ。少なくともアインスははやてより先に身を固めるってことは有り得ないから」

「なんか、実感籠った言い方するなあ。それはそれで私はちよつと引つかかるんやけど」

「言い方が悪いかも知れないけど、あそこの人達ってアインスが眼中にないから……………」

「な・ん・で・やあッ!?!」

はやて、渾身のツツコミ。親心にも似た感情が爆発した。自分よりもスタイルが良くてミステリアスな雰囲気、銀髪長身。デバイス、或いは管制プログラムであるという観点を除けば言うことなしな完璧美人。それを目に掛けないとはどれほどお高く止まっているのか、特務隊は。半ば理解の範疇を超えていた。

フェイトの肩を掴み、問いたです。どういう意味かと。すると、ゆっくりと目を逸らしながら尻すぼみ気味に呟いた。

「…………その、私の口からは、ちよつと説明し難いかな……………」

「むう……会うことがあったらアレやな、説教やな！　ほな仕事頑張るでフェイトちゃん！」

「あ、うん……そうだね……」

不滅のエース・オブ・ストライカー。特務次元航行隊隊長は、一部では時空管理局の蒼鬼として名高い。そのことを知らずにいられるのは、きつと幸せなことなのだ、はやての背中を見ながらフェイトは思った。

## Tr. 11 特務次元航行隊の平和な一時

——特務次元航行隊旗艦、L級強襲型高速戦艦『デルタ』

歪曲次元間移動航行。他中域との移動中、敵艦との接触もない数少ない平穏な時間。本局へと帰港途中であっても通常業務から手は離せない。とはいえ、いつもよりは業務も少なかった。

つい二時間ほど前の話だ。特務次元航行隊は本局から発令された古代遺物の確保、並びに違法所持する次元犯罪組織を「壊滅」させてきたばかりである。所属する違法魔導師達は全て後続の航行隊へ委任して撤退した。

その筆頭である特務隊長は現在、報告書の作成中だ。副隊長は——戻ってくるなり戦闘訓練場に籠っている。

「……………ふう」

名目上、現在は特務次元航行隊の下で管理されているユニゾンデバイス、ラインフォース。区別を付けるために皆からは「アインス」と呼称されている。黒を基調とした特務制服に身を包み、書類作成に打ち込んでいた。休憩に入ろうと席から立つと、オフィスから出てすぐに廊下を走る二人に足を止める。

保護観察という名目、ファルド・ヴェンカー一等空佐が成人してすぐに身元を保護した。そして、それと時期を同じくしてロア・ヴェステイージー等空佐もまた闇の書の意味。初代ラインフォースを「回収」した。しかし、職務に復帰したのは副隊長であるロアの方が先である。

「切歌、調。またファルドに怒られますよ」

名前を呼ばれて二人が立ち止まった。管理局の制服を着ているのは、二人のわがままで。

米国聖遺物研究機関に監禁されていた少女達を解放した折、シンフォギアを纏う事のできる子達を、管理局は認定特異災害に対する「戦力」として換算した。

「心配しなくても大丈夫です」

「うん。ファルドからの頼みだから、急いでるの」  
「ファルドから？ 珍しいですね」

一時は聖王教会に預けられ、ファルドの退院後、特務次元航行隊と共に活動している。

暁切歌と月詠調の後を追って、もう一人。廊下を歩いてくるのは、二人と一緒に保護された少女、セレナ・カデンツアヴナ・イブ。

「もう、二人共飛び出していくから驚いちゃった」

「セレナもですか？」

「はい。今回の戦闘でノイズとも少数でしたが交戦したので、シンフォギアの点検に」

違法魔導師、認定特異災害。混戦状態となったが、被害は最小限に留まったのもセレナ達のおかげだ。

「だけどファルドはワタシ達を心配し過ぎデス。あれくらいのノイズ、どうってことなかったデスよ？ ねえ調」

「うん。でも、心配してくれるのは嬉しい」

「でも子供扱いされている気がして、ちよつと不満デス」

「まだまだ子供でしょう」

アインスの言葉に切歌が物申したそうに頬を膨らませるが、調がそれを横から指で突く。

「ぶえー。何するデスカ、調」

「切ちゃんのほっぺたが膨らんでたから」

「二人共、点検にいかなくていいのですか？」

「話してる場合じゃなかったデス！ 調、急ぐデース」

「うん。セレナも一緒に行こ」

「二人からは目が離せないからね」

「それ、どういう意味デスカー！」

微笑ましい談笑の中、遮るような衝撃が室内から響き渡る。目を見合わせて、戦闘訓練場に視線を移す。十中八九、間違はなく副隊長の仕業だと、アインスが呆れたように室内の様子を見れば、最高設定の回避訓練で迎撃していた。それは回避訓練であって、迎撃する訓練ではないのだが彼の戦闘スタイルはそういうものだ。

四方八方から放たれる射撃を、己の四肢で全て相殺していく。

「うわあ、相変わらず傍目に見ても分かるゲロヤバデース……」

切歌のげんなりとした表情が全てを物語る。相手の攻撃を相殺し、防御を粉碎し、攻防一点突破の破壊力で全てを地に伏せる。ストレング・アーツの使い手であるロア・ヴェステイジー等空佐の真価は接近戦なのだが……当人の性格も相まって、両極端なことに一騎打ち、或いは、広域殲滅が得意分野だ。そのせいで周囲の被害総額に頭を抱える事案が途絶えない。

「ロア」

アインスの一声に、回避訓練という名前だけを借りた、迎撃戦(仮)は終了。戦闘シミュレーターが停止した。バリアジャケットを解除して、特務制服の上着を脱ぐとタオルで汗を拭う。

「おー、アインス。それに切歌達、どした？」

「はあ……貴方の戦闘訓練の音。廊下まで響いてましたよ」

「そりゃ悪かった。さっきの戦闘で不完全燃焼なもんでよ、ちよいと一汗流したかったんだ」

「アレで不完全燃焼だったんですか……？」

ロストロギアを違法所持していた犯罪組織、頭数にして約二百人。有象無象と言えばそれまでかもしれないが、それを相手取って不完全燃焼の一言。そして、思い返せば――相手が空を飛んでいた気がする。台風に巻き込まれた木の葉のように。

思わず引きつった笑みを浮かべる面々に、ロアは眉を寄せた。はて、何か変なこと言ったのだろうか、自らの言動を鑑みて。思い当たる節無し。

「ちようど戦闘訓練終わりだしな、どうする？ 一戦やってくか？」

「無理デース！」

「遠慮しておく」

「私もちよつと……」

「謹んで辞退させて頂きます」

全力でノーサインを出す三人。御免こうむる、管理局の紅鬼と模擬戦。それは一種の自殺行為に数えられるほどだ。特務隊隊長は戦技



教導免許を所有しているからか、時折切歌達に手ほどきしている姿が見られる。

「んじやあ、寄り道してないで早いところ行って来いって。アイツの余計な仕事増やすな」

「はいデース」

「それじゃあ、ロアさん。また後で」

「あいよ。……アインスは休憩か？」

「まあ、そんなところですね」

「ホント、お前がいてくれて大助かりだ。俺、書類作成とかそういう細々した仕事苦手だな」

「お役に立ってるのなら、私は構いませんよ。貴方には返しきれない程の恩がありますから」

「よせよ。そういうのはクルヴィスの野郎に言ってくれ」

「機会があれば。今は主はやて達も地球での職務に精を出しているでしょう」

「偶には、顔出してやれ。うちの方ばつか手伝ってもアレだろ、ほら、なんつーかよ……暇だろ？ 毎日似たような仕事で」

「そうでもありませんよ。切歌達と話をするのは楽しいですし、セレナとマリアの歌を聞くのも好きです。私もあんな風に歌ってみたいものですね……誰かの為に。私のしてきた罪の償いにでもなれば」

「あー、やめろやめろ。そういう重い話。俺あ好きじゃねーんだ。俺の性格知ってんだろ」

「大雑把で適当で、面倒見は良いみんなの兄貴分。そうでしょう？」

「知ってんなら言うなよ。ほら、せつかくの休憩時間、俺なんかと話して無駄にするよかファルドの様子でも見てこい」

「マリアが付いているから大丈夫でしょう」

「そうかもしれないが、この三日寝てるどころ見てねーんだよ。その上、本局戻ったら報告書の提出と特務航空戦技教導隊の面子と打ち合わせ。休めるのは今だけだ」

それならば、何故自分が行かないのかとアインスは疑問に思ったが、それはロアも似たようなものだ。本局に戻ればどこかしらの最前

線に派遣される。当人もそれには意見は無いらしい。それも、クレイモア絡みだ。

アインスが執務室へと立ち入ると、特務次元航行隊隊長ファルド・ヴェンカー一等空佐は一心にキーボードを打ち込んでいる。その隣に秘書として書類作成に手を貸しているのは特務制服に同じく身を包んだマリア・カデンツァヴァ・イブ。入室してくるアインスを横目で見ると軽く会釈した。

「あら、どうしたの？」

「ロアに頼まれて、ファルドの様子を見に来ました。進捗はどうですか？」

「順調だ」

短く、ハッキリと返す。それきり無言で手を動かしている。左手だけにひし形の水晶の付いた手袋を着用しているのは、それが彼の所有しているデバイスの待機形態。管理局が造り上げたデバイスの中でも曰く付きの逸品。

《既に前回の仮眠から連続七十時間行動しています》

「ちよつと、ファルド。貴方寝てないの？」

「休息は摂っている。問題ない」

《現段階での作業ペースであれば二十分以内に業務終了が想定されません。ご安心を、リインフォース》

「ケルベロスが言うのなら、間違いないんでしょうね」

隣の秘書殿はすっかり呆れ果てている。マリアが特務隊と行動を共にして学んだことは、ファルド自身よりもケルベロスの方が愛嬌があるということだ。社交性がある、とも言う。とかくファルドは自分の事となると、まるで、とんと、まるで、まるつきりと言っていいほどに無頓着になる。現に今も、ケルベロスの言う仮眠から七十時間も活動している。それでいてロストログアの回収と保管、違法魔導師との戦闘を繰り返して涼しい顔をして報告書の作成に勤しんでいる。

アインスの少しだけ睨む顔に、マリアは頼杖をつけてファルドを横目で眺めた。

『休みなさい／休んでください』

二人の言葉が重なる。それに、一瞬だけ手を止めて顔を上げたフルドは、短く一言だけ告げた。

「これが終わったら、休憩の予定だ」

「……………はあ……………」

“そういう意味”で言っているのではない。マリアは今度こそ呆れた溜め息を漏らす。

人は言う。管理局の蒼鬼——不滅のエース・オブ・ストライカー。

その実態は、末期症状の仕事中毒者であるのだと。

Tr. 12 復活の片翼

——弦十郎の下へ訪れてきた人物は、意外な相手だった。それは、退院してきた天羽奏。面食らう相手に挨拶代わりに片手を挙げて笑みを浮かべてみせる。

「よ、ダンナ。どうしたんだい、そんな間の抜けた顔して」

「……いや、お前……退院は明日ではなかったのか？」

「アタシの退院は今日だよ。まったく、あの嘘つきめ。今どこにいるのか知ってる、ダンナ。あんだだけ「迎えに行く」って言ったのに、すっぱかしやがって！」

「ああ、クルヴェイスなら今——」

「……………」

翼がフレームデバイスに襲撃されて三日が経った。その間、クルヴェイスの睡眠時間は殆ど無かったし、翼と響の間で一悶着あったらしいが右から左に通り返けるくらいには疲労している。まともに帰ることもせず、新たな敵への対抗策と解析に全神経をすり減らしていた。

「くおーらあ！ この嘘つきイッ！」

「ほびゃー!?!」

ソファアに横になってスーツの上着を掛けて寝ていたクルヴェイスが突然、怒りのモーニングコールにソファアから転げ落ちた。慌てて身体を起こすと、そこには眉をつり上げた奏がふんぞり返っている。

「は、え!? 奏!?! なんで!?!」

「なんで、じゃないだろ。今日はアタシの退院日だ。ダンナにも予定間違って報せてたのは、どこの誰だい、まったく。それに迎えに行くって言ってたからちよつとは待ってやったのに来る気配無かったからこつちから来てやったんだ」

「…………え、今日!? マジで!?!」

奏はすっかり機嫌を損ねていた。それにクルヴィスは何か弁解しようとしたが、自分が約束を破ったことに変わりはない。だが、思わぬ助け舟がなのは達から出された。

「奏さん、退院おめでとう。だけどクルヴィスさんのことイジメてあげないでね。ここ数日まともに寝れてないみたいだから」

「そうなのか？ アタシのスケジュール管理はしっかりしてんのに、なんで自分の事はどうにもならないのか不思議だけど」

「面目ねえ……」

「顔色もあんまり良くないようだけど、なんかあつたのか」

「何も無いっていう方が最近は珍しいかなーと」

「その辺りは私達から奏さんに話すから、クルヴィスさんは休んだ方が。寝てないんでしょ？」

「人間の身体は四十二時間ぶつ通しでスペック保てるように出来てないんですよ、高町一等空尉……」

目の下のクマを押さえながら深く息を吐き出す。だが、寝ていた頭が叩き起こされた以上は活動を再開しなければならない。スーツの上着を羽織りながら、ふとクルヴィスは自分の服の臭いを嗅いだ。そういうえば風呂に入っていない。

「どっかの教官殿は、連続百二十時間ぶつ通しで活動して常にスペック保ってましたけどね。生憎と俺はそれに比べれば平々凡々、無理っすわ」

「それはちよつと普通じゃないっていうか……」

怪物とか化物とか、或いは人体に深刻な障害を抱えている可哀想な人だ。

「クルヴィス」

「なにか？」

ガツチリと顔を捕まえて、奏は睨みつけている。それに目をそらすことも出来ず、クルヴィスは眉を寄せた。怒ってるのは目に見えている。頭突きの一つでも飛んで来ることを覚悟していたが、現実は違った。

「寝ろ。説教はそつからしてあげるからさ」

「あ、怒られんのは確定なのね俺……」

「詫びの品」つないってのかい？ あー、アタシ唐突に退院祝いで甘い物食べたくなってきたなー！ どつかのプロデューサーが買ってきてくれたらアタシは許してやらんこともないんだけどねー？」

「遠回しに挟りこんでくるのやめてください奏、買ってくるから」

「悪いね。でもその前に、風呂入ってきな。汗臭いよ」

「そのつもり。奏、退院おめでとう」

「言うのが遅い」

デコピンしてから解放されたクルヴィスは、その後すぐに自室でシャワーを浴びるなり泥のように眠り始めた。

「ふふ、奏さんとクルヴィスさんって本当に仲が良いんですね」

「蓮托生ってまではいけないけどね。なにかとアイツには感謝してるよ」

「そうですね。ああ見えて、クルヴィスさんが動いてないと本局から圧力の一つでも来てるはずなんですよ」

「アタシはよく、管理局の仕事がわからないんだけどさ。クルヴィスの言う情報査察部ってそんなにヤバイ部署なのか？」

「クルヴィスさんは飄々として話してくれないし、私も詳しくは知らないんだけど」

次元犯罪組織に大なり小なり恨まれている。そして、地上本部だけでなく本局からも憎まれている。味方と呼べる、信頼できる人などいなかった。同じ部署の人間であっても、それは敵だったかもしれない。

なのはが知るだけでも、情報査察部絡みの事件には死人がついてまわる。地上本部を狙ったテロであったり、ロストログアを違法所持した魔導師の確保であったりと——或いは、情報査察部そのものを狙った犯行であったのかもしれない。そんな部署の隊長を進んで引き受ける人材など皆無に等しかった。だからこそ、本局から流されてきた柳クルヴィスが上げた功績は凄まじい成果だ。

管理局は情報査察部を表彰することはしない。それは、彼らがあくまでも裏方であり、同時に表舞台に立たせればその命が狙われる危険

性が跳ね上がるからだ。

「クルヴィスさん、結構な修羅場くぐってきてるはずなんだけどなあ」

「それなのに、あんな体たらくで大丈夫か？」

「それくらい地球での仕事が大変なんですよ」

「なら、アタシがいつちよ仕事を減らしてやるとするか！」

「ダメですよ。奏さんは病み上がりなんですから、いきなり実戦だなんて。だいぶ長い間寝たきりだったんですから」

「二理ある。なら、戦技教導官である高町一尉のお力添えを頼もうかね」

「よろこんで！」

——喫茶店よろづ。本日のダイナータイムも盛況のままに終わり、店主は夜遅くにまで店に居座るリディアン音楽院の生徒達を早々に店から退去させる。軒先に出している看板を書き換えてルナリアと一緒に店の片付けを始めた。しかし、にも拘らず来店を知らせるカウベルに視線を向ける。

「いらっしやいませー、ってアンタか。毎度毎度飽きないな、うちに来て」

「常連客に向かってなんて口を。いつものセットお願いします」

「悪いがうちは馴染みの顔に、いつもの”なんて用意しちやいない。気まぐれ日替わりセットならあるけどな」

「んじゃあそれで」

「はいよ」

クルヴィスはいつものカウンター席に腰を下ろして、注文を待った。本日の店主は中華な気分だったのか、どんぶり丸ごと麻婆豆腐に青椒肉絲を添えて炒飯を持ってくる。ボディブローというレベルの重量級コンビネーション。

「お、おお……今日はまた随分とキツツイのを」

「お好み山椒も付けておくからお好きにどうぞ」

「ありがたくいただきます」

クルヴィスがレンゲと箸を使って口に放り込んで消化していく。

その手が、半分ほどまで進んでから、急に止まった。

「……辛いんですけど」

「中華だし、今日はそういう気分だった」

ニヤリと意地の悪い笑みを見せて、心底楽しそうに水を差し出す。砂漠のオアシスと言わんばかりに飲み干すクルヴィスはヒイヒイ言いながらもしつかり完食した。

「ごちそうさまっした」

「はいども」

「今日はもう一つ頼みが」

「なにか?」

「普段世話になっている女性から退院祝いに甘いものが食いたいとゴネられます」

「へえ」

「頼んでもよろしいでしょうか」

「いつもうちの売上に貢献してくれているから、今回は特別、受け付ける」

「すいませんと頭を下げるクルヴィスに、店主は訝しむ表情をする。

「ニホンジン、てのは変な人種だな」

「俺もそー思います。生まれも育ちも日本だけど……」

「ん? 俺の顔がなにか?」

(……そういや、この店主さん。何処の生まれだ?)

随分と日本語が流暢で、髪の色も珍しいと言えばそうかもしれない。クルヴィスは物珍しさから店主の人柄を観察し始める。海外からの旅行者にしても、日本に居を構えて店を出しているだけの腕。しかも連日繁盛している。昨今のSNSなら話題の一つにでも上りそうなものだが、それもない。フラツと現れて、まるで今までそこいなかったのが当たり前のように馴染んでいる。

「……店主さん、アンタ何処の生まれ?」

「……さあ? 生憎、流れ者だね。ガキの頃からあっちこっち行ってるもんだから、何処の生まれなのかは忘れちゃったよ」

「へえ」



嘘を言っているようには思えない。

「あまり詮索してほしくないんだが。そこまで親密な仲でもないだろう」

「親睦深めるのはダメですか」

「あくまでも、客と店員の関係に留めたい。お互いの為に。毎回うちに来てくれるのは助かるが、人に言えない仕事してるんだろ？」

「……あー」

クルヴィスは思った。〃——この店主は、ヤバイ〃と。下手に踏み込めば、帰れなくなる。情報査察部で経験したことのある危険信号に近い。

「ま、それは別にして。贈り物の件だが、相手はアンタにとって大事な人か？」

「あー、それ聞いちやう。そういうこと聞いちやいますか店主さん」

「大事な事だから聞いておきたいんだよ。それによって俺のやる気が違うので」

大事な人、改めて考えてみる。

——かけがえのない人。確かに、天羽奏は柳クルヴィスにとってしてみれば大切な人だ。居なければ困る。しかし、それが自分の中でどういった感情であるのかを冷静に考えると、とてもこっ恥ずかしいので深く考えるのは止めておいた。

「まあ、大事な人ですな」

「恋人か？」

「いやそれ聞いちやいますか。人に詮索するなど言っておきながら、そういうことを聞いてきますか!？」

「大事なことから二回ぐらい聞いておく」

「店主さんのこと、今すげえ性格悪い人だと思いました」

それだけ気さくに話をしていても、先程の悪寒が尾を引いてクルヴィスの背を冷やす。

果たして何者なのだろうか、と。

「……—はい、了解。ご注文承りました、と。早ければ明日には」  
「それじゃお願いします」

夜遅くまで居座ってしまつたクルヴィスは、店主に礼を言つて会計を済ませる。相変わらず採算が取れているのかわからない値段設定に「よく営業できているなこの店」と思いながらも喫茶店よろづを後にした。

「ああ、夜道に気をつけてくれよ。ここ最近は何かと物騒だから」

「お気遣いどうも。そちらさんも強盗に気をつけて」

「余計なお世話どーも。見慣れない外国人がうろついていたから、見かけたら逃げるか通報しておくのをおすすめしておく」

店主からの忠告に、片手を振つて去つていく。店内は閑散としており、既に繁盛期を過ぎた以上、これ以上はただ暇を持て余すだけだ。早々に店の後片付けを始めているルナリアに大まかなところは任せて、店主は仕込みも含めた準備を始める。

「そーういや、お前はアメリカ人だっけ？」

「……」

無口な少女は一瞥をくれるだけで答えない。

「まあどうでもいいか。そちらの会社の都合はともかく。今の生活が中々どうして気に入つてるもんでな。雇用契約書には載つてない不確定事項多すぎだが」

だが何よりも、日本独特の文化に触れるのはマスターにとって魅力的な話であった。和洋折衷が見境なく混ざるこの国で触れる食文化を探るだけで飽きない。しかし、それとは別に一つだけ不満を抱えていた。どうしようもない悪癖が解消できない、そしてそれは無視できないストレスの一端を担っている。どうしても手元が苛立ちを抱えていた。

「あちらからの連絡はまだ進展なしか？」

頷き、肯定する。ルナリアは米国の企業が請け負っている、米国連

邦聖遺物研究機関のとある開発に携わっている。それは今まで進展がなかったものの、とある組織と接触したことにより目覚ましい進展を見せていた。実現もそう遠くないはずである。

マスターは手元を動かしながら、自分の身の振り方を考えていた。今はフィーネの監視を米国から依頼され、同時にフィーネ自身の計画に加担している。ともすれば、今のライフスタイルはフィーネが軸となっている。そして、生活への貢献度は米国よりもフィーネから贈られるものの方が大きい。最終的に対象の研究成果を持ち出すにしても、援助を失うのは手痛い出費だ。マスターにしてみれば、収益が見合わない。むしろ、米国側は報酬がなければ手を切ってしまうていらくらいだ。

そうなれば、当然ながら両者から独立した組織へ加担するのが最も自分の利益になる。

そして、自分の中で結論付けると不敵な笑みを浮かべた。マスターのその笑みに、ルナリアが首を傾げている。

食後の散歩がてら、クルヴィスは夜の東京を歩いていた。奏に言われた通りに睡眠を摂って、目が覚めたら夕方だったので夕飯のついでにと喫茶店よろづに立ち寄ったのだが、奏への退院祝いも同時に済ませることが出来て僥倖と言える。後は完成を楽しみに待つだけだ。財布と相談しつつ。

アーケード街を歩いていたクルヴィスの顔を見て、ある団体が静かに動き始めた。

「そのアンタ」

「はっ。」

呼びかけられて、素直に返事をする。相手は四、五人程度の集団。いずれも外国人旅行者と思わしき身なりだが、違和感を覚えた。それは、旅行者に相応しくない警戒心、或いは敵意。これから事を起こそうかどうかという剣呑な雰囲気だ。そしてその意識が自分に向けられている。それでもクルヴィスはあくまでも心中穏やかに会話に耳を傾けていた。

この程度、脅威という程でもないの修羅場、くぐり抜けてきている。  
「柳クルヴィス “三等陸佐” で間違いないな」

「……俺を階級付きで呼ぶってことは完全にクロってことで」

「おっと、下手に動かないほうがいい。なにせこの世界で魔法の存在は秘匿事項だからな。アンタが一番知っていることだろう？」

往來のど真ん中でデバイスを起動するわけにもいかず、かといってこの状況が無視できるはずもない。管理局の柳クルヴィスを知っているということは、彼らは違法魔導師だ。外世界からの来客。だが、それが自分に何の用事があるのか。恨みを買った覚えならごまんとあるが。

集団の一人、ナイフ型デバイスが背中に小さな痛みを訴える。スーツに穴が開くからできれば突かないでもらいたいものだ。

「一緒に来てもらうぞ」

「飲みに誘ってもらってるなら喜んで行く所だけど、どちらまで？」

「来れば分かる」

「その口ぶりだと、日本じゃなさそうだし。米国連邦聖遺物研究機関？」

「――」

「押し黙るのは肯定と見て良さげ？」

それなら話は早い。

「……魔法の使えない管理局の魔導師が、抵抗できるとでも？」

「まあ仰りたいことは非常に同意。生憎と、まあ――」

整息、クルヴィスの手が、ナイフ型デバイスを持つ男の手首を捻り上げる。次の瞬間、男の視界が一回転した。その手からナイフが取りこぼされる。何事かと足を止めた通行人たちも、その足元に落ちた凶器を見て一団から距離を取った。

「慣れっこなもんで、痛い目見ると思うけど」

「貴様！」

残る男たちも懐からデバイスを持ち出す。形状はどれも同じナイフ型。量産されている違法デバイスの出処は後にして、クルヴィスはデバイスを起動させないままに構える。それを見て失笑した一団で

あつたが、最初の一人が踏み込んだ。

ほんの、小さな動き。クルヴィスは相手が突き出した拳の外側から内側へ拳を滑り込ませる。胸板に手を当てて、ほんの僅かな動きで掌打を加えた。踏み込んでいた相手が自分から拳をめり込ませる形で鳩尾の衝撃に咳き込み、左手で鼓膜を叩かれてたたらを踏んだ。

「くあッ!」

違法魔導師からすれば未曾有の衝撃だったことだろう。今まで受けたことがない重さに動転したが、次の瞬間には既にクルヴィスの連撃を顎に受けて昏倒した。

それを見て、一斉に笑みが消える。手慣れている。魔法に頼らない戦い方に、むしろそれが本来の実力なのだ。

「野郎……! おとなしく——」

「そおい!」

腕を足の内側に引っ掛けて、攫うように持ち上げられた男性が派手に転倒する。持ち上げながらクルヴィスは倒れ込む男性と一緒に寝転ぶ形で肘を腹部へと押し込んでいた。即座に距離を離し、立ち上がる。挟み撃ちの形で襲い掛かってくる一人に、胸の内ポケットから何かを投げつけた。それは正面の一人の太ももに突き刺さり、思わず足が鈍る。

背後から襲いかかろうとしていたもう一人は、既に投げられていた。

「つつ……? なんだこれ」

男が太ももに突き立つ、見慣れない針のようなものを抜くと、それは団子の竹串。そんなものが人体に突き刺さるとはにわかには信じ難く——疑問を抱いている間に、更に一人が八卦掌で沈んでいる。唾然としている間に、更にもう一人。今度は頭を揺さぶる連撃を受けて気絶させられる。

突き出した腕を掻い潜って顎を掴み、持ち上げるようにして腹部に肘と頭部への打撃を兼ね合わせた通背拳が強烈に意識を奪う。

「カッ……」

ドサリ。気づけば、自分が最後の一人となっていた。当人は涼しい

顔でスーツの襟を正している。

「どうする？」

「……ふぎけやがって！」

男は逆上した。ふぎけている、管理局の魔導師にデバイス一つ起動させないままに手も足も出せずに捕まるなど。魔導師人生に終止符を打たれるようなものだ。痛みを忘れて勢い良く駆け出し、ナイフを振るう。それを正面から受けるのは危険と見たのか、流星にクルヴィスも回避に徹した。

「この野郎！」

懐に手を忍ばせて、避ける。竹串を投げるにしても、距離が近すぎる。かといって刺すにしてもタネがわかれば脅威ではない。だが、男の手首を襲った鈍痛は、強烈な打撃だった。骨にまで響く、神経を震わせる激痛に思わずデバイスを手放す。

クルヴィスの手には、銀色に輝く鈍器。何の魔力も持たない、ただの趣味で買った逸品。鉄扇で自分の顔を扇いで冷まし、男の愕然とした表情にクルヴィスは優しく微笑む。

「お気に入りなんだ、これ」

「ふぎけ——！」

ふぎけた現実——だが結局のところ、その違法魔導師は柳クルヴィスにデバイスをただの一度も起動させることも出来ず、魔法も使わせないことなく鉄扇の一撃を首に受けて悶絶した。こめかみに鈍い衝撃、くらむ視界に、逆手に持ち替えた鉄扇が手首を捉える。引き寄せられる身体が次の瞬間には後ろにふっ飛ばされていた。優に二、三メートルは背後へ押し戻されて、男は立ち上がる気力すら沸かずに気を失った。

静まり返るアーケード街に、クルヴィスは電話をかける。

「もしもし、弦十郎さん？ ええ、ちよつと襲われました。……怪我はないんですけど、むしろ相手の方が重傷と言いますか。とりあえず、訳アリな連中なので確保お願いします」

間もなくして、彼らは確保された。それは表向きは公安警察の手によって。だが、実際は時空管理局の関係者だ。違法魔導師であること

が判明した以上、それは地球の領分ではなく時空管理局の仕事だ。

確保された違法魔導師達は、魔導師としてのプライドも犯罪者としての矜持も何もかもボロボロにされて連行されていく。クルヴェイスはそれに微塵も同情しなかった。暴漢相手に情けを掛けた方だ、五体満足ないし、骨の一つも折っていないのだから。

「あー事後処理嫌ですわあ……」

仕事が増えたことを大いに嘆いて、クルヴェイスは二課へと報告に戻る。自分が襲撃されたことで進展があるのは嬉しい誤算だが、倍々で業務が増えてほしくないものだ。

Tr. 14 狐の隊長、仏の副長

「クルヴィス、怪我はないか!？」

「スーツの方が心配です」

「二課本部へと戻るなり、心配してくれているのは嬉しいのだが、戻ってくるまでの間につけていた算段で頭が痛い。」

「先程の違法魔導士は全員本局へ移送します。これは時空管理局の管轄になりますので、彼らの所属が明らかになれば二課へ伝達します。本局への移送は、テストロッサ執務官にお任せしますが、よろしいですか」

「はい。でもどうして?」

「まあ諸々の事情です。高町一尉はお店もありますし、八神二佐には現場で指揮の補佐もあるので」

「あの、そこは私も教導官として言っただけです……」

「ひっそりとなのは何か言っていたが、クルヴィスは片手を挙げて謝罪した。」

「今回の件は迅速に対処願います。特に、本局に嗅ぎ回られる前に特急で」

「何故だ?」

「ま、複雑な事情があるんです。テストロッサ執務官。うちの部署のメンバーを本局に送り込んでおきます。接触は極力、そちらでお願いします」

「そんなことが出来るのかよ?」

「ヴィータの疑問に、クルヴィスは答ええない。地上の局員が本局に紛れ込むことなど不可能だ。」

「ま、そこはそれ。うちの部隊は優秀なので」

「答えになってないで、それ」

「んんんんんんんん!!!」

「言う気がないなら言わんでええよ! 凄い顔してるから!」

唇を固く噛んで、眉間にしわを寄せて鬼のような形相をするクルヴィスに、百面相という言葉が脳裏をよぎる二課だった。



時空管理局本局。フェイトが地球での違法魔導士を連行して帰投し、それを迎えたのは地上の制服を来た一団。クルヴィスの情報査察部だ。本局の顔があまり良くない。

「……」

「ああー、お待ちしておりましたテストロッサ執務官！　こちらです！」

わざとらしく声を出してにこやかに手を振るのは情報査察部副隊長。クルヴィス曰く『仏の副長』との人柄。

「こちらが、例の？」

「え、ええ……そうですね、けど……」

特急と言われたので日を跨ぐ前に移動してきたのだが、既に手が回っていた。素早く他の局員達から遠ざけ、先頭を切る副隊長は尋問室へと連行する。

（テストロッサ執務官。此方なら、本局に情報が漏れることはありません）

「そこまでして、どうして」

「詳細は省かせていただきます。クルヴィス三佐から話は聞いていますので」

「本局に、地球の情報を漏らしていけないのですか？」

「現地で起きた事件を本局には持ち込まないことも規定の一部です。だから」我々が派遣されました」

——そういうことか、とフェイトは納得した。本局はあくまで中継地点、都合よく使われる場所だ。得られる情報は地球と、その関係者にのみ明かされる。

「——くそ、テメエら！　俺は何も吐かねえぞ！」

「資料を」

「はい」

「あー、君は鬼面仏心という言葉を知っているか」

「……はあ？」

「隊長が曰く。私は『仏面鬼心』らしい。残念だが君たちの情報な

ら、二時間弱でまとめ上げた。いやくそ眠いんだがね」

なにか今、本音が聞こえた気がした。

「ハツタリを」

「犯罪組織クレイモアは米国連邦聖遺物研究機関と接触している、間違いないな。お前達の使用していたデバイスはコピー品だ。以前、管理局が潰した犯罪組織で使用していた物と同一の規格が確認されている——お前達は、その残党だな。クレイモアに吸収されたか」

顔を引きつらせて固まる違法魔導士に副隊長は資料を投げる。

「必要とあれば君たちの出身地と家族構成も割り出すがどうするかね。むしろ感謝してくれ、〴〵ここまで〴〵で済ませているんだから」

「——あ、アンタ一体……?」

「時空管理局情報査察部副隊長だ。なに、私達の隊長はこれより凄いぞ? 手段を選んでいるだけ慈悲と思ってくれ。安心しろ、クレイモアに身柄は渡さない」

犯罪者としては終わりだが、そう付け加えて情報査察部による取り調べが始まった。残りはそちらで引き継ぎ、追って情報をクルヴィスに渡す。そういう手筈で話が進んでいた。

「テストタロツサ執務官。こちらを」

「これは……?」

「彼らの使用していたデバイス。その元となった、過去の同一品です」  
「え、えつと。これも、クルヴィスが?」

「はい、そうですか? というのも彼らが使っていたデバイスを解析したのはクルヴィス三佐です。我々はそれを元に情報を辿っただけです」

早業にも程がある。クルヴィスの襲撃から五時間弱、それでここまですべて調べて情報をまとめて本局にも……?」

本局に、地上の局員が連携を?

「あの。本局と連携は」

「してません。無断です」

「ええええ!? それって、いいのですか?」

「我々の悪評が広まるだけでしようねえ、あつはつはつはつは。その

不名誉は全部クルヴィス三佐に投げます。いやだって我らも被害者なので」

鬼かこの人は。フェイトは受け取った書類に感謝しながら、情報査察部と別れる。

小休止を挟んでいたフェイトだったが、見覚えのある顔に視線が止まった。

特務次元航行隊の黒を基調した制服。目を引く銀髪、連れ添っている小柄な二人組も、フェイトには馴染みのある顔だった。遅れて、緊張感のない伸びをしながら制服の上着を脱いでいる管理局の紅鬼も。

「アインス」

「ああ、フェイト。久しぶりですね」

「お久しぶりデース！」

「切歌、調も元気にしてた？」

「よ、フェイト。地球で任務じゃなかったのか？」

「そうだったんだけど、ちよつと。クルヴィスが襲撃されて」

「ほーん」

心配する素振り一つなく、まるで雑談でもするかのような気軽さで話を流した。

「クルヴィスが襲われたデスか！」

「切ちゃん、声が大きいよ」

「情報査察部隊長が違法魔導士に襲撃された？ 別に、珍しい話でもない」

「だけど、クルヴィスは部下でしょ。心配くらい」

「する必要ねーよ。俺の部下だったんだぜ？ 本局第一線部隊、アイ・アム・レジェンド伝説の生き残り。それが、陸の人間だから誰も口にしない。俺はそのせいで紅鬼呼ばわりされてる」

管理局の中でも秘匿された第一線任務。現地住民を含め、根付いた犯罪組織の一掃。作戦名『カントリースーパー』遂行は、投入された管理局員百名以上にも関わらず生存者は片手で数えられる程だったという。一人はロア・ヴェステイージ——まさに鬼神の如き一騎当

千の活躍だったという。

もう一人。柳クルヴィス。決して表沙汰にはされない。ただ生き延びた、逃げ延びた。そんな評価だったが——ロアだけは知っている。

「多分、アイツ。あの作戦で俺の次に倒してるぞ」

「まつさかー。ロアは言いすぎデス。あのクルヴィスさんデスよ？」

「うん。いっつもお菓子くれたし、それに……私達より弱いし」

秘密裏に行われたシンフォギアとデバイスの演習。特務次元航行隊の管理下で行われたその演習は、クルヴィスが切歌と調に敗北という形に終わった。

「まーシンフォギア相手は向かないだろうなあ……それにほれ、二人はちっこいし」

「……いつまで立ち話してるつもりだ、ロア。制服目立つんだから早く報告しに行くぞ」

「おー、ファルド。悪いな、フェイトがいたもんで」

「そうか。久しぶり。ロア、書類を預かるぞ。切歌達と一緒に俺の報告を待機。それまで自由時間だ。先に行ってるぞ」

ファルド・ヴェンカー一等空佐はロアの手握られた報告書を引つたくりながら早歩きで去っていく。

「なんというか、相変わらずだね」

「ああ。上官としては最高の逸材なんだがね……人として、どうなんだか……」

それは自分自身にも言い聞かせているようで、何も言えなかった。最高の戦力ではあるが、以下同文——。だが、本人は気にせず切歌と調の頭を撫でると笑ってみせた。

「自由時間だし、演習でもやるか？」

『嫌です！』

満場一致で拒絶されてロアは肩を落とす。演習の一言を聴いた瞬間、周囲の局員が一斉に身を引いた。絡まれたら最後、朝まで病院のベッドだ。触らぬ神に祟りなし。顔を背けて自分達の仕事に没頭する振りをしていた。

夜も遅いという事もあり、セレナとマリアに切歌と調の二人を任せ、ロアはフェイトと本局の休憩室で身体を休めながら積もる話を片付けていく。特務次元航行隊の現状、今の地球の状況。お互いの近況報告は少なくとも心の安らぎになった。

「私がいなくても、相変わらずなんだ。そっちは」

「まーなあ、仕方ねえよ。ファルドだし」

「あの二人も……」

「……仕方ねえ、の一言で片付けられねえんだよな」

六年前の惨劇。その被害者達——マリア、セレナ、切歌、調。そして、ファルド。結果から言えば、聖王教会に身柄を預けられ、管理局の過度な接触から遠ざけられた四人は、ファルドが成人して間もなく身元保証人となった。同時に、特務次元航行隊の隊長として任命されている。こうして一緒に任務に向かなくてもいいはずだ。

普通の女の子のように、ミッドチルダで生活して、学校に行って、友達と遊んで——それなのに、四人はファルドと共に危険な道を選んでいる。自分達の持つ力が次元世界の誰かを救えるのだと、戦場で歌っている。それにファルドは当然ながら良い顔をしなかった。足を引っ張ったりもしたが、何も言わない。

「ナスターシャ教授もまだ技術課で魔術研究中だしな」

「そうだったんだ」

「あのおばさん、スゲーのな。そのうち技術主任にでもなるんじゃないか？ ファルドがよく話してる姿見かけるし」

確かに納得できる光景だ。ただそれが、親子であるとか義理の関係とかではなく、純粋に管理局の関係者という事がどこか悲しくもある。

ファルドにも、ロアにも家族は居ない。この二人は生まれた時からずっと管理局に所属している。親の顔も知らず、名前も知らず、ただ

その職務を全うしてきた。その生まれについていつだったか聞いたことがあるが、二人とも言葉を濁すだけで答えない。

「ま、俺らもデルタの整備が終わるまでは短い休暇を満喫させてもらうさ。聖王教会に足運んで、顔出したらミッドチルダでも回るさ。切歌達連れてな」

「うん。きつと喜ぶよ」

「アインスだけでも地球に行かせてやりたいが、同伴必須だしな」

「……ファルドは？」

「聞くだけ無駄だ」

聞くまでもない。ファルドは報告の後、休暇の通達。その後身体検査、デバイスの調整、予算報告。仕事如山積みで満足に寝ることもできない。だが、それを口にすることも愚痴をこぼしたところも聞いたことがなかった。

「いや悪いな、フェイト。こんな夜遅くに呼び止めて話し込んだりして、そっちも忙しいだろ」

「うん、クルヴィスが」

「あーんにやろうは全く。ほんつと貧乏クジだけは一級品だな。元気にしてるか」

「最近はちよつと、お疲れ気味かな」

「俺の奢りで栄養ドリンクでも一箱買ってやれ」

「それがいいかもね」

二人でひとしきり笑いあってから、別れる。後日、クルヴィスにはロアからの奢りという名目で栄養ドリンク一箱が送りつけられた。

「チクショーーーーー!!! 当てつけか! 俺へのあてつけか!? 何考えてんだあの筋肉ゴリラバカ隊長ーーーー!!!」

「追加の業務です」

「ありがたくおかけりください藤堯すあん!!!」

「書類が届いていますよ、柳さん」

「ひゃっほーいらねえーい! そこでいいです友里さあーん!!」

管理局の仕事マシマシ残業モリモリ睡眠時間ゴリゴリ削岩機。ク

ルヴィスの脳みそは茹でダコ寸前、脳みそ温泉卵待ったなしのお仕事  
チヨモランマと化していた。現在深夜二時、資料提出まで残り七時  
間。此処まで来るともう現実逃避するしかない。

「焼肉行きてー。転職して他人の金で焼肉食いてー」

「あらあんお疲れみたいねえ」

「あつはつはつはつは、こんばんは了子さん。お願いします俺の仕事  
丸投げするんで帰っていいですか」

「んー、そうねえ。ダメかな♪」

「ダメっすか♪」

俺に死ねと申すか。笑顔で死刑宣告されてクルヴィスはやけくそ  
になった。——どうにでもなーれ☆ 頑張れ明日の俺、きつと生きて  
るさ！ 多分顔が土気色になつてるだろうけども。

一枚の書類を手にして、了子は「ふむん」と声を漏らす。

「この、フレームデバイスの解析はここまで進んでるの?」

「そこまでが限界、と言いますか。戦闘してみないとなんとも言えま  
せん」

「ふうん、すごいじゃない。翼ちゃんの一戦だけでここまで解析でき  
ちやうなんて」

「過去のデータタひっくり返して照合してるだけですよ。大層なもん  
じゃないです」

まるでそれが当然のこと、という風に装っているが了子からすれば  
それがとてつもないことだと理解していた。言わば、無数の情報が揺  
蕩う電子の大海原。情報の砂漠から目的の品を見つけ出す索引と観  
察眼を持つているだけのこと。酷似したデータを引っ張り出して照  
らし合わせ、該当すれば擦り合わせていく。その都度起こる情報の齟  
齬を解消していき、修正。それが、現代社会においてネットワークか  
ら正しい情報の引き出しを用意できるというのが、クルヴィスのある  
種才能と言える代物だった。諜報活動に関して柳クルヴィスは天才  
と言っても過言ではないのだろうか。櫻井了子は思案する。

果たして今、この男を始末するべきか——。無防備に背中を向けて  
大きく伸びをしながら大あくび。まるで警戒心の欠片もない。関節

を慣らせば折れるんじゃないかと不安になる音がバキゴキと鳴っていた。

「しっかしそれだけじゃないんですよねえ」

「つて言うとおお？」

「ほら、俺襲われたじゃないですか。暴漢に」

「そうね」

つい先日のお話。

「そいつらの情報もまとめんといかんわけで……あー、アニメの世界に浸りたい。助けて魔法少女」

「助けを乞う相手を間違えてる気がするけども、まあ頑張つてねえん」

「ふぁーい」

机に突っ伏しながら、気だるげに手を振るクルヴィスに、了子は部屋を後にしようとして――。

「あ、了子さん。その資料借りるなら一言言つてくださいませ。すぐ使ってください」

「えっ？ ……ああ、これね。ごめんなさいね、話してたら忘れちゃつてたわ。ほら、もうオトナの時間だし？」

「まー、そりゃあ。気持ちは分かりますが、気をつけてくださいいねー、俺も情報漏えいとかで面倒事に駆り出されたくないのよ」

了子の手から一枚の書類を受け取り、クルヴィスははにかんだ。疲労で表情筋も強張っている。少し気分転換に顔でも洗ってきたほうがいいだろうか、等と思いながら。

執務室に一人残されて、唸る。やはり安心できない。気を許せる相手ではない。持ち出されようとしていたのはフレームデバイスの解析情報。偶然、だとしてもあまりに危険過ぎた。櫻井理論の第一人者、シンフォギアシステムの開発者がデバイス技術に興味を持つ……そこまでならば、なるほど確かに道理だ。天才の好奇心を抑えられるものなどないのだから、クルヴィスのような凡俗より遥かに知識の吸収と蓄積は早いだろう。『それでも』と、何か告げている。第六感、或いは生理的嫌悪。

櫻井了子は、同族であり決して相容れない種族だと。ならば逆らう



理由はなく、クルヴィスは自らの感性に従う。

「……………ねーむーいーのー、おーれー!」

書類をぶちまけて、クルヴィスは床に大の字に寝転んだ。やってられっかこんな事務処理! ああ、床が冷たくて気持ちいいのお。ダメな大人の手本、良い子の皆は真似しちゃダメだぞ!

「このまま寝て起きたら資料完成してねえかな……………」

残念なことに現実是非常に辛辣で非情であるのが常である、嗚呼無情諸行無常。

眠気に支配されつつある頭を打ちつけて叩き起こし、クルヴィスは顔を洗うことにした。シャワーでも浴びようものなら即座にお布団ダイブ待ったなしなのは明白である。お風呂は寝る前、昔からそう決めている。

二課のトレーニングルーム前で、人の気配に気づいた。誰がこんな夜遅くまで熱心に身体を動かしているのかと覗き込んでみれば、そこには天羽奏。シンフォギアを纏うでもなく、基礎的な体力トレーニングに汗を流していた。

「こーんな夜遅くにまで、なにハッスルしてるんですかねえ奏さんは」  
「誰かと思えば、絶賛仕事中毒で担当の見舞いほっぴり出したお狐さんじゃないか」

「人の失態をえぐる発言マジ勘弁願います」

「アツハツハ、悪いね。アタシは早く戦線に復帰したいのさ。ガングニールも手元にあるし。それに——あの、響って子と一緒に戦ってみたいんだよ」

「気持ちは分からんでもありませんが」

「…………アタシなりの、贖罪さ。戦う力なんて手に入れちゃって。偶然だとしてもだよ? アタシのせいだ、立花響は」

「違う」

クルヴィスは、うつむく奏の言葉を強く否定した。それは違うと。「戦う力があるとかないとか、そういうのじゃない。そういう子なんだ、あの子。シンフォギアを手に入れても、手に入れなくても。誰にでも出来る優しさを手放さない。生きるのを諦めない、自分も、手を

伸ばした誰かも助けようとする強い子だ。だから奏のせいじゃない」「だけど実際に、響はノイズとの戦闘に駆り出されてるんだろう!?」  
言うだけじゃないか、アンタは!」

「それを選んだのは彼女自身の選択だ。そして、管理局の戦いには巻き込まない。巻き込みたくない。コレは、俺の仕事だからだ。時空管理局の人間としての、柳クルヴィスの領分だ」

「そんな都合の良い話が——!」

ノイズとの戦いに管理局は協力して、それ以外の問題は全部おつかぶる。奏にはそれが、どうしてか無性に腹が立った。ふざけんな、と。  
「いいかクルヴィス! アンタはアタシのプロデューサーだ! 二人三脚とまではいかないけど、そんな後ろでコソコソ隠れられちゃアタシだって気になってしょうがないんだよ。男らしく正々堂々と胸張ってアタシと来い!」

「いい男には秘密があるものなんですよ」

「……それ、女の間違いじゃないの?」

間を置いて、二人は笑った。ああ、台無しだ。なんて奴だ、なんて人だと。互いをひどく罵り合って笑った。

「あー、寝ぼけてんのかな俺は。顔洗って出直してきます、奏も早く寝たほうがいいよ。肌が悪い」

「生憎とアタシは若いんだ、気を遣ってくれなくて結構さ。ひとつ風呂浴びて寝るよ。おやすみ、クルヴィス」

「良い夢を、奏」

クルヴェイスが死に物狂いで提出した資料に目を通していた弦十郎は、チラリと盗み見る。見間違いでなければ、多分、立ったまま寝ていた。現在朝の七時半。この男はやりきったのだ。しかしこの後にはツヴァイウィングとしての天羽奏復帰プロデュースが待ち受けている。出社まで三十分。果たして起きることが出来るだろうか。

「クルヴェイス。おい、クルヴェイス。起きろ」

「……ふえい」

「ご苦労だった。後は俺の方から二課に伝達する。お前は休め」

「……ひゃい」

「奏にはこちらから言っておく。それでいいな」

「——いや、そりゃダメな相談です。やります」

「そ、そうか……くれぐれも無理はするな？」

背筋を伸ばしたクルヴェイスは奏と一緒に打ち合わせの時間通り、指定されたテレビ局に足を運んでいた。

「今日も何事も無ければいいのだが……」

頻発しているノイズ事件に、二課も辟易としていた。連日連夜、とまではいかないが不定期に勃発されてるこちらとしてはいい迷惑だ。対策もなければ、新たな脅威にも気を巡らせなければならぬのだから。

相変わらず、翼は管理局を毛嫌いし、響との仲も進展する様子はない。復帰を果たした奏もまた、クルヴェイスの手によって再び表舞台へと立とうとしている。しかし、ツヴァイウィングの復活になるかは、まだ難しい話だった。二課と管理局の軋轢を生み出しているのは、心を開くことのない風鳴翼が原因であることは明白だったが、誰もそのことに触れないだけの優しさは持ち合わせている。

学校の帰り、いつもの足取りで町を歩いていた翼が時間を気にして

時計を見れば、奏がもうじき取材を終えて戻ってくる頃合いだった。それに少しだけ頬を緩めて歩き出して顔を上げれば見覚えのある騎兵が、街の風景に馴染んでいる。誰もそれが未知の異形であることに気づいていないのか、談笑しながら横を通り過ぎる学生や行き交う車両。

「……」  
ここで、やるつもりか。しかし……、そう気を揉んでいた翼だったが、相手はこちらに気づいている様子がなかった。ただジツとバイクに跨っている。さり気なく近づいてみるが、やはり気づかない。勘違いだったのだろうか？ 翼がどうするか考え込んでいるうちに、騎兵の首が動く。

目があった。だが、互いに言葉を交わすわけではない。ただ、睨み合う。

「……………」

《……………》

『何をしている』

埴が明かず、口を開けば電子音声とかぶった。それはこちらの台詞だと言わんばかりに。

「従来の片隅で、なぜ待機している」

《理由はない。人の営みを観察していた》

「なに？」

《走り抜けるだけの風景だが、一時足を止めれば喧騒に塗れたライブ会場だ。たまにはこの雑音も悪くない。……フン、悪くない》

以前にも増して人間臭さを感じられる言動と行動に、翼は何処か警戒心をほぐした。街のど真ん中で戦闘する気はないらしい。

「意外な事を口にするものだな。機械なのに」

《機械なりに、人間を評価している。機械にできない不確定性原理が多すぎる。統合性も均一性もない、にも関わらずお前達人類は不思議だ》

「……私と、戦わないのか。お前達の任務は戦闘データの収集、そのはずだ」

《該当する》

「ならば」

《時間の無駄だ》

「——は？」

《時間の無駄だ、と言ったのだ。乗れ、天羽々斬》

バイクのタンクから予備のヘルメットを取り出すと、翼に差し出した。言葉の意味を飲み込むのに時間を要し、理解してから困惑する。

「な、何を言っている？ 私とお前は敵同士、それを」

《だからなんだ。どうする、乗るのか》

「いや、それは……」

《コイツは速いぞ。お前の乗っていたバイクよりもな。敵を知るのも戦いだと思うが》

「……挑戦とみた。受けて立とう」

ヘルメットを受け取った翼はバイクに乗り込むと、ライダーの身体に掴まった。無機質な身体、鋼鉄の肉体、機械の内臓。造り物の生命。冷たい感触に、やはり人の温もりはなかった。違法魔導士などではない。脳裏に浮かぶリインフォースII——あれも、デバイスと聞き及んだ。

融合騎。ユニゾンデバイス。そして、同じく人型のフレームデバイス。

愛嬌のあるリインフォースIIとはあまりにかけ離れた、戦いのために造られた存在。或いは、自らが望んだ形とはこういうものなのかもしれない。

緩やかにバイクを走らせるライダーに、翼はしっかりと掴まる。思いの外、しっかりとした運転に眉を寄せた。以前はもつと法定速度を置き去りにするような無法者の走りをしてきたが、今は自然な走りをしてる。周りに速度を合わせてバイクを運転していた。

（私は、なにをしているんだ……）

《天羽々斬》

「風鳴翼だ」

《風鳴翼。飛ばすぞ——》

「望むところ！」

同意を得た次の瞬間、ライダーの駆るバイクは突風と共に道路を駆け抜ける。

「……つかぬことを聞くが、信号機の意味は知っているか？」

《青は走れ。黄色は注意。赤は止まれ》

「理解しているようで何よりだが——」

信号が変わる直前に駆け抜けていては意味がない。

「意味が無いな」

《やはり走っている時が一番良い。俺はこの時間が好きだ。コイツと走っている時が、一番『楽しい』と思っている》

「貴様は機械だろう」

《……それがどうかしたか？》

「機械の貴様が、なぜ感情を口にする」

《人間に感情の是非を問われるとはな。貴様は機械にでもなりたいのか？》

問い返されて、翼は口を閉ざした。

法定速度を置き去りにした疾風は警察車両すら軽々と撒いていた。

『翼、聞こえるか。高速で移動しているようだが——お前、何をしている？』

「騎兵の挑戦を受けています」

『なにが目的だ？』

「わかりません。ただ、バイクを走らせているだけで……」

『戦闘が目的では、ないのか……？』

「……相手の動きを見るに、単にツーリングではないかと」

『………変なやつだな。まあいい、妙な動きを見せれば即刻戦闘を開始しろ』

「わかりました」

二課との通信を聞いていたのか、ライダーは即座に否定する。戦闘の意思はない、と。

《今のお前と戦う理由がない》

「ならば何故」

《お前の乗っていたあのマシン。良い走りをしていた》

「……それだけか？ その賛辞を述べる為に？」

《それだけだ。そこまでの走りだった。だがコイツは違う。既存のパーツと整備に手を加えて、走らせるだけとは違う。俺の為だけに造られた、俺と同じく。俺の半身だ。コイツは走る為に造られた。だから、俺もそうする》

「騎兵……」

まだ加速を続けるバイクのスペックの底知れなさに翼はどこか胸が湧いた。何もかも置き去りにした走り—— “走る為の走行”

《アームドデバイス、ソニックウインド。それがコイツだ》

「デ、デバイスだと？ 私の乗っているコレが!？」

大型二輪型アームドデバイス——クルヴィスの危惧していた通りになった。簡単に自らの手の内を明かしているが、良いのだろうか。それとも、自負しているのか。その程度で勝利は揺るがないとでも。

「ど、どこまで走るつもりだ!？」

《どこまでもだ。理由などない》

「いや、しかしだな」

《いつまで戦うつもりだ》

「この命、果てるまで——」

問い返されて、応えて。気づく。ライダーは首だけ振り向いて、翼と目を合わせていた。ハンドルに手を触れることもなく腕を組んでいる。しかし、操舵に一切の問題はなかった。

「オートパイロット自動運転機能……?？」

《気は済んだか?》

「えっ?？」

《マシンに乗っていた時は、もう少し気概があったのだがな。感情の起伏、人間とは面倒なものだ》

緩やかに速度を落とし、ソニックウインドを停車させる。気づけば東京を一周していた。人気のない少ない通りを選んで停めたのは、ライダーなりの気遣いなのだろうか。いやしかしそんなはずはない、相手は機械。翼はヘルメットを外して、ライダーに返そうとする。

《いや、いい。お前が持っている。俺には不要だ》

「しかし」

《……次に戦場いくさばで会うことがあれば、敵同士だ。手を抜くなよ、風鳴翼。面倒事は全部置き去りにしてこい》

パトカーのサイレンに、ライダーは敢えて立ち向かった。

前輪を持ち上げて軽々と飛び越えていく。それに急ブレーキをかけて次々とUターンして追跡を開始する警察車両の群れ。ヘルメットを持ったまま立ち尽くす翼は、視線を落とす。

黒に紫のラインが走っているフルフェイスヘルメット。風防に映る自分の顔と睨み合い、なんとも言えない惨めな気分になった。

「……戦闘機械にすら慰められるか」

確かに、走っている時は余計なことを考えずに済んだ。些事など気づけば振り落とされ、大事なことだけが残されている。

胸にあるのは、変わらぬ防人の矜持。常在戦場。管理局との軋轢も、所詮はつまらない子供の意地っ張りだ。——そんなことは分かっている。分かっているのだ。だが、胸に影を落とすのはいつだって、あの日の惨劇。

二年前、自分が守れたのは何だったというのか。大事な大事な片翼すら、狐に搔っ攫われた。



翼がヘルメットを片手に帰路についていると、見覚えのあるバイクが停められている。はて、つい先程見かけたばかりではないだろうか？ 首を傾げて周囲を見渡すものの、バイクには誰も跨っておらず、ライダーの姿はない。

まじまじと近くで見つめると、その細部が異なっている事に気づいた。

「……んん？」

世界でただ一つしか存在しないと思っていたが、そうではないのだろうか。翼が怪訝な表情で見つめていると、肩を叩かれる。振り返れば、バイクの持ち主と思われる蒼い髪の青年が口をへの字に曲げて眉を寄せていた。

「俺のバイクになんか用か、アンタ」

「あ、ああいや……その、知り合いのバイクに似ていたものでつい」

しどろもどろになりながら後ずさる。見れば、その手には買い物袋。中身は野菜や肉、調味料その他諸々。夕飯の買い出しでもしていたのか、バイクの座席に乗せる。

相手も翼の手に持っているヘルメットを見てから、顔に視線を移した。

「このヘルメットが、なにか」

「いや？ 知り合いのヘルメットによく似てるものだからつい」

どこか人を小馬鹿にしたようなにやつきに、翼はなぜか無性に腹が立つ。恐らく、自分と決して相容れないタイプの人種だ。だが、そんな内心のささくれを治めて平静を保って会話を続ける。つい今しがた別れたライダーと同じバイクがこの世に二台も存在するはずがない。

「その、私もバイクに興味があつて、見かけない車種だから気になつてだな」

「へえ」

「どこのメーカーなのか、教えてもらえないだろうか？」

「残念なことに、俺も詳しく知らないんだ。なんせ、貰い物だからな」  
「貰い物……？ 一体、誰から」

「誰からでもいいーだろうが。っていうかそれこそアンタ誰だよ」  
「なっ……!?!」

多少なりとも、相手の言葉は翼にとって衝撃の一言だった。仮にも日本のトップアーティスト、ツヴァイウィングの片翼。風鳴翼を知らないと言語道断、切つて捨てた。CDも少なからず出版しているというのに、いや、相手が恐ろしく世間知らずな可能性も考慮して、翼は咳払いを挟んだ。

「私は、風鳴翼だ。聞いたことはないか？」

「知らん。有名人？」

それこそ翼は衝撃のあまり、手からヘルメットを落とす。

「その制服、リディアンのだろ？ うちによく来る客が着てるから知ってるが」

「そ、それこそ貴様こそ誰だ。名前くらい名乗ってもらおうか」

「喫茶店よろづの店主。マスターだ」

「喫茶店、よろづ……？ 知らない店だな」

「リディアンの近くにあるんだが、まあ知らん店なら別にいい」

こんな失礼な男が店主ならば、さぞ店の評判も悪かろう。翼はそう思いながらヘルメットを拾い、偶然近くを通る同じ生徒達の姿を見つけた。その生徒達にはこやかに手を振りながら駆け寄ってくると、翼に挨拶を交わしてからマスターに声を掛ける。

「さっきお店に行つたんですけれど、もう閉店しちやつてたから驚きました。それに翼さんも一緒だなんて」

「今日はもう店じまいだ。プライベートな買い出し中。そっちは、たまたま偶然居合わせただけだ。有名人なのか」

「ええ!?! 知らないんですか!?! 風鳴翼さんと言えばツヴァイウィングの——」

「あー……芸能関係疎くてな……」

「そんな、もったいないですよ。今度CD持って行きますから、ぜひ聞いてください。凄いですから」

「そりやどうも」

気さくに会話を弾ませているところを見るに、どうやら人当たりは良いらしい。それから察するに、リディアンでもその喫茶店はだいぶ有名なようだ。世間知らずはお互い様ということだろう。

「バイクに興味あるからつてことで声を掛けられた。まさかそんな有名な人だったとはね」

「いや、こちらこそすまなかった。リディアンの近くにあるというのなら、機会があれば立ち寄らせてもらう」

「その機会があれば、どうぞご最良の程を。それと、さつき言ったこのバイクだが……」

コンコン、とタンクを叩いてマスターは言葉を選んだ。

「海外で製造された試作品。もとは軍用だったが、基準値に達しなかったもんで一般向けにリミッターやら何やらつけた奴。燃費も悪くないし馬力も十分あるもんで俺も乗り回してるし気に入ってる。だからメーカーは知らん」

「そうだったのか……」

カウルに入られているロゴペイントは『Strayed』、迷い出るもの。はぐれものとしての由来による名前だろう。元・軍用として製造されていたのなら、市販の二輪に比べれば随分と重装甲であるのも納得がいく仕様だ。

「最近、ノイズが頻発しているみたいですからマスターさんも気を付けてくださいね」

「防ぎようのある災害は人間だけだよ、無茶言わないでくれ。明日は通常通り営業してると思うから、ご来店お待ちしております」

軽く手を振り、マスターと名乗った店主はバイクを押して去っていった。

（喫茶店よろづの店主、マスターか……ただならぬ雰囲気の間人だったな）

それ以上に嫌な奴、というのが翼の第一印象だったが。

フィーネの邸宅に着いたマスターは早速厨房で夕飯の支度を始め

る。クリスがいつものように暇を持て余し、待機していたシャドウが首を上げた。

「よう、暇してるか」

《問題ない》

「そろそろあたしの出番だ。今夜、立花響の拉致を計画している」

「夕飯どうする、食ってくか？」

「お前んちじゃねーだろ」

《作戦には我々も出動を予定している》

「頑張れー。暇があったら俺もサポートする」

「おめーがかよ？ ハッ、どうだかな」

クリスはそれに不満を見せているが、シャドウはあくまで合理的に判断した。バックアップがあるのなら現場での動きはより柔軟なものになるだろう、と。

《ライダー、並びにマスターも出動する》

「そりや結構。向こうも必死になるだろうから、引き際は弃えておけ」

「……なにイラついてんだよ」

「べーつに？」

「そりやそうだ。一人だけ仲間はずれで、フィーネからも信頼されていないからだろ？」

「クリス」

マスターは呆れた様子で眉を寄せた。

「俺はフィーネよりお前の方が好みなんだが」

「……——ふさける、バァーカツ！」

冗談だ、と悪戯っぽく笑いながらマスターは厨房へと消える。二人のじゃれ合いを見ていたシャドウが、内部データの更新を行っていた。

《好意、という感情については不明瞭な観点が見られる。解説は可能だろうか、雪音クリス》

「っせえ、黙ってるー！」

《了解。待機する》

そっぽを向いたクリスの頬が確かに赤くなっていたが、シャドウは

言われた通りに黙っていることにする。

ノイズの出現反応に、現場へ急行する奏と響。クルヴィスが車を出して送り届け、復帰後の初出撃となる奏のサポートへと回る。なのは達は緊急に備えて本部で待機していた。

「奏、復帰してからノイズとの戦闘は初めてなんだから無理はしないように。響ちゃんも程々に頑張つて。すぐに翼ちゃんがくると思うので」

「は、はい！ あの、奏さん。今日はよろしくお願いしますッ！」

「ああ。かわいい後輩なんだ、ちゃんと面倒見てやるさ。さあ、やるよ響！ 今日はあたしとあんたとで GANG ニールデュエットだ！」

聖詠を口ずさみ、シンフォギアを纏う二人が出現したノイズを蹴散らしていく。同じ聖遺物であってもアームドギアの形状は大きく異なる。デバイスはその点、同一形状であっても登録されているプログラム次第で使用できる魔法も変わってくる。

「風鳴司令、今回のノイズは……」

《ああ。作為的なものを感じられるな》

クルヴィスの疑問に、やはり、と弦十郎は答えた。

《なにか、陽動のようなものを感じる。気をつけろ》

「了解です」

二人の戦いを後ろで見ていたクルヴィスだったが、心配は杞憂に終わる。とはいえ、油断は禁物だ。奏の戦闘可能時間は極めて限られている。それも以前より短くなっていた。Linkerの過剰投与も控えられている。新型の開発が望まれる中、進展が見られないのも現実だった。

《小型ノイズの反応に混じって大型の反応も見られる、注意しろ！》

「はいッ！ 大型の反応……」

「響、アイツだ！ あの紫色の！」

「見たことのないタイプですね」

「ブドウみてえ」

緊張感のないクルヴィスの眩きに、二人が激しく同意して深く頷く。

（そういや最近果物食ってねーな。食生活ガタガタだし、たまにはスウィーツとか食ってみたいな）

どうやら今日は頭のネジが普段より多めに外れているらしい。しかし、その槍さばきに一切の淀み無し。接近してくるノイズは全てクルヴィスに触れることなく自壊させられていく。

ブドウノイズ（仮呼称）は房から果実を周辺に振りまくと、爆発を置いて走り去っていった。地下鉄へと消える姿を追って、響が先行する。

「やる気まんまんだねえ……あたしも負けてらんない、なツ！」

「普段はあそこまで積極的じゃないんだけどねえ……」

「そういうあんたはやる気なさそうだね」

「眠いつす」

「頑張りな」

「うつす」

奏に背中を叩かれて背筋を伸ばしたクルヴィスが大きく息を吸い込み、気合を入れ直して——ふと、妙な気配を察した。視線を向ければ、月夜の下、高層ビルの一点の空気が歪んで見えた。それは気の所為と見過ごすにはあまりに不穏な気配として、クルヴィスに警鐘を鳴らす。

「奏。響ちゃんを追って」

「どうしたのさ」

「ちよつと野暮用？」

「ま、いいけどさ。後でちゃんと追ってきなよ？」

「はいよ」

響を追って奏も先を急ぎ、クルヴィスだけが月を見上げる。気配が消えて、歪んでいた空気は澄んだ風によってかき消されていた。——だが、と闇夜に目を凝らす。ノイズキャンセラーを待機形態に戻し、十文字槍を構える。二課のモニターは響の方へ集中していた。

「……………」

隠密、奇襲、闇討ち。考えうる騙し討ちの手は全て考慮している。そして、その奇襲の一撃をクルヴィスは難なく防いでみせた。十文字槍と火花を散らす、黒いデバイス。盾と一体化した複合機能のアームドデバイスの主は、また影から出てきたような漆黒だった。

《…………》

「はあいどうも、フレームデバイス一名様ご案内」

《ステルスしていたはずなのだが、防がれるとは意外だ》

「俺にそういう奇襲はやめといた方がいい」

むしろそつちのが本職と言ってもいい。

フレームデバイス、シャドウ。戦闘能力は未知数、左手を向けて、五指を開いている。その掌に覗く、一門。クルヴィスは即座に槍を引き戻しながら防御魔法を斜めに構えた。

単発の射撃魔法がバリアによって弾かれ、明後日の方向の街路樹の枝をへし折る。

《これも防ぐか。ますます良い経験値になりそうだ。貴様との戦闘。学ばせてもらうぞ、柳クルヴィス》

「お兄さん泣いちゃうぞちくしい」

どうして俺だけこんな貧乏クジ引かなきゃならないんだ。クルヴィスは半泣きになりながら二課で待機しているヴォルケンリッターの皆様方に救援を要請した。

自分が相手にしている、ということは先行した二人の下には――。

その様子をモニタリングしていたのは、二課だけではなかった。町外れの邸宅で自作のケーキを頬張りながら、マスターとルナリアの二人がシャドウ達の動きを見ている。

「新作、どうだ」

「…………」

ルナリアは無言で口に入れると、親指を立ててフォークを刺した。

「あの狐にーちゃんじゃねえか。さて、お手並み拝見、と」

「…………」



ちらりとモニターを盗み見て、それからルナリアは再びケーキを食べる。気に入ったらしい。シャドウとクルヴィスのことなど気にならないくらいに。

「響ッ！」

「奏さん」

「一人であんまり突っ走るものじゃないよ。とはいっても、あたしも昔は似たようなものか」

「は、はい。すいませんでした……！」

ブドウノイズを撃破した響が、ようやく我に返って追いかけてきた奏と合流する。周囲を見渡すと、クルヴィスとは離れてしまったようだ。シンフォギアをまもっているのを忘れてしまうが、自分の身体能力は普段よりも遥かに強化されている。それこそ管理局の魔導士に引けをとらないほど。

「あ……」

「ん？　どうかしたのかい？」

響が見上げた空。約束したのは、親友との流星群。奏も釣られて見上げた夜空に流れる星天は見惚れる程に幻想的で、それを同じガングニール装者である響と見れたのは僥倖と言えた。こんな機会、きつと二度とない。

「……奏さん。私、今日親友と流星群を見ようって約束していたんです」

「そうか……それは、残念だったね。ノイズが出てなければ今頃、あたしじゃなくてその大事な親友と見れてたんだろ？」

「あ、違うんです！　別に奏さんと見れるのが嫌なわけじゃなくて、すごく嬉しくて、ツヴァイウイングのファンで、あの、えつと……」

「あつはつは、ありがとう。二年前のライブ、どうだった？」

「はいッ！　最高でした！　ドキドキして、胸に響いて——！」

響は、そこまで言葉にしてから、自分の胸に手を当てた。奏のガングニールの破片が、今。この胸の中に眠っている。

「……今も、此処にあります」

「……ごめん、響。あたしはあんたに謝らなきゃな。あの日、あたしが  
紛い物だったばっかりにそんな苦勞を押しつけて……」

「そんなこと、全然ありませんッ！ 奏さんのシンフォギアがあった  
から、私は今日もこうして生きていられます。奏さんの歌があつ  
たから、私はッ！」

「だけどッ！」

ガングニールがなければ、親友との約束も守れた。響はこんな戦い  
に身を投じなくてよかったはずだ。どうしても、二年前の惨劇が脳裏  
にちらついて仕方ない。

「——仲良しこよしは、そこまでだ」

「誰だッ！」

奏が振り向いた先、姿を現した相手を見て、絶句した。

身にまとう白銀のドラゴンスケイル。完全聖遺物——それは、二年  
前、起動に失敗したはずのネフシュタンの鎧。

「その、鎧は……！」

「立花響。アタシと来てもらうぞ。そっちの病み上がりは引ッ込んで  
な！」

「そうはさせるか！ 響、どうやらあんたが狙いらしい。アタシに任  
せて下がってなッ！ その鎧を何処で手に入れた！」

「ヘッ！ そう簡単に口開くと思うなよ！」

「ノイズが……!?!」

ネフシュタンの鎧を纏った少女の手。ソロモンの杖によって無数  
のノイズが召喚される。囲まれる二人が背中を合わせてガングニ  
ールを構えた。

《翼、緊急事態だッ！ 奏と響くんの下へ急げ！》

「分かっていきます！」

《現在、クルヴィスはシャドウと交戦中だ！ 恐らく身動きは取れま  
い、なのはくん達をこちらから攻撃させたが、お前の方が早い！》

（奏——！ 無理だけはしないで！）

先を急ぐ翼が聖詠と共に駆け出し、天羽々斬を身にまとう。だが――

―圧倒的に速いバイクのエンジン音に、視線を奪われた。空を走り、月を背負う騎兵の姿。その手には二挺拳銃。

《迷いは捨ててきたか、風鳴翼!》

「またしても邪魔立てするか、騎兵ツ!」

《今夜は誰にも邪魔はさせない、存分に征くぞツ!!》

剣戟と共に疾走する銃弾が弾き落とされ、翼が着地する。その眼前には騎兵が立ちほだかる。

睨み合う銃口と一刀。

——クルヴィスとシャドウの戦闘。ネフシユタンの鎧、そして奏と響。ライダーと翼による交戦。同時進行する戦況の目まぐるしさに二課のオペレーター達が多忙を極めている。

「しかし、クルヴィス……大丈夫か、あれは？」

「いやあ時間稼ぎにしかならないかと」

シャドウの戦闘能力は、全体的に高水準にまとめられているようだ。接近戦では右腕の複合型アームドデバイスによる攻防一体の戦闘スタイル。左腕は射撃機構が付いているようで、クルヴィスはそれに苦戦していた。攻めあぐねているという状態だが、それは相手も同じこと。勝負を引き伸ばしている、というような状況。

（しかし、クルヴィスさん……こうしてみると本当に白兵戦は凄いな）

十文字槍の穂先で防ぎ、鎌首で足元を引つ掛けながら鉄山靠——中国武術を交えた槍術は、シールドバツシユで身体の保護も兼ねている。相手の隙を突く、堅実な戦闘スタイル。しかし、クルヴィスが幻術を用いずに戦うということは、それだけ素の実力で相手しなければならぬ程の余裕がないことも示唆している。

少なくとも見積もって、シャドウの魔導師ランクは陸戦Aランクに値する。

「奏と響くんはッ!?!」

「ノイズ反応、多数出現! ネフシユタンの鎧と奏さんが交戦中。しかし、LINKERの残り時間も……」

「くそ……!」

歯噛みする弦十郎。戦況は、五分であるが時間が経つにつれて不利になっていく。ヴォルケンリッターの到着まで持ちこたえられるだろうか。

「ハアアアアーツ!!」

翼の蒼の一閃。だが、大ぶりの攻撃がライダーに当たるはずもなく、かすり傷一つつけないことなく回避される。二挺から放たれる怒涛の連射も、翼の巧みな剣捌きによって全て弾き落とされていた。

——疾い。そして、強い。互いの内にある感想が一致する。歯噛みする翼に対して、ライダーはエンジンの唸りをますます歓喜に染めていた。

《ああ、良いなツ！ お前との戦い、実に心躍るものだツ！》

「それはこちらも同じことツ！ だが今はお前の相手をしている余裕がない！」

《つまりらぬ些末など捨て置けと言ったはずだがな》

——つまりらぬことではない。些細な事でもない。今行かなければ間に合わない。だからこそ、もつと速く、より疾く、誰よりも強く。二年前の悲劇を繰り返さない為に、戦い続けてきた。

それなのに、造り物の対敵一人すら越えられない壁となって立ちただかる。

シンフォギア。対ノイズプロテクター。FG式回天特機装束。それは、世界を襲う認定特異災害の為に開発された兵器。しかし、対敵はノイズではない。人間を襲うだけの兵器ではない。

知能がある、思考する。手段を選ぶ。機械であってもなお、限りなく人間に近い。

「つまりらぬことではない！ 私は、奏を——！」

《ふん、地に足を降ろさぬ羽撃きがどれほど愚かかまだ分からん見えるツ！》

「なんだとツ!？」

《足元が疎かだぞ、風鳴翼!》

着地の間際、ライダーが乗り捨てたソニックウインドが翼の身体を撥ねる。天羽々斬でなんとか防ぎはしたが、大きく体勢を崩した。そこへ、強烈な蹴撃が襲い掛かる。

——あろうことかソニックウインドがジャックナイフで後輪を横から叩きつけたのだ。完全なる不意を突かれ、翼が地面を転がる。

「くツ!？」

《大空に羽撃き——お前はどこに降りるつもりだ》

「な、に？」

《羽撃き続ける鳥などいない。地に降り、羽を休めるなど雛ですら学ぶことだ。それすら知らず戦い続けてきたのか。酷使し続けてきた翼など、見るに堪えん》

息が詰まり、返す言葉が喉で止まった。足元がおぼつかず、平衡感覚が失われていく。

「……黙、れ。黙れ！ 黙れッ！ 機械人形にながわかれるというんだッ！ 私のこの気持が、思いがッ！ 私は防人として」

そう、常在戦場。この身は剣として生まれてきた。絞り出した言葉は、否定の一つ。

《それが過ちであったと気付くのは、落ちてからだ。お前は強かったのだろう、それを学ばなかったのだから》

そうだ。そうだとも——天羽々斬を固く握り、整息する。風鳴翼は、常在戦場の剣としてッ！

《羽を休めろ、それが出来ぬのならば、お前はいつか墜ちて死を迎えるだけだ》

ソニックウインドに跨ったライダーから魔力が放出される。それは魔導機関部を通り、内部で燃焼させられて爆発的な加速力へと変換された。魔力による純粹な加速は大型二輪型アームドデバイスという大質量を「撃ち出す」には十分過ぎる破壊力を生み出した。

避けようとする、二課からも魔力反応が確認された時点で回避を命じられた——だが、それよりも圧倒的に速い。速すぎる疾走は、音の壁すら超えていた。

《超えてみる、俺達の最大戦速ッ！》

風を越え、音を越え、暴風を置き去りにした絶対的速度優位によるスピードの暴力。疾走する蒼軀——ペイルライダー。蒼き奔流に為す術もなく撥ね飛ばされた翼は宙を舞い、受け身すら取れずに地面へと墜落した。

（私は——、敗れるというのか……この手で、守れずに……ッ！）

朦朧とする意識の中、まだ闘志が胸の中でくすぶり続ける。だが、

シンフォギアを纏うだけの力は残されておらず、自動的に解除された。立ち上がろうとする翼だが、身体に力が入らない。

ふと、思い出される言葉。脳内でリフレインするのは、二年前のライブ。その時、天羽奏はなんと言っていただろう——？

「真面目が過ぎるぞ、翼——」

「——、ッ……………!!」

そうか……。翼はようやく、言葉の意味を理解した。いつか折れる日が来る——、それが今日だっただけの話。二年前のあの日から続けてきた風鳴翼の戦いは、無為に帰した。

目から涙が溢れてくる。この身は剣なれど、人の情に満ちている。堪えきれない悔しさが胸から込み上げてくる。抑えきれない嗚咽が喉から漏れた。騎兵はただ、佇むだけである。シンフォギアのない翼を仕留めるのは容易だが、両足に銃を収納していた。

《貴様の羽撃き、その先で俺は待つ。いつか俺に歌を届けに来い、風鳴翼》

返す言葉はない、だが——必ず。必ずだ。遠くない日に、騎兵よ。防人の歌を聞くが良い。

何故なら、ツヴァイウィングは、これより再び舞い上がるのだから——ッ！

「おらあああ——ッ！」

奏の GANG ニールがネフシユタンの鎧を纏う少女と火花を散らす。だが、相手は笑みを浮かべて余裕綽々といった様子で挑発していた。

「ハッ、所詮は病み上がりってか。この程度ッ！」

「ちいっ！ 響、大丈夫か！」

「は、はい！ こっちはなんとか！ てやああッ！」

（響もノイズに囲まれてるってのに、クソ！ ネフシユタンの鎧まで！）

イラつきながら奏が GANG ニールを振るう。しかし、ネフシユタンの鎧から生えている二本の鞭が絡み取り、奏の身体が放り投げられた。

「奏さん！」

「クソツッ！ あたしは大丈夫だ！」

「時限式だっつてんならこっちから相手するまでもねえ。アンタのファンを大勢呼んでやるよ！」

ソロモンの杖をかざし、奏の周囲に無数のノイズを呼び出す。分断された二人がノイズを相手にする形になり、ネフシユタンの鎧をまとう少女は響に向けて歩み出していた。

（こんな時にクルヴィスの野郎はなにを——いいや、頼るな！ アタシのガングニールで、今度こそ響を守らなくてどうするツッ！ 気合を入れてけ、天羽奏！）

だが、時限式であることに変わりはない。早急に片付けなければ——そう思っていた矢先、森の中を突っ切つて、なにかが吹っ飛んできた。

それは、地面を転がるかに思えたが、よく見れば手に十文字槍を持っており、受け身を取って地面を滑りながら体勢を整える。ネフシユタンの鎧をまとった少女も、奏も、響も啞然としていた。

「どうも、シャドウにぶっ飛ばされてここまできました、柳クルヴィスですッ！ なんでしょうね、今日は。厄日かな！」

空気と霧囲気をぶち壊しにしながらにこやかに手を挙げるクルヴィスの服は、確かに戦闘の痕跡が残っていた。そうなれば、シャドウの相手は誰が……？

《……………》

クルヴィスに見舞った、反射魔法プログラム《リフレクトラウンド》による蹴り。それによって冗談のような距離を蹴り飛ばしてしまった。しかし、だ。まさかそれを利用して戦線を離脱するなど誰が計算できようか。

シャドウが後ろを振り向けば、入れ替わるように降り立つヴォルケンリッターの面々。そちらもそのような手段で奏達の援護に向かうとは思ってなかったのか、なんとも言えない面持ちで武器を構えていた。



「……なんというか、食べない男だ」

「まあ、あんなヤローがいたんじやこつちもおちおち戦ってらんねーしな。やるぞ、シグナム」

「ああ。フレイムデバイス、相手に不足はない」

《それはこちらと同じこと。守護騎士、ヴォルケンリッターのシグナム。並びにヴィータ。トリックスターよりも学ばせてくれるのだからな》

「敗北の二文字ならばな」

シグナムが不敵な笑みを浮かべてレヴァンティンの切っ先をシャドウへ突きつける。

——クルヴィスは状況を確認し、劣勢であることを認めた。奏の戦闘時間は、残り五分もないだろう。響はともかくとして、翼は二課からの通信で戦闘不能だ。シャドウがヴォルケンリッターによって押さえられているが、可能なら初戦で撃破が望ましい。人工知能であるからこそその学習能力の早さは驚異的だ。だからこそ“本気”を出さなかったし“全力”も出さなかった。

「てんめえ、機械人形が相手してたんじゃないのか！ 木偶の坊め、足止め一つできやしないってのか！」

「や、それなら設計者に言ったほうがいいのでは？」

「黙っていやがれ！」

ネフシユタンの鎧から伸びる鞭をしならせてクルヴィスに振るう。完全聖遺物とは多少なりとも縁があるだけに、槍を持つ手に力が籠もる。絡め取られ、そのまま手から離れた槍が少女の近くに落ちた。

「へッ、得物が無けりやあ……」

「あるけど？」

「どこに、隠し持ってやがったあ！」

今度は両手で鞭を振り下ろし、クルヴィスはそれを同じように槍で防ぐと穂先を地面に突き刺して片手で押さえた。鎌首を足でしっかりと固定して、盗み見るのは最初に絡め取られたデバイス。

クルヴィスが左手を振って、これみよがしに指を鳴らす。

「んなッ!？」

魔力光と共に爆ぜたデバイスが、粉塵を巻き起こした。その隙に、クルヴィスが一気に接近する。相手が動こうとするが、槍に絡まった鞭を解くのにワンアクション遅れた。次いで、ソロモンの杖を構えるのに、ツーセクション。クルヴィスの接近を許し、拳が腹部を打つ。しかし、固い手応えに眉を寄せた。その為のドラゴンスケイル。防衛機能が無ければ嘘になる。

予想外の接近戦に相手も肝を冷やしたようだが、効果なしと見て口

端をつり上げ——大きく息を吐きながら構え直すクルヴィスに表情が強張った。

少なくとも、その目は奏達には見せたことがない表情をしている。無感情で、人を人と見なさない冷血に徹した瞳。俗っぽく言えば、殺意に溢れていた。

初撃は、バイザーに覆われた右目を狙った拳。次いで、返す手刀が顎を狙う。脳へのダメージ、つまりはネフシユタンではなく、生身の装者を狙った攻撃への即時切り替え。一切の慈悲無く繰り出されるインファイトだが、多少の衝撃が加えられただけで相手は体勢を崩す効果しか見受けられない。

「この、近えんだよー。離れやがれッ！」

「そうさせてもらおう」

右手に持ち、左手につがえ、構えるのはノイズキャンセラー。本来の用途から離れた、刺突。胸部を強く穿ち、ネフシユタンの鎧に阻まれて吹き飛ぶ。相手は歯噛みするものの、クルヴィスからすると決定打を与えられない自らの力量不足を再認識させられる。

「……平々凡々にや、荷が重いか」

手応えは十分、だが生身の戦闘ではあまりに分が悪い。その場から後退し、音速を超えた鞭の先端を避けながらデバイスを回収すると構え直す。整息し、響の様子を盗み見る。周囲には多数のノイズが残されていた。

ネフシユタンの鎧と互角に渡り合うクルヴィスの姿に、奏は啞然としている。

(完全聖遺物と、対等だったのか。魔導師つてのは！)

それも、クルヴィスですら管理局では劣等生のレットルを貼られている事実。それに比べて、シンフォギア装者の未熟さ。

「……へえ、やるじゃん。狐のにーちゃん」

マスターは転々とする戦況を見ながら感心していた。ノイズを相手に出来ないとはいえ、フレームデバイスを相手取り、今はクリスとやや不利な状況ではあるが対等に渡り合っている。だが数の不利は

覆せない。立花響の拉致は失敗だとマスターは早急に判断した。

「ま、予想の範疇と言いやそれだけだが。シャドウ、撤退だ。ライダー、クリスを連れて帰ってこい。バスター、後は任せた」

《何を言っている？ まだ戦闘は》

「いや、これ以上は撤退する暇もなくなる。急げよ。バスター、後は任せた」

命令を簡潔にまとめ、マスターは椅子の背もたれに体重を預ける。

《任務了解。作戦行動を開始する》

「ああ任せた。派手にやってやれ」

モニターを切り、身体を伸ばす。長時間椅子に座っているのは身体に悪い。

「さて、帰ってくるあいつらに飯でも用意してやるか。ルナリア、手伝ってくれるか？」

マスターの言葉に頷き、ルナリアもまた席を立つ。その手には一つのUSBメモリ。

「こつちの仕込みは、十分。後は手土産ついでに胃袋でも握ってやりや俺としてはクレイモアへの履歴書代わりになる。いやはや全く、どいつもこいつもちよれえこと」

「……」

「別に俺は世界征服とか企んじやいないし、何か目的があるわけでもない。ただ、自分がどうすれば儲かるか、稼げるか考えてるだけだ。喫茶店経営は趣味の一環、フィーネへの加担は仕事。なら俺のプライベートは、これぐらいの楽しみしか残ってないんだよ。だからな、ルナリア。そんな顔するな」

「――」

「ん、シャドウ達？ ああ大丈夫だ。問題ねえよ」

《――撤退命令だと？ しかし……いや、了解した》

ヴォルケンリッターと刃を交え、レヴァンティンによって大きく吹き飛んだシャドウヘグラーフアイゼンが横薙ぎに振るわれる。だが、防ぐように現れた幾何学模様のテンプレートを殴りつけた瞬間、逆に

ヴィータが吹っ飛ぶ。

「クソ、何なんだ今の!？」

《……インヒューレントスキル、リフレクトランダー》

「ISだと……? 戦闘機人ではないのにか」

《我々の設計段階において、最前提として設定された魔法プログラムをそう呼称しているだけのことだ。勝負は預けるぞ、ヴォルケンリツター》

リフレクトランダーの起動。反射魔法によって自らの身体を射出して上空に退避し、そのまま闇夜へと消えていく。

「……取り逃がしたか」

「ならさっさとひよっ子の援護に行くぞ、シグナム。クルヴィスの奴も気になる」

「そうだな。それに、ネフシユタンの鎧までもが出現したのだ。ここで確保するぞ」

「へっ、言われなくてもそのつもりだったの」

市街地での飛行は原則、本部からの許可が必要になる為、二人は急いで現場へと移動する。

クルヴィスがネフシユタンの鎧から響を守り、奏はノイズを圧倒した。

「おらああああーっ!!」

「チッ! 撤退だあ!! ここまでやっといてか、あたしはまだ失敗もなにもしてねーじゃねーか! 命令なんか聞けるかよー!」

ライダーが翼を抱え、響の近くで停まる。

「ッ——翼さん!？」

《気を失っているだけだ。確かに預けたぞ》

「えっ、あつ、はい」

《撤退命令を聞いただろう、ネフシユタン》

「ふざっけんな!」

《大真面目だ、撤収するぞ》

「くそ、くそッ! あたしはまだやれる!」

駄々をこねる少女に、ライダーは肩をすくめた。だが、命令である

以上は従う他にない。相手方の戦力も集まってきた。このまま自分が無傷で戦闘領域から離脱できるか否か。

《乗れ、ネフシユタン。このままでは巻き込まれるぞ》

「ッ——！・勝負は、預けてやる！ 今回だけだ！ 次はねえぞ！」

言われた通りに、仕方なく後部座席に乗り込んだ少女とライダーがその場から離脱しようとする。しかし、それを許すようなヴォルケンリッターと奏ではなかった。

「あたしの大事な片翼に傷を負わせてくれたんだ、礼を返してやらなくちゃ腹の虫が収まらないってもんだ！」

「そういうことだ。見過ごすんでも？」

《……、到着が遅いぞ。ノロマめ》

横たえた翼の様子を案じていた響が、僅かな地面の揺れを感じ取る。それは徐々に大きくなっていき、最初こそ地震かとも思ったが勘違いだった。震源の主は、街路樹をなぎ倒しながら真っ直ぐに戦場へと突貫してくる。

その巨体、巨軀にして三メートル弱。見上げるほどの鋼鉄の人型。最重量にして全身武装の砲兵は、停止すると魔力反応から敵を割り出した。

《殿は引き受けた。撤退を推奨する、騎兵》

《了解。任せたぞ砲兵》

陸戦軌道兵装グランドマニユーバによる地面を引剥しながらの走行、背部に携えた二挺の大型ライフルを展開し、両腕部に固定。照準を合わせる。

《目標確認。レヴァンティン。グラーフアイゼン。ガングニール二名。トリックスター》

「……まずいぞ、ヴィーター！」

「わかってる！」

《交戦、開始——》

肩部展開。バスターの周囲に浮かぶミッドチルダ式魔法陣の総数、二十四門——。

その全てが、魔力光を発射した。高速直射、高速誘導の弾丸を

ヴィータが大半を防ぎ、シグナムが響のカバーに入る。奏とクルヴィスはどうか避けたが、奏はそのまま体勢を立て直し、バスターへと走る。

しかし、ガングニールがバスターの身体へと当たるとはなかった。関節部に仕込まれていた防御用大型カートリッジを排出し、『ヴァリアントプロテクション』が起動したからだ。

「防御魔法……!?!」

「奏ッ！」

バスターの前腕部に浮かぶ魔法陣から、魔力光が散弾のように発射される。それを辛うじて防いだのは、クルヴィスが寸での所で間に割って入れたプロテクション。しかし衝撃までも防げたわけではなく痺れる痛みに顔を歪めていた。

奏を支えながら後ずさりして、デバイスに亀裂が走っている。

「なんなんだあの要塞みてえなバケモン！ あれもフレームデバイスだったのか！」

「恐らくはそうだろう！ しかし、くッ！ これでは、近づけないな……！」

周囲への被害を鑑みない射撃魔法による固定砲台。シグナムもヴィータも反撃に転じてみるが、やはり関節部のプロテクションによって阻まれる。

二挺の銃口を合わせ、正面に展開する大型魔法陣。それにサツと青ざめる、推定出力にしてSランク砲撃——シグナムとヴィータならまだしも、響達がいる。

「あれはヤベエぞ、シグナムッ！」

「ヴィータ、合わせろッ!!」

《ヴォルケイノカノン、発射》

砲撃制御の魔法陣が追加で二枚。それには二人も肝を冷やされた。だが、クルヴィスは奏を引き寄せ、自らの後ろへ。

「鏡花ッ！」

薄氷のガラス、幻術を応用させた防御魔法。追加で展開した三枚張り、砲撃を屈折させて自らの身体をプロテクションで保護する。チリ

ズリとした嫌な熱を逸らしながらクルヴィスは歯を食い縛っていた。自分の後ろには今、奏がいる。響も、翼もいる。ヴォルケンリツターの両名も防御に徹していた。

デバイスに走る亀裂が徐々に大きくひび割れていく。そして、クルヴィスの手元で無名は爆散した。だが、その衝撃も加わって照射されていた砲撃は収束していき、ビルを二棟ほど倒壊させて砲身が排熱を行う。

「——ツカ、野郎ツ！ 何してんだクルヴィスツ!!!」

「いいっ……てええ……!」

「……こちらの損害も無視できない。ヴィータ、こちらも退くぞ!」

「チツ、仕方ねえか。今回は痛み分けた、目え閉じてろ!」

負傷者が二名、それも決して軽傷とは言い難い状態を重く見たシグナムが早急に撤退を判断した。ヴィータもそれに不満をもらしながらも納得し、手元に衝撃弾を生成すると、ハンマーを振り上げる。奏も響も言われた通りに目を閉じた。

「アイゼンゲホイル!」

バスターの網膜ユニット、ならびに索敵機能が一時的なジャミングを食らいヴァリアントプロテクションによって一時的に防御へと徹する。

機能回復と共に周辺の索敵を行うが、そこは既に無人と化していた。残されたバスターは作戦終了と判断して、その場から離脱を開始する。



Tr. 21 一夜を明かし、変わらぬ日々へ

激動の一夜だった。二課には沈痛な重さが司令部を包み、弦十郎が顔を赤くしている。

(三体目のフレームデバイスの出現による、我々の敗北か……ネフシュタンの鎧の出現だけでなく、翼も……)

目眩すら覚える激動に次ぐ激闘に、目頭を押さえた。

「了子くん、どう思う」

「そうね、さすがにこれ以上は打ち止めであると信じたいところ。強襲機、指揮官機、砲兵と隙がないわ。加えて、ネフシュタンの鎧。ノイズは人間だけを殺す兵器だものん」

「シンフォギア装者だけでは手に余る、か……」

これ以上は、管理局の援護が必要になる。戦闘支援だけでなく技術的なものも含めて。しかしその台頭に立つ柳クルヴィス三等陸佐は戦闘で負傷した。急ぎ、搬送されている。だが、運が良かったと言わべきか、目立った負傷者はクルヴィス一人だけだ。

翼は、大型二輪に轢かれておきながら身体的損傷がほとんど見受けられない。というのも、ライダーが魔力を非殺傷設定にしていたからだ。味な真似をしてくれる、だがそれでも翼が現在意識不明の重体とされているのは、度重なる過労と心労と、シヨックによるものだ。目を覚ませばきつと、以前よりも鍛えられた剣となって戻ってくると信じて今は待つしかない。

「くそッ！ クソッ！ くそおッ！」

奏は戻ってきてから荒れていた。何度も壁に拳を打ちつけて、歯を食いしばる。ようやく舞い戻った戦場で、自分は何一つ守れなかった。絶唱すら覚悟していたが、それすらあの鋼鉄の巨軀を前に躊躇ってしまった自分があることが何よりも。

シグナムとヴィータも押し黙っている。

「気持ちにはわかる。だが、今は落ち着いて待つしかない」

「クルヴィスのやつなら大丈夫だ。シャマルが手当してるからな」

「そつちのことは心配なんかしてねえ！ あいつはあたしのマネー  
ジャーだ！ こんな根性なしで務まつてたまるか！」

守られてしまった。その不甲斐なさもある。だが、デバイスは破壊された。管理局のデバイスは専用の物が多いと聞いている。

「それで、管理局の専門家から見たあのデカブツはどう思う？」

「外観から察する強固な装甲。そしてあの防御機構。更には制圧力。引き換えに、機動力は皆無に等しい。高町教導官の砲撃とヴィータの防御を兼ね備えたフレームデバイスと見た」

「嬉しくねーけどな。アタシのアイゼンで潰せるかどうかも怪しいところだ」

らしくもない弱音に、シグナムが眉を寄せた。

「鉄槌の騎士の名が泣くぞ」

「あのシールド見たじゃねーかよ。関節部のカートリッジ四つ。一枚一枚が並の防御力じゃなかった。そんなの四枚同時展開とかされたらひとたまりもねーよ」

「確かに、そうか。そうになると、対抗策は収束魔法くらいか」

収束魔法<sup>ブレイカー</sup>。魔力の残滓を収束させて放つ一撃。なのはのスターライトブレイカーがそれに該当する。しかし、そんな余裕など相手が与えてくれるはずもない。

「……結局、今のあたしじゃ何も出来ないってか」

「そうとは言っていない。思つてすらいない」

「だな」

「だったら——」

「互いの欠点を補い合う。チームワークとはそういうものだ」

シグナムの言葉に、奏は何も言い返せなかった。そのとおりだ。翼は今まで独りで戦ってきた。だが、それは間違いだ。今は二課だけがノイズと戦っているわけではない。時空管理局も共に戦うと言つていたので。ノイズとフレームデバイス、その両者を相手する為に。

シャマルが治療を終えて医務室から出てくると、早速奏がクルヴィスの容態を訪ねた。

「どうなんだ、クルヴィスのやつは」

「安心して。爆発自体は魔力によるものだったから命に別状はないわ」

「本当か!」

「ただ、それでも怪我をしたのは事実だから。治療もすぐには出来るけど——」

どこか歯切れの悪いシャマルが視線を逸らしていると、クルヴィスが出て来る。右目に眼帯、額と右手には包帯を巻いていた。どう見ても重体だ。

「あらまあお揃いで」

「クルヴィス! 大丈夫なのか!?!」

「派手な爆発だったけど、命に別状なし。ま、派手に火傷したもんだと思えば」

「馬鹿野郎ツ! なんだってそんな無茶して——!」

「ああしなきや全滅必至だったからだけど?」

ただ、クルヴィスから言わせてもらえば自分の手の内を次から次へと明かさなければならぬほどの窮地に陥っているので勘弁願いたい。

(デバイスも壊れたし、修復は不可能。予算から差っ引いて新しく用意するか……予備は取ってあるけど、どこしまったっけな)

というかそもそもにして、自宅に戻っていなかった。二課の仮眠室に入り浸っている毎日で、荷物を運んでそのままだった気がする。はて、どこに置いたっけ?

「とにかく、相手方の追加戦力も解析進めないとあかんわけですよ。フレームデバイスの解析は俺のお仕事ですし?」

「そんなの了子さんに任せ」

「無理」

「え?」

「いやあ、だって管理局の事案なわけで二課の学者先生に任せるのはお門違いと言いますか。俺らの管轄と言いますか」

管理局だけに。とまでは言えなかった。奏はそれに納得のいかな

い顔をしていたが、クルヴィスは櫻井了子を嫌悪している。それは決して他人には明かさない形で。

「片手でやれるのか？」

「俺の上司なら片腕一本吹き飛んでもやります。これぐらい朝飯前ですよ」

とはいえ、戦線離脱は免れられない。今の自分では足手まといがいどころだ。

「いらっしやー、なんだアンタか」

「はは、客にすげえ口聞いているわこの店主さん……」

「退院祝い用のケーキ注文しといて、なんだアンタその怪我は」

「いやー、階段から派手にすっ転びましてね？ 顔からいきまして」

「芸人かよ」

「アドリブでーす」

アホなやり取りを隣で見ていたルナリアが口元をトレイで隠している。どうやら笑っているようだ。

「ま、ちようどよかった。少し店を閉めようと思つてたところだ」

「おや、それはまた急に」

「ちよつとした小旅行でね。ホイ、注文の品」

そう言いながら、マスターは退院祝いのケーキやら何やら、ともかく甘味詰め合わせ致死量カロリーの暴力をクルヴィスに手渡す。

「ちなみに、どちらまで？」

「海越えた国まで。雑誌で面白い情報を仕入れたもんでね」

「ほほう」

「世界万国珍妙奇々怪々デザートフェスティバル」

やべえ、超行きてえ。クルヴィスはポケットから財布を取り出しながら、えらく興味を惹かれていた。今すぐ有給申請してでも行つてみたい。現地の宿とかそういう細かい事は当日決めるから。

「ま、まあお気をつけて行つてらっしやい」

「はいよ、ありがとさん。一週間くらいは店を空けるんで、次のご来店

をお待ちしております」  
クルヴィスは抱えるほどの退院祝いを車に積み込むと、喫茶店よろ  
づを後にした。

Tr. 22 緋翼、降臨

米國連邦聖遺物研究機関――。

向かい合うソファーに浅く腰を落ち着かせ、気だるそうにしているにもかかわらず、その場にいる全てを威圧していた。目の前のローテーブルに置かれているホットコーヒーに手をつける様子もなく、天井を見上げている。

白い部屋、白い天井。白衣の職員。辟易するほどの白さに包まれた室内において、男の存在はあまりにどす黒く浮いていた。

「……………」

暇を持て余している男に、声を掛けるべきか否か。周囲の職員も戸惑っていた。

「退屈だな、地球ってのは」

ポツリと呟く。その言葉に、思わず身構える。

「フェレン」

「お呼びか、グレイ」

名前を呼ばれた男は、興味深そうに眺めていた書類から目を離して視線を投げる。閉じられた左目は決して開かれることはない。この状況下において、清涼剤のような人物だった。

「ちよいとニッポンに行ってきたくねえか」

「いいのかい、こっちは手薄になるぜ？」

「構わねえよ。俺一人で十分だ」

自身満々に言っただけのグレイ・ヴァン・デューメントは不敵な笑みを浮かべている。それにフェレン・ファルツは嫌味もなく鼻で笑う。赤の後ろに流したショートヘアをかき上げながら、右手のブレスレットを一瞥する。

「ちなみに、命令は？」

「二課と管理局に発破かけてこい。お互いだんまり決め込んで動かないようじゃ、俺がつまらねえ」

「ハハハ、アンタらしい！ 俺の心配はしてくれねえか！」

「するわけがあねえだろ。とっ捕まるのは勝手だがな」

「ひっでえなあアンタ！」

部屋に響き渡る笑い声。気さくな雑談、談笑。だが、騙されることなかれ。フェレン・ファルツは次元犯罪者であり、同時にクレイモアの共謀者でもある。

ひとしきり笑いあってから、フェレンは踵を返した。

「んじゃ、いっちょ派手にやってくる。寝て待ってな、団長」

「テメエに団長呼ばわりされたかあねえよ。本気だすんじゃねえぞ、フェレン」

「ハッハッハ！ 俺に死ねるか！」

フェレンが退室してから、グレイは欠伸を漏らす。

デューメント一族にとって、地球はあまりに窮屈で、退屈な場所だった。——平和と自分の相性は最悪だ。劣悪を極めていることを再認識する。

「シグナムさんと、ヴィータちゃんの二人で太刀打ちできない砲撃型フレームデバイス……」

「ああ。その出現によつて、今回は痛み分けという結果になった。クルヴィスは負傷、翼までもが現在は意識不明の重体だ。そこで、今回の結果を踏まえて二課ではより管理局との連携が必須になってきた。今までよりも踏み込んだ協力を仰ぎたい」

「なのはちゃんからは今までも対違法魔導師の訓練を手ほどきしてもらってたんだけど、より実戦に向けた訓練をお願いしたいの」

「そうですね。そういうことなら協力は惜しみません。任せて下さい」

「すまない。我々の力不足で」

「そんなことありません。翼ちゃんだけに特異災害を相手させていた私達にも責任はあります」

管理局側の監督不足であることをなのはが認め、頭を下げる。しか

し、弦十郎はそれを否定した。それはこちらも同じことだ、と。奏が退院して戦線復帰しているとはいえ、病み上がりにはそれは酷というものだ。

「しかし、今回の件で響くんがより協力的になったというのは怪我の功名と言うべきか……」

自らの無力さを嘆き、弟子入りを志願してきた時は驚いている。

とはいえ、管理局側の戦力に頼らざるを得ない。響も奏も関係は良好だ。今は二人とも日常生活を楽しんでいる。

このまま何事もなければいいのだが――。

都心から外れた、海鳴町の喫茶店。翠屋は相変わらずの盛況だった。その店に足を運ぶ一人の男性客。

「いらつしやいませー、お一人様ですか？」

「ああ、禁煙席で頼みますよ」

「では、こちらへどうぞ」

会釈をして、案内された席へと腰を下ろす男性客は、見かけない顔だった。閉じられた左目。隻眼でメニュー表を眺めている。アシンメトリーデザインの黒のジャケットを羽織り、ラフな格好をしていた。しかし、なのはには何処か違和感を覚える客人である。

(気にし過ぎかな?)

「ああ、すいません。いいですか」

「はい」

「なにか、オススメとかありません？ 恥ずかしいことに、喫茶店に立ち寄るのは初めてなもので」

「そうだったんですか」

照れくさそうに笑みを浮かべながら、なのはがオススメを教える、それにすんなりと頷いて注文をしてくれた。

それから時間を置いて、品物をテーブルに並べると嬉しそうに眺める。

「美味そうですね。ありがとうございます」

「いえいえ。ごゆっくりどうぞ」



「それじゃ、いただきます」

一口食べて、舌鼓。気に入ったのか幸せそうな表情でパクパクと頬張っていく。

食後のコーヒーで一服。満足した様子で余韻を楽しんでいた。

「いやあ、美味しかった。こんな美味しいものを食べたのは久しぶりだ」  
「気に入っていただけましたか」

「ええ、もちろん。実は友人からの口コミで」

「そうだったんですか。いやあ、なんだか嬉しいです」

「遥々と海を越えて来たんです。ニッポンに来たのなら立ち寄ってくれとまで言われて」

「海外から！ 凄いですね。お仕事の方は」

「いや人に言うほどのことは。ハハハ！」

爽快に笑う相手に、なのはが警戒心を解していく。時計を見て、男性客が立ち上がった。

「おっと、そろそろ時間が。会計いいですか」

「はい」

「これから都心に向かわなきゃならないんですよ。駅までの道は……」

道を教えてもらおうと、心地よいお礼を述べて翠屋を後にする。

まさか海外から海鳴町に来てまで翠屋で食事をしていく客がいるとは思いもしなかった。

——翠屋を後にして、電車に乗り込んだフェレン・ファルツは腰を落ち着かせる。実に上等だった。あれほどのものを口にしたのはいつ以来か。

都心に向かって揺られる身体、徐々に近づいてくる目的地に目を細める。

「……所詮、俺あただの違法魔導士だ。歯牙にもかけないってか」

名前が売れているわけでもなければ顔が割れているわけでもない。高町なのはは自分に気が付かなかった。不屈のエースであるならば、生涯ただ一度の全力勝負ができた確信があっただけにフェレンは落

胆している。

駅の改札を抜けて、歩く。目標は二課。襲撃から日も浅い今のうちなら、戦力も少ないはずだが、グレイの目的が分からない。こちらが不利になるしかないというのに。いや、それが目的かもしれない。

そして、フェレンは道に迷った。

「やっべえなー、オイ。どこだよここ……ニッポンこえーわ」

道は合っていた。そのはずだ。だが気がついたら地図と違うアーケード街に出てしまっている。騒ぎのひとつでも、とさえ思った。しかし、無関係の人々を巻き込むのは良しとしない。ひとまず落ち着こうと自販機で買ったジュースを片手に、ベンチへ腰を下ろした。

「……読めねえ」

フェレンを襲う日本地図の恐怖。情報過密、活字の密林。困った様子で睨み合っていると、声を掛けられた。

「あのーお困りでしょうかー?」

「ん? ああ、すごく困ってる」

「それでしたら! わたしが力になりましょう! わたし、立花響です」

「フェレン・ファルツだ。よろしくな」

シンフォギア装者――、報告に聞いていた GANG ニールの……。フェレンは思わぬ幸運を、顔に出さなかった。

「……立花、響」

「はい?」

「いや、ハハ。俺は運が良いな。実は、君に用があつたんだ」

というよりは、二課か管理局の魔導師であればよかった。ポカンと間の抜けた口を開けている響が目を丸くしている。

「わたしに?」

「ああ。海を越えてね。お願いがあるんだ」

「はい」

「俺と戦ってくれるかい」

「……はい?」

素っ頓狂な声を挙げて、立花響は立ち尽くした。それを否定するよ

うにフェレンは手を振る。

「いや失礼。改めて自己紹介だ。俺はフェレン・ファルツ。クレイモア協力者だ。お手柔らかなにな、ガングニールちゃん」

「——戦う前に、話し合いませんか。事情があると思います」

「ハツハツハ！ いや、ごめんな。気持ち嬉しいよ。ありがたく受け取るさ。だが、話し合いに応じるつもりはない。なに、心配すんな。命のやり取りじゃあない。早い話が——」

フェレンが右手で拳を作る。三連のブレスレットが揺れていた。

「こいつを、試したいのさ。シンフォギアってやつだな」

——きつと、戦う理由なんてない。響は戸惑いながら構える。フェレンと名乗った男性からは敵意のようなものを感じなかった。威圧感も、それどころか恐怖すら煽る雰囲気など微塵も感じられない。そういう人だ。ただ明確なのは、内に秘めた覚悟と闘志。

人払いの結界魔法。二課に観測されることは理解した上での、周囲の被害を考慮した気配り。

「なに、礼儀ってやつさ。いくぜ、ガル」

「……炎の、羽？」

「綺麗だろう？ 火傷するぜ」

緋色の片羽を広げて、フェレン・ファルツはアームドデバイス『ガルーダ』を展開する。右腕を覆う甲冑、左右非対称のバリアジャケットを纏ってラフに構えた。左手はポケットに入れて、右腕はだらりと垂らす。

「なに、すぐ他のが助けに来てくれるんだろう？ なら、それまでちょっと腕試しだ！ 行くぜえ！」

「ッ!!」

炎の羽を振り上げて、大きく振り下ろした。跳んで避ける響が立っていた地面がドロリと溶けていく。直撃を受ければひとたまりもない。改めて身構える。

（わたしだって、やれる——!）

駆け出し、拳を突き出す。それを右手で受け止め、フェレンは身体を引きながら響を投げた。

「うわあ!？」

空中で姿勢を直し、地面に着地する。

「大丈夫かー。ほら、構えろ」

「は、はい！」

「いい気合だ。そおらあー！」

今度は大きく薙ぎ払う形で。火の粉を散らしながら迫る炎の羽を

屈んで避ける。それが戻るまでの間に、切迫して蹴り上げる。

「てやあああッ！」

「つとお！ はは、悪くないな！ 見込みありだ！ ひよっ子と思っ  
てたが中々じゃないか！」

笑いながらフェレンは響の攻撃を受け、捌き、防いでは反撃を繰り返していた。余裕を見せた攻防ではあるが、響も相手の胸を借りるつもりで全力で打ち込んでいく。それにますます気を良くしたのか、笑みを絶やささない。

「どうしてッ！ そんなに楽しそうにしているんです、かッ!？」

「なんでってそりゃあ！ おっと。楽しいからさ！ 年頃の若い女の子とスポーツ感覚なんてこの歳じゃ難しくてねッ！」

拳を掌と肘で受け止め、バリアで防ぐ。

「あの、本当にただの腕試しのつもりで？」

「最初に言っただろう。一言はない。だが、そろそろ時間だな。嗅ぎつけるのが早いこって」

呆れて肩をすくめると、首を鳴らしてフェレンは新たに構え直す。

結界魔法の中へと突入してくるのは、金色の雷光。フェイトはバル  
ドイツシュを振り下ろしてフェレンを響から引き離すと、庇うように  
立ちはだかる。

「響、大丈夫？」

「フェイトさん！ あの人」

「フェレン・ファルツ。広域次元犯罪者の一人。陸戦Aランクの、炎熱  
資質保有者」

「こりゃあどうも、フェイト・テストロツサ・ハラオウン執務官殿。ア  
ンタも中々どうして俺たちクレイモアにご縁のある御方だ」

「貴方がいるということとは、やっぱり」

「言うほどのことかい！」

炎の羽を広げ、打ち出される無数の飛礫。プロテクションで響を守  
りながらフェイトは、振り返る。

「ここは私に任せて」

「いえ、大丈夫です！ わたしもやれます！ やらせてください！」

「でも……」

「あの人、きつと良い人です」

間の抜けた顔をするフェイトだが、響は真剣な表情で言い放つ。

「まだ全然、ダメかもしれないけれど！ それでも、やれるだけやりますー！」

「……うん、わかった。私もサポートはするけれど、無理だけはしないでね、響」

「はいッ！」

呼吸を整える。フェイトがプロテクションを解除すると同時に、サイドへ回り込む。挟み撃ちの形で響が走る。

「つとと、こいつは俺もまずいな。悪いなあ、ハラオウン殿。アンタ相手じゃ全力は出せんよ」

ポケットにしまっていた左手を向けて、高速射撃《タスク・シュート》をフェイトへ、響の相手はあくまでも接近戦で。

「悪いな、ガングニールちゃん。オジサンの全力が見たかったら鍛え直してくれ。なに、若いつてのは強みだ。すぐ見違えるようになるさ」

「はい！ フェレンさん！」

「いい返事だ。それじゃあな！」

「待て！ クレイモアの目的は！」

「ハッハッハ！ 俺が知るところか？ まあ、何にせよこれで少しは危機感を抱いてくれよ管理局！ 俺達はいつだってその気になれば戦えるんだからな！」

爆炎を残して距離を取ったフェレンの足元に巨大な赤いミッド式魔法円。その輝きを増していく。

「それでは不躰で、失礼！ また会おうぜ！」

右手に携えたミッド式魔法円を打ち付けると、火打ち石のように魔力反応が膨れ上がり、結界もろとも爆散した。残されたのは吹き抜ける一陣の風。捕らえる暇もなく、逃げられた。

「相変わらず逃げ足の早い……」

悔しそうに呟くフェイトがバリアジャケットを解除する。響も同

様にガングニールを解き、胸を撫で下ろした。奇妙なことに、励まされた気がする。

「だけど、これでハッキリした。クレイモアは間違いなく地球に来て  
いる」

「それじゃあ——」

「私達でなんとかするしかない、のかな……」

しかし、フェレンの言葉が気になる。まるで、警鐘を鳴らしにでも来たかのような口ぶりだった。敵であるというのに、おかしな話だ。そもそもにして、フェレンという男はそういう掴みどころのない相手だった。敵対しているのは間違いない。それなのに、こちらに与するような動きをしてはすぐに姿を消す。そのせいで管理局もいいようにされていた。

「え、フェレン・ファルツ？ 厄介だなー、あの広域次元犯罪者もか」

「どういう人なんですか？」

「颯爽と現れては去っていく清涼剤のような人。不思議と敵に見えない」

「あ、そんな感じの人でした！」

「でしょー？ っていうかクレイモア関係者かよッ!？」

「バアン！ クルヴィスが机を叩く。反動で悶絶していた。痛そう。響は口にはしなかった。

「もうやだ、踏んだり蹴ったり傷口痛んだり……」

「なあに泣き言言ってるんだよ、あんたは」

「奏、超いてえ」

「男なんだから。メソメソすんな。ほら仕事しな」

「はい」

きつぱりと言い捨てられてクルヴィスは涙目になりながらデスクワークを再開する。

「しつつかし、クレイモアってのは随分と戦力あるんだね。そんなバンバン出してきた」

「創設者は二人。グレイと副団長のルード。それ以外はクレイモアの

協力者。次元犯罪者の温床で巣窟。一大次元犯罪組織として管理局にマークされてるってわけですよ。正面からやりあつたんじや絶対に勝てませんって」

しかし、地球になにしにきているのか。いまだ、その目的だけが分からないことが不安を煽っていた。

——夜の東京都心。フェレンは自販機で買ったジュースを一気に飲み干して身体を冷やす。

「~~~~、くあ~~~~！ たまんねえなー」

ゴミ箱に入れて、もう一本。手にしてプルタブを起こしてから、近づいてくる人影に気づく。

銀の髪。赤い瞳。黒のライダースーツ。クレイモア副団長。ルード・ヴァサリアが街灯に照らされて夜の闇に浮かび上がる。

「よお、総長殿」

「……何をしている」

「飲むか？」

「ああ」

二人でスポーツ飲料を飲み干す。

「なに、グレイからの命令だね。あちらさんにちよつかい出してきたのさ」

「……俺ではなく、お前にか」

「そりゃあ、総長殿は加減を知らない方でいらつしやいますし。死人を出されちゃ困るんでしようよ」

笑みを浮かべるフェレンが、缶の底をルードに向けた。直後、薄っぺらいアルミ板へと変貌する。それを右目でまじまじと眺めると鼻で笑ってゴミ箱へと捨てた。

「貴様が燃え尽きるのは勝手だ。好きにしろ」

「この生命、燃え尽きるまでってな。ああ、シンフォギアとやりあつた」

「……それで」

「ありや、アンタの敵じゃあない。俺が適任だ」



「俺の敵は管理局だけだ」

そう言い残して、ルードは踵を返す。

「総長殿」

「なんだ」

「奢る、なんて一言も言っただけでねえですがね、俺」

「……ツケとけ」

「へいへい」

全く、話をするだけでも冷や汗ものだ。フェレンは気配が消えたことを確認すると、深く息を吐き出した。

「なんで俺みたいなのやつがアンタらと肩を並べていられるか不思議でならねえや」

ボヤきながら、三本目の飲み物を自販機から取り出してフェレンは飲み干す。身体の内側から燃えるような鼓動の早鐘を鎮めるように――。

## Tr. 24 悪魔の狼藉

フィーネは、屋敷で面白くない顔をしていた。それはクレイモアでもあり、米国連邦聖遺物研究機関であり、待機しているフレイムデバイス達が原因である。何一つとして状況は好転しなかった。あの狐……柳クルヴィスの存在が何よりも厄介だ。

「……ふん、面白くない」

しかし既に目前に迫ったサクリストD——『デュランダルの護送』の日本政府から二課の活動についての風当たりはますます強くなっていく。その不信感というのも、異端技術だけでなく超越技術が追い風となっていた。防衛大臣である広木威椎の抹殺も米国政府との共謀により、決行間近である。

「ういーっす！ ただいまあ！」

起爆剤が帰ってきた。人があれやこれやと頭を悩ませているというのに、この男ときたら何を思ったか世界万国珍妙奇々怪々デザートフェスティバルというよくわからない催しに一般客として一週間ほど米国へ飛んでいた。らしくもない満面の笑みを浮かべている。それは、この男と出会ってから初めて見せる無邪気な表情だった。歳相応に上機嫌なマスターの両手には溢れんばかりの大荷物。それらを全てテーブルの上に広げる。

「どうしたフィーネ、面白くねえツラして」

「機嫌が良さそうに見えるかしら？」

「いいや、全然。腹でも減ってるか？ なんか作るぞ」

「結構よ」

「ちえー。よ、クリス。元気にしてるか」

「ったく、この気まぐれ野郎。どんだけお天気気分だよ」

マスターは上機嫌なまま袋を開ける。一つはクリスに。もう一つはフィーネへと手渡した。

「土産だ」

「……あ、あんがとよ」

クリスに渡されたのは、小さな宝石のブレスレット。フィーネに

は、銀の蝶を模した彫刻。面食らいながらも、眺めていた。

「それで？　これでご機嫌取りのつもりかしら？」

「いいやあ、まさかそんな。今は機嫌が良いんだ。気分も最高。手伝えることはあるか？　つと、そっちの三人に渡す土産もあるんだ」

ポケットから取り出したのは、三つのデバイス。シャドウ達が首を傾げていた。

「もののついでに、クレイモアとも接触してきた。戦闘データ貰ってきたから多少は経験値になるだろ」

《それは助かる。ありがたく使わせてもらおう》

「それで？　こっちで何か動きは？」

「近いうち。防衛大臣を排除するわ」

「そういうことなら、俺にやらせてくれるかい」

「残念だけど、出る幕はないわよ。すでに米国政府と話についている」

「んじゃ、俺は万が一に備えておくさ。失敗、なんてことがあったら困るだろう？」

「……そこまで言うなら、仕方ないわね」

「まっかせとけ。俺は包丁握ってるよりそっちの方が本職なんだ」

屈託のない笑みを残して、マスターは荷物をまとめて屋敷の厨房へと軽い足取りで消える。

—— 広木防衛大臣の殺害は、米国政府の協力者によって問題なく成功した。しかし、それを見守っていたマスターは面白くない顔をしている。

フルフェイスヘルメットの下、眉を寄せていた。

目的の書類を車に積み込んだ米国人達の後を追う。まったく、面白くない話だ。銃殺などと。やるのならば、そう！　もっと派手にやっただ方が面白いに決まっているというのに！　銃じゃ面白くない。手応えがない。楽しみがない。撃鉄一つで終わらせてしまうにはあまりにもつたない話だ！　ならばどうするか、ならばこうした方がいい。テロのお手本というのは、こうするものだ。

フィーネに目的のブリーフケースを譲渡して、米国人達は去つていく。報酬も政府とフィーネの両方から受け取り、ほくほく顔で車を走らせていた。長期滞在は不審がられる。日本はそういった観点が薄いとは言え、用心に越したことはない。

アメリカ行きクルージング、優雅な船旅。豪華客船へのチケットを握りしめて特務隊は港へ車を走らせる。だが、背後から追跡してくるバイクがあつた。並走すると、互いに速度を落としていく。

「よお！ アメリカ人！ お疲れ様！ つまらないものだが、持っていきな！」

「フィーネのお付きか。ありがとうよ！」

小包を受け取った特務隊は、気さくに手を振ると車の窓を閉める。そして、マスターはバイクを停めて手を大きく振った。バックミラーを見ていた米国人達は笑う。しかし——その手が握られていることに気づいて、凝視した。

手に握られているのは——なんだ？ ライターほどの小さな——。次の瞬間。車内が爆発した。完全な逃げ場のない密室空間が膨張して、破裂した。

爆発と黒煙を上げて一回転し、横転した車両を見てマスターは笑みを浮かべる。心底、愉しそうに。心の底から笑った。

「ヒ、ヒツヒツ——ヒヤツヒヤツヒヤツ！ ゲエアヒヤハハハハハハッ!! ああいいなあ、最ツ高だッ！ やっぱ人を殺すつてのはこうでなきやあ面白くねえよ、アメリカ人！ お前達のやり方は、あまりにも「おざなり」過ぎる！ 銃で人を殺してどうするよ。鉛玉で人を殺してどうなるよ。人を殺す時は、この手に限るだろうがよッ！」料理をするように。隠し味にたっぷりきもちと殺意を込めて。下ごしらえから調理して料理して食卓へ並べて平らげて。両手を合わせて合掌——。

「心配するなよ、跡形もなく全部俺が片付けてやる」

クレイモアへの入団試験はひとまずクリア。後は、フィーネを仕掛けるだけだ。さあて、どうしてやろうかあの女狐を陥れるには。

爆発事故。広木防衛大臣の死亡。その情報が二課へと伝達され、衝撃が走った。サクリストDの移送——その護衛に響が選抜される。管理局からは、なのはとヴィータの両名。のみならず現場指揮官としてクルヴィスまでもが。それに奏が猛反対していた。

しかし、ノイズキャンセラーを有しているのはクルヴィスだけ。結界による調律空間の形成も限度がある。クルヴィス自身、どうやって完成させたのかすら記憶が定かではない。深夜テンションって怖い。「だけどよお、それならあたしが響と出張ったほうがいいんじゃないか。ダンナ」

「いや、翼が動けない以上は両翼を羽撃かせるわけにはいかん。奏、今暫くの辛抱だ」

「そうまで言うなら仕方ないね。あたしは二課の留守を守るよ」

「奏さん。わたし、頑張ります！ だから、平気へっちゃらです！」

「ああ、信じてるよ。響ならやれるさ。管理局の二人も」

「アタシとなのはが出るんだ。敵なんかいねーよ」

「あの一、一応俺も出るんすけど数にすら入ってねーつすか、そうっすか」

「うっせ。人を騙くらかすくらいしか取り柄がねーんだから黙ってろ」

「ヴィータちゃん。本当のことでもクルヴィスさんかわいそうだよ」

「さりげない追い打ちがピンポイントで致命傷なんですけど」

出動前から既にボロボロなのが約一名。

「まあまあ、クルヴィスさん。こっちはうちに任しとき。いざつて時は風鳴司令がやってくれるで」

「ノイズ以外なら俺に任せておけッ！」

（全幅の信頼と説得力しかねー）

出撃前に、クルヴィスは自分の持つデバイスをチェックする。予備のデバイスも部屋の段ボール箱をひっくり返して発掘してきた。掃除？ 投げ捨てた。内部データの更新も完了している。

車両は全部で四両。了子と響がデュランダルを運び、その護衛としてクルヴィスの運転する車両になのはとヴィータの両名。

デユランダルの移送、その道中にフレームデバイス——特にスピー  
ド特化の騎兵が介入してくることは十二分に考えられた。

Tr. 25 サクリストD

クルヴィスの運転する車に揺られるのはとヴィータの二人。その視線の先には了子と響の二人が運搬するデュランダル——二課の地下深くで管理されていた完全聖遺物。その性質は、無尽蔵のエネルギーを精製する。だが、現在は休止状態となっている。

「しつかしわかんねえなあ」

「なにが？ ヴィータちゃん」

「あんな錆びた剣がそんな力持つてるようには見えねえ」

「まー、起動していかない状態ですからね。そう見えるのも無理はないかと。面倒事が増えないことを祈るだけつすわ俺」

「今以上に頭痛める事態なんかあたしはゴメンだね」

「クルヴィスさんがしつかりしてくれないと私達も大変なんだからね」

「んじやあ俺の部屋の掃除、誰か手伝ってくださいませんか？ ダンボール

ひっくり返して驚きのゴミ屋敷と化しました」

「ちよつと厳しいかな。クルヴィスさん、ダメだよ。ちゃんと部屋は片付けておかないと」

「おめーは生活能力ねえのかよ」

「こんちきしょー！ 誰のせいでこんな怪我負ったと思ってやがんでしようか！ フレームデバイスぜってえゆるさねえ!!」

和気あいあいとした車内の空気、一方で了子と響は緊張感に包まれていた。

「~~~~~♪ しんぎーんはー、とお」

鼻歌混じりに上機嫌。マスターはフライパンから放ったパンケーキを宙で一回転させると、生焼けの面を滑り込ませるようにフライパンでキャッチした。その様子を見ていたクリスが相変わらず不機嫌そうにしている。

「緊張感のねえ奴だな。わかってんのか」

「なにがだよ」

「フィーネからの命令だ」

「立花響の拉致を諦めてないんだろ？ わあかってるって、腹ごしらえは大事だろ。チョコレートとクリーム、どっちがいい？」

「両方に決まってるんだろ」

「よくばりめ」

パンケーキを頬張りながらも、クリスはマスター睨んでいた。当人は新品の玩具を手にして鼻歌を歌っている。ツヴァイウイングの楽曲だ。

「シャドウとバスターの二人を同伴させる」

「あのライダーはいいのかよ」

「ツヴァイウイングに夢中らしい。風鳴翼がいないなら出撃しないとき。ま、俺としてもそれは助かるところだ」

テーブルの上にスーツケースを置くと、マスターはそれを開ける。中に入っていたのは、ベルトとカートリッジ、ボックスマガジン。だが、それらはクリスの見慣れない物だった。

「クレイモアからの餞別だ。さっすが次元犯罪組織、用意がいいな」

片隅に用意されているフルフェイスヘルメットもまた、クレイモアが別途用意したものだ。

「フィーネを裏切るってんなら容赦はしねえぞ」

「フィーネは俺を利用する。俺もフィーネを利用する。それに、なんの問題があるんだ？ お前は関係ないだろ、雪音クリス」

「大きく言ってくれるじゃねえかよ」

「ま、お互いバカやる年齢だがバカじゃない。喰い終わったら準備してくれよ」

「なあ」

パンケーキを平らげたクリスに、マスターがおしぼりを投げる。口の周りがベツタリとクリームソースだらけになっていた。

「ん……ぶはあ。なんで顔隠すんだよ」

「なんでってそりゃあ、犯罪者が顔晒して堂々と犯行するかよ。とっ捕まえてくれと言ってるようなもんだろ？」



目撃者の少ない深夜ならともかくとして、白昼堂々と二課を相手に襲撃作戦を企てているのだからマスターの懸念は尤もだ。

「それを言うなら、お前の方が心配だ。失敗するんじゃないぞ、クリス。俺はどうでもいいが」

「失敗するとも思ってたんのかよ」

「前回失敗したしな」

「それはお前が撤退しろって言ったからだろうが！ あの命令がなければアタシは今頃——」

「だったら命令聞かなきゃよかっただろうがよ」

「ッ……！」

「お前が二課に捕まろうがフィーネに見捨てられようが、俺は知ったこつちやない」

ガンベルトを装着し、ヘルメットを被る。ポケットにカートリッジを一発だけ入れてマスターはクリスを置いて屋敷を出る。

《マスター。貴様がライダーの代理を務めるといえるのか》

「はは、冗談言うんじゃない。俺が？ 騎兵の？ 無理言うな、俺は俺の仕事しかできねえよ。だからお前もお前らの仕事をすりゃいいんだ」

《了承した》

「んじゃあ、行こうか。俺の仕事はデユランダルの奪還。お前らの仕事はクリスの援護。クリスの仕事は立花響の拉致。足引っ張るなよ、お互いにな」

《問題ない。作戦行動を開始する》

——クルヴェイスがバックミラーを確認する。何事もなければ、と思っていたが案の定。後方から追跡してくる姿があった。それは、空中を飛行しているネフシユタンの鎧。そして、足元にテンプレートを展開しながら跳躍してくるシャドウ。

道路の舗装を引き剥がしながら高速機動で迫るバスター。そして、フルフェイスヘルメットを被った謎のライダーが一人。魔力反応その他が感じられないが、その一団と肩を並べている以上は協力者なの

だろう。

「——悪夢かよッ!!」

クルヴィスは思わず叫んでしまっていた。なのはとヴィータも驚いている。後続の車輛がネフシユタンの攻撃によって横転していた。

「退きやがれ! アタシの狙いはそっちの車輛だ!」

「つおい!? あつぶねえ!」

「ふぎや!? おいクルヴィス! 頭ぶつけたじゃねえか! 安全運転しやがれよな!」

振り下ろされる鞭を急ハンドルをきって避けたクルヴィスに飛ぶヴィータの非難。だが、現状においてハンドルを握る運転手が安全運転を心がける意味はない。

「安全運転ってのはですねえッ! ハンドル握ってッ! シートベルト締めてりヤッ! 安全運転なんですすよおッ!!」

「お前免許返してこいよおおッ!!」

「都会じゃ出来ない高速ドライブ、ノツてきたああー!!」

「クルヴィスさん、ドラテクも持ってたんだ。ちよつと驚き」

「なのは、おめーはなに感心してんだ! イツテエ、頭ぶつけたぞ!?

二回だぞ、二回!」

急ハンドル、シフトレバーシフト——わざとスリップさせた車体を掠めるバスターの砲撃。サイドミラーが吹っ飛んだ。カウンターステアで持ち直して、ギアを入れ直すと加速させる。

「でも、流星にこれじゃ厳しいよね。クルヴィスさん、私が迎撃に出るね」

「アタシもだ! これ以上こいつの運転に付き合ってられつか!」

「グッドラックッ!」

「事故りやがれッ!」

サムズアップして応援するクルヴィスに捨て台詞を残して、ヴィータはなのはに続いて車から飛び出した。地面に転がり落ちる前にデバイスを起動させるとシャドウとバスターの足を止める。後続のライダーはそんな二人を避けてクルヴィスの運転する車と並走していた。

風防越しに互いの視線が交差する。だが、顎で視線を促すと了子の運転する車にネフシユタンの鎧が迫っていた。

「……俺に行けと?」

「……」

無言で頷くと、速度を少しだけ緩める。意図は分からんが、とにかく凄まじく嫌な予感がしていた。言葉を交わすまでもなく意思疎通出来ている時点で、何かと気が合いそうな気がする謎のライダーに催促されたのでクルヴィスは仕方なくエンジンを吹かす。

狭い車内でデバイスを起動させる。創造するのは手持ち槍、投擲用のジャベリンを適当な魔力量で形成すると、ネフシユタンに向けて投げつける。相手は飛行している以上、あっさり回避された。

「邪魔、するんじゃない!!」

「うっひよああああッ!」

華麗なサイドターンでボンネットが吹き飛ばされるのを回避すると、全速力で後ろを向きながら了子の車と並走する。

「さっすがクルヴィス君。そのドラテクどこで学んできたの?」

「主に趣味ですッ! 了子さん、後ろの窓開けといて下さい。そっち乗り移りますんで」

「ええ、この状況で!」

クラクションを鳴らしながら挑発するクルヴィスの誘いにネフシユタンの少女は——口元を引きつらせて乗った。

「いっい度胸だあッ! こいつで、おしやかにしてやるッ!」

振り上げる両手の鞭から、黒い電撃が迸る。包み込むように白い球状のエネルギーを形作り大きく振り上げた。

それを見ていたクルヴィスは頭をクールダウンさせて、一呼吸。思考速度をフルドライブさせて迅速かつ正確に行動を実行に移す。

シートベルトを外し、助手席のドアを魔力で吹き飛ばし、十文字槍を了子の車に引っ掛ける。アクセルをデバイス突き刺して固定させた。槍を掴みながら、運転席のドアを蹴って反動と共に身体を勢い良く引き寄せる。

クルヴィスが車輛から離脱して飛び移るのとはほぼ同タイミングで

爆発、炎上した。しっかりと身を守る防護壁は起動している周到さ。頭から車内に飛び込んだ。

「だ、大丈夫ですかクルヴィスさんツ!?」

「ハリウッドばりのアクション、ノーコメントツ！ カメラ回ってないのが残念かな！」

「余裕そうですね」

「一周回って笑いたくなる」

帰らせてえ。クルヴィスはつくづくそう思った。

大人いわく、思いつきは数字で語れるものではない——。製薬工場へと逃げ込んだ子だったけど、それでもネフシユタンの追撃はしつつこく、撒けるような速度ではなかった。意を決してここで戦う覚悟を決める響だが、その胸中にあるのは、和解の文字。

なのはとバスターの砲撃戦、ヴィータとシャドウの空戦が繰り広げられている最中、漆黒のバイクを運転している謎のライダーは停車すると降車してのんびりと歩いて近づいてくる。

クルヴィスは了子と響を退避させると、十文字槍を構えた。

『……』

『……』

無言で睨み合い、穂先を突きつける。相手はそれを威嚇、或いは警告とみなしたのかそこで足を止める。鼻で笑う仕草を挟み、拍手を送ってきた。

『いいや、驚いた。アンタ思いの外身体能力高いんだな』

電子音声によるくぐもった男性の声に、クルヴィスはそれが機械ではなく人間であることを感じ取る。

『そりやどうも。感心するなら金をくれって感じだけど』

『ハハハ、そりやそうだ。だが生憎とこちらも仕事の都合だ』

親指で弾き、宙に舞うカートリッジ。ベルトのバックルを開けて、手首を慣らす。

『時空管理局。そのデバイス技術は確かに脅威的だ。少なくともこの地球においては。だがお前らには圧倒的に足りていないものがある——』

『なに？ 常識？』

『それもそうだが。圧倒的に、遊び心とロマンが足りていない』

『は、なにそれ。激おこなんですけど俺』

声を大にして叫びたい。そんなの俺だって予算が下りれば突き詰めたいわこんちくしょう。こちら少ない予算で可能な限りデバイ

スの整備を回すので精一杯だわハゲ、バカ。根無し草！ クルヴィスが半ギレになる前で、相手は落ちてくるカートリッジをキャッチするとベルトのバックルに装填して、トリガーを引く。

『セツトアップ』

《認証——確認》

カートリッジシステムによる魔力充填。デバイスの起動における必要魔力量を補填するサブシステム。霧散した魔力が形成するのは、後ろ腰に二本の大型ナイフ。弾倉を兼ねた柄を握りしめて、抜剣する。撃鉄を起こし、トリガーを引けば弾薬の装填と同時に排莖を行うダブルアクション・ガンナイフ。違法魔導士達の間で一昔前に普及した、とある犯罪組織が用いた簡易量産型デバイス。その改良型。——であるとかないとかは、この際クルヴィスにとってはどうでもいい話である。

問題はそこではない。問題は、その起動方法が朝早くから放送している男児向けヒーロー番組の如く一連の動作であることだ。そしてそれはクルヴィス自身がメチャクチャハマっているジャンルでもある。

「チクショウ、そんなん——かつこいいに決まってんだろ！ 俺だつて予算下りたら作りてえよツ!!」

思わずクルヴィスの口から本音がだだ漏れた。装備した当人もそのフィット感に感心している様子。戦う前から何故か敗北感が付きまとう。今決めた。この相手は俺が仕留める。

『ハッハッハッハッハ！ やっぱそうか、そうなるよな！ 最高だアంతのそのノリ!』

「ぜってえ許さねえからな！ 牢屋にぶち込んでやるツ!」

『そりゃあ勘弁してくれ。向こう百年出られない』

順手に構え、クルヴィスは踏み込む。槍のリーチを活かした刺突。これを、鎌首を受け止める形で防いだ。——この対敵は、戦い慣れている。その一手だけで背筋が寒くなった。

十文字槍の特性を真つ先に殺しに来ている。動きが熟練の戦士だ。隙が無いと言ってもいい刺突を防ぎ、槍を引く暇を与えない。既に片

手でトリガーガードに指を引つ掛けてナイフを指先一つで垂らし、クルヴィスと距離を詰めている。

(冗談、じゃねえぞオイツ!?)

総毛立つ、目前に迫る死の直感。槍を手放し、強くその場に踏み込みながら、肩から相手を押し出す。胸板を圧迫して、呼吸を乱してから足払いの蹴撃、掌打の三手。距離を大きく離してからの、足で十文字槍を拾い上げる。

相手は背中から転がるように受け身を取って四つん這いになっていた。その姿を無様と笑う者はいない。まるで獣だ。まるで、凶獣のようだ。

「……」

力量を見誤るようでは長生きできない。クルヴィスは自分の直感に従う——アレは強い、少なくとも自分が相手をしていいような相手ではない。クレイモアに加担している犯罪者、そのリストを脳内で洗うが、該当するような人物像がまったく浮かばない。顔も名前も不明の、無貌の怪物。

「何者だ」

『俺が怪物にでも見えるか?』

どの口が言うのか。今の一手で自分は死を予感したというのに。次は引つ掛からないだろう。そうなれば、リーチを活かして相手を近づけないことが最善策となる。クルヴィスは左手に槍を投影する。二槍流を見て『へえ——』と感心した声を漏らす。

駆け出す。二刀の得物を撃鉄で叩き起こして。足元に薬莢が転がる。

実体刃を魔力刃で覆い、延長された刃を振るう。しなりながら迫る無色の魔力刃をクルヴィスは穂先で払う。相手は積極的に懐へ入ろうとしてくる、それを阻むように槍を巧みに操る。ヘルメットの真横、鼻先で火花を散らしても止まる気配がない。相手に気圧されて後ずさる形になっていた。

『ハハハ、ハッハッハア!』

(戦闘狂かよッ!)

この手の相手は、とかくヒートアップしてくると手がつけられない。かといって手を抜けば即座に首を飛ばされる。経験上、拘束が望ましい。しかし、勘がいいのか、誘い込む罠を仕掛ければ先んじて察知して距離を取る。狡猾にして残虐、熟練の戦闘狂。

無数に散らした火花、丁々発止。汗ばんだ額から垂れる汗が頬の切り傷に染み込む。

「すう——」

整息。可能な限り相手に気取られない隙の少ない動きで深く息を吐き出す。相手はその間にガンナイフのカートリッジを再装填していた。

響は無数のノイズを相手取り、その動きは以前とは比べ物にならない程の成長を見せている。あれならば任せても大丈夫だ。しかし、なのは達は——？ クルヴィスは、ふと道路上で激戦を繰り広げている二人に視線を向けた。

固定砲台としてバスターは道路にアンカーを打ち込み、なのはの射撃と砲撃を全て己の火力で相殺させている。

シャドウとヴィータの戦闘も近接と射撃を交えて高速戦闘が続いていた。その様は、とても自分のような陸戦魔導士には出来ない芸当だ。

（ああまったく、嫉妬つてのは醜いと分かっても切り離せない感情ですこと。どいつもこいつも怪物揃いで泣きたくなくなってくる）

才覚のある人材はどうして、こう——自分の目につく場所にばかり集まるのだろうか。